

る也。衆人道ふ、老爺今日事已に做出し來了す、且、通箇商量せん。老都管道ふ、你們甚の見識有る。衆人道ふ、是我們、不是了す、古人言ふあり、火燒身に到れば、各自去掃し、蜂蠶懷に入れば、隨即衣を解くと、若還楊提轄這裏に在らば、我們都説き過せず、如今他自ら去り得て去向を知らず、我門回去りて梁中書相公に見え、何ぞ都て推して他の身上に在かざる、只説道ふ、他一路上衆人を凌辱打罵し、我門を逼迫し得て、都て動き得ず、他と強人と一路を做し、蒙汗藥を把つて俺門を將て麻翻し了し、手脚を縛了し、金寶を將て都て擄去し了る。老都管道ふ、這話也説得て是なり、我門天明を等ち、先づ本處の官司に去いて

【八】 皆皆で相談せん。
 【九】 わるかつた。
 【一〇】 強盗と組になり。
 【一一】 訴へ出で。
 【一二】 着落は申わたすといふに

近し。
 【一三】 便了、數々前に出づ。宜しからんなり。
 【一四】 かりの。

を動かし太師に申覆して知るを得しめ、濟州府に、着落し、這の(一)夥の強人を追獲せしめば、便了せん。次日天曉、老都管自ら一行人と和に濟州府の、該管の官吏に來りて首告す。話下に在らず。且説く、楊志朴刀を提着し、悶悶已ます、黄泥岡を離れ、南を望みて半日を行行了す、看看又走了し、半夜林子裏に去いて歇了し、尋思し道ふ、盤纏又沒し、眼を擧ぐるに箇の相識無し、却て是怎地にして好からん。漸漸に天色明亮、只得たり早涼を趁ひて行く。又走了する二十餘里、正に是、

面皮青毒雄豪を選くす、白送す金珠の十一挑。今日何と爲て行くこと急急なる、知らず、若箇の藤條を打つを。

當時楊志走り得て辛苦し。一酒店の門前に到る。楊志道ふ、若些の酒を得て喫せずば、怎地、打熬し得て過ぎん。便ち那の酒店に入り去り、這の桑木の、卓凳座頭上に向て坐了し、身邊に朴刀を倚了。只見る竈邊の一箇の婦人問道ふ、客官火を打すを要するにあらざる莫きや。楊志道ふ、先づ兩角の酒を取り來りて喫せしめよ、些の米を借り來つて飯を做せ、肉有らば些箇を安排せよ、少停して、一發に錢を算して你に還さん。只見る那の婦人先づ一箇の、後生をして來つて面前に酒を篩がしめ、一面に飯を做し、一邊肉を炒し、都て把來つて楊志に喫せしむ。楊志身を起し、朴刀を綽了、便ち店門を出づ。那の婦人道ふ、你的の酒肉飯錢、都て曾て有らず。楊志道ふ、待て俺回り來つて你に還さん、權に咱に、賒し一賒せよ。説了して便ち走る。那の酒を篩ぐの後、生、趕將出來し、楊志を揪住す。楊志に一拳に打翻され了す。那の婦人、屈を叫起し來る。楊志只願走る。只見る背後より一箇人趕來り、叫道ふ、你那厮、那裏に走り去る。楊志頭を回して看る時、那

- 【一五】 むだに送る。
- 【一六】 若箇は那箇のごとし、誰が藤條で打つて趕立てるか知らぬが、行くこと甚だ急なると、楊志に戯れいひかけたる詩意なり。
- 【一七】 こらへてゐられぬ。
- 【一八】 つくゑ、こしかけ、座席。
- 【一九】 すこし。
- 【二〇】 一しよに。
- 【二一】 わかいもの。
- 【二二】 懸にしておいてくれ。

人 大に膊を脱着し、桿棒を拖着し、搶盜將來す。楊志道ふ、這厮却是晦氣ならずや、倒つて來つて酒家を尋ぬ、と脚を立てて住了して走らず、後面を看る時、那の酒を篩ぐの後生、也(一)條の標文を拿り、後に隨ひ起來り、又三兩箇の莊客を引着し、各桿棒を拿り、飛ぶも也似て都て逃將し來る。楊志道ふ、這厮一箇の結果了せば、那厮們都て敢て追來らじ。便ち手中の朴刀を挺了し來り、這漢と闘ふ。這漢また手中の桿棒を輪轉し、搶來して相迎ふ。兩箇闘了する三二十合、這漢怎地楊志に敵し得ん、只架隔遮欄、上下線閃を辨じ得るのみ。那の後來的の後生、并に莊客、却て待に一發に上らんとす。只見這漢托地に圈子外に跳出來り叫道ふ、且都手を動かすを要せざれ、兀那朴刀を使ふの大漢、你姓名を通すべし。那楊志胸を拍着して道ふ、酒家は、行て名を更めず、坐して姓を改めざる青面獸楊志の便ち是なり。這漢道ふ、是東京の殿司楊制使にあらざる莫き麼。楊志道ふ、你怎地にして知道する、酒家は是楊制使なり。

- 【一】 大はだぬぎ。
- 【二】 標文さすまたの如きものならん。十字鎗といふ人あり。
- 【三】 牲口、食事畜類。
- 【四】 挑動以下、牲口を解くことの上なるをいふ。
- 【五】 もとの處即故郷。
- 【六】 たび商人。

這漢槍棒を撒了し、便ち拜し道ふ、小人眼有り泰山を識らず。楊志便ち這人を扶け起し來り問道ふ、足下は是誰ぞ。這漢道ふ、小人は原是開封府の人氏、乃是八十萬禁軍的都教頭林冲の徒弟、姓は曹、名は正、祖代屠戸の出身、小人 牲口を殺し得て好く、觔を挑し骨を剛し、開剝推割す、只此人に操刀鬼と喚做さる。本處の一箇の財主、五千貫の錢を將て、小人をして此の山東に來つて

と做らしむ、想はず本を折了し、郷に回り得ざるに因る爲に、此に在りて入贅し、這箇の莊農人家に在り、却纔竈邊の婦人は便ち是小人的の渾家、這箇の標文を拿るは、便ち是小人的の 妻舅、却纔小人制使と手を交へて制使の手段と小人師父林教師と一般なるを見る、此に因つて抵敵し住へず。楊志道ふ、原來你是却是林教師の徒弟、你的の師父高太尉に陷害され、落草し去了す、如今見に梁山泊に在り。曹正道ふ、小人也聽得たり人の這般に説將來るを、未だ眞實を知らず、且請ふ制使家に到り少歇せよ。楊志便ち曹正と同一に再び酒店裏に回到し來る。曹正楊志を請ひ、裏面に坐下せしめ、老婆と妻舅とをして、都て來りて楊志を拜了せしめ、一面には再び酒食を置き相待つ。飲酒の中間、曹正動問し道ふ、制使何に縁つて此に到る。楊志制使と做りて花石綱を失陷し、并に如今又梁中書的の生辰綱を失陷したる一事を把つて、頭より備

【一】 こじうと。

細に告訴し了す。曹正道ふ、既に然く此の如くならば、制使且小人家裏に在りて、住する幾時せよ、再び商議する有らん。楊志道ふ、此の如くば却て是深く你的の厚意に感ず、只恐らくは官司追捕將來せん、敢て久住せず。曹正道ふ、制使這般に説く時、那里に投じ去らんと要るや。楊志道ふ、酒家梁山泊に投じ去つて你的の師父林教師を尋ねんと欲す、俺先前に那里に在つて經過する時、正に他の下山し來るに撞着し、酒家と手を交ふ、王倫俺兩箇の本事一般なるを見了し、此に因つて都て留めて山寨裏に在き相會せしむ、此を以て你師父林冲を認得せり、王倫當初苦苦に相留む、俺却て肯て落草せず、

如今臉上又金印を添了し、却て去つて他に投透する時、好没志氣なり、此に因つて躊躇未だ決せず、進退兩難なり。曹正道ふ、制使見得て是なり、小人也人の傳説するを聽得たり、王倫那厮は心地區窄にして人を安んじ得ずと、説ふ我師父林教頭上山の時、他的の氣を受盡すと、若かず、小人の此間離るること遠からず、却て是青州の地面に座山あり、二龍山と喚做す、山上に(一)座寺あり、寶珠寺と喚做す、那の座山は、生來却つて好く這座寺を裹着す、只一條路有りて上り得て去く、如今寺裏の住持俗に還り頭髮を養ふ、餘者和尙都て隨順了す。説道す他の聚集的の四五百人、家を打し舍を劫す、頭爲る那人は金眼虎鄧龍と喚做す、制使若し落草に心有る時は、到つて那裏に去いて入夥せば、身を安んずるに足る可し。楊志道ふ、既に這箇の去處有らば、何ぞ去いて奪ひ來つて安身立命せざらん。當下曹正の家裏に就て住了して一宿し、些の盤纏を借了し、朴刀を拿了し、曹正に相別し、脚步を拽開し、二龍山に投じ來る。一日を行了し、看る看る漸く晚れんとす、却て早く一座の高山を望見す。楊志道ふ、俺林子裏に去いて且一夜を歇み、明日却て山に上り去らん。林子裏に轉入し來り、一驚を喫了す、只見る一箇の胖大の和尚、脱し得て赤條條的、背上に花綉を刺着し、坐して松樹の根頭に在りて乘涼す。那の和尚楊志を見了し、樹根頭に就て、禪杖を掉了、跳將起來し、大喝し道ふ、兀那撮鳥、你是那裏より來るのぞ。正に是、

【一〇〇】 いくぢがない。
【一〇一】 平字疑ふべし。
【一〇二】 珠寶の荷物をなくなして、寶珠寺に勘定を取らうと

んとす。寺裏の強人に投入せんと要し、先づ寺外の和尚を引出す。楊志聽了して道ふ、原來也是 關西の和尚、俺と他とは郷中なり、他に一聲を問はんと。楊志叫道ふ、你是那裏より來るの僧人と。那の和尚也説を回さず、手中の禪杖を輪起し、只顧に打來る。楊志道ふ、怎奈ぞ這秃厮の無禮なる、且他を把り來つて(一)口氣を出さん、と手中の朴刀を挺起し來り、那の和尚に逢る、兩箇林子裏に就て一來一往、一上一下、兩箇放對す。但見る、

兩條の龍寶を競ひ、一對の虎喰を争ふ。禪杖起り、虎尾龍筋の如く、朴刀飛び、龍鬚虎爪に似たり。醉崙崙、忽喇喇、天崩れ地塌ち、陣雲の中、黒氣盤旋す。惡狠狠、雄赳赳、雷吼え風呼び、殺氣の内、金光閃爍す。兩條の龍寶を競ひ、嚇し得たり那の身長力壯、霜鋒に仗り周處眼に光無く、一對の虎喰を争ふ、驚かし得たり這の膽大心豪、雪刃を施して下莊魂魄喪ふ。兩條の龍寶を競ふ、眼珠彩を放ち、尾は擺し得て水母の殿臺搖ぐ。一對の虎喰を争ひ、野獸奔馳し、聲震ひ得、山神長髮豎つ。

當時楊志と那和尚と鬪つて四五十合に到り勝敗を分たず、那の和尚箇の破綻を賣り、托地に圈子外に跳出し來る、一聲、且歇めと喝す。兩箇都て手を住了す。楊志暗暗地に喝采し道ふ、那裏より來るの這箇の和尚ぞ、眞箇に好本事、手段高し、俺却て 剛剛地に只他に敵し得て住む。那の僧人叫道

する。滑稽の言也。
【一〇三】 楊志も關西そだち故、其語音をききてかく悟る也。
【一〇四】 わづかに。

ふ、兀那の青面の漢子、你是甚麼の人ぞ。楊志道ふ、酒家は是東京の制使楊志の便ち是なり。那和尚道ふ、你是是東京に在りて刀を賣り、破落戸牛二を殺す的ならずや。楊志道ふ、你俺が臉上の金印を見ずや。那和尚笑つて道ふ、却て原來這裏に在て相見す。楊志道ふ、敢て師兄却て是誰なるを問はず、何に縁りて酒家の刀を賣るを知道するや。那和尚道ふ、酒家は是別人ならず、俺は是延安府の老种経略相公帳前の軍官魯提轄の便ち是なり、三拳に鎮關西を打死したる爲に因りて、却て五臺山に去きて淨髮して僧人と爲る、酒家の背の上に花繡あるを見て、都俺を叫んで花和尚魯智深と做す。楊志笑ひ道ふ、原來是自家の郷里、俺江湖上に在りて多く師兄の大名を聞く、説道するを聽得たり、師兄大相國寺裏に在りて掛搭すと、如今何故に來つて這裏に在る。魯智深道ふ、一言盡し難し、酒家大相國寺に在りて菜園を管す、那豹子頭林冲の高太尉に他の性命を陷害せんと要らるるに遇着す、俺却て路に不平を見て、直に他を送つて滄州に到り、他の一命を救す。想はざりき那の兩箇の防送の公人回來り、高俅那厮に對して説道ふ、正に野猪林裏に在りて林冲を結果せんとす、却て大相國寺の魯智深に救せらる、那和尚直ちに滄州に送致す、此に因りて他を害し得ずと、この直娘賊、酒家を恨殺し、寺裏に分付す、長老俺が掛搭を許さず、又人を差し來つて酒家を捉へんとす、却て一夥の潑皮の通報を得、是那厮的の手に着せず、俺に一把の火もて那的菜園の廨宇を燒了せらる、逃走し

【三三】 直娘賊甚しき罵辭也、高俅をさす。

【三六】 あいつの手にからず。

て江湖上に在り、東又着せず、西又着せず、孟州十字坡に來到して過ぎる、險些兒に箇の酒店裏の婦人に性命を害されんとす、酒家を把つて蒙汗藥に着け麻翻了す、他的の丈夫の歸來的早きを得て、酒家の這般の模様を見了し、又俺的の禪杖戒刀を看了し、喫驚し、連忙に解藥を把つて俺を救ひ醒まし來る、因て酒家の名字を問起し、俺を留住して幾日を過了せしめ、義を酒家に結びて弟兄と做す。那人夫妻兩箇亦是江湖上の好漢、有名的、都他を叫びて菜園子張青、其妻を母夜叉孫二娘と叫做す、甚だ是好義氣、四五日を住了し、打聽したる、這裏の二龍山寶珠寺、以て身を安んず可きを、酒家特地に來りて他の鄧龍に逢りて入夥せんとす、耐へ耐し那厮酒家を安着して這山上に在くを肯せず、俺と厮併し、又酒家に敵し過さず、只這山下の三座の關を把つて牢牢地に拴住す、又別路の上り去る沒し、那の撮鳥、你的の叫罵に由せて、只是下り來つて厮殺せず、酒家を氣し得て正に這裏に在りて箇の委結沒きを苦む、想はざりき却て是大哥來る。楊志大に喜び、兩箇林子裏に就て、剪拂了り、地に就て一夜を坐了す。楊志刀を賣つて牛二を殺死する的事、并に生辰綱を解りて失陷する一節を都て備細に説了し、又曹正指點して此に來るの一事を説き、便ち道ふ、既に是關隘を閉了す、俺們這裏に在る休れ、如何にして他の下り來るを得ん、若かず且曹正の家に去つて商議せんと。兩箇厮趕着し行き、那の林子を離了し、曹正酒店の裏に來到す。楊志魯智深を引いて他と相見了しせしむ。曹正慌忙置酒して相待ち、二龍山を打たんとす

【三七】 危く。

【三八】 叩頭挨拶。

一事を商量す。曹正道ふ、若是端的に關を閉了する時、説ふ休れ你二位と、便ち一萬の軍馬有るも也上り去き得じ、此の如きは只智もて取る可し、力もて求むべからず。魯智深道ふ、耐耐し那の撮鳥、初め他に投する時、只關外に在りて相見す、俺を留めざるに因りて、【三九】 厮併し起來す、那厮の小肚上俺に一脚に點翻せられたす、却て待に他の性命を結果し了せんと要、他の那裏の人多くして救ひ了つて山に上せ去らる、この鳥關を閉了し、你的自ら下面に在つて罵るに由せ、只是肯て下り來つて厮殺せず。楊志道ふ、既に然く好去處ならば、俺と你と如何ぞ心を用ひ去つて打たざらん。魯智深道ふ、便ち是箇の道理の上去るを做す没し、他を奈何ともし得ず。曹正道ふ、小人【四〇】 一條の計策有り、知らず二位の意に中るや中らざるやを。楊志道ふ、願はくは良策を聞かせ。則箇曹正道ふ、制使也這般に打扮するを休め、只小人這裏の近村の莊家に照依して穿着し、小人這位の師父禪杖戒刀を把つて都て拿了し、却て小人的の妻の弟をして六箇の【四一】 火家を帯び、直に那山に送到し、一條の索子を把つて師父を縛了し、小人自ら活結頭を做すを會す、却て山下に去いて叫道ふ、我們近村に酒店を開くの莊家、この和尚我が店中に來りて酒を喫し、喫し得て大酔了し、錢を還すを肯んせず、口裏說道ふ、去つて人に報じ、來つて你的山寨を打たんと、此に因て我們聽得、他の酔了するに乘じ、他を把つて縛縛して這裏に在り、大王に獻與す

【三九】 たたかひ。
 【四〇】 くそ關。
 【四一】 則箇前に出づ、邦訓すべし、邦讀し難し。
 【四二】 なかま。
 【四三】 そらむすび。外觀は緊しく結びたるが如くして實は一挽すれば忽ち解くる縛法。

と、那厮必然我們的山に上り去るを放さん、他の山寨裏面に到りて鄧龍を見る時、索子を把つて活結頭を扱脱了し、小人便ち禪杖を遞過して師父に與へん、你兩箇の好漢一發に上らば、那厮走つて那裏に往き去らん、若し他を結果し了する時、以下の人は、敢て伏せずばあらず、此計若何。魯智深楊志齊しく道ふ、妙なるかな、妙なる哉、詩有り、證と爲す。
 乳虎龍と稱す亦枉げて然り、二龍山は許す二龍の蟠るを。人は忠義に逢ふ情偏に洽く、事は顛危に倒りて策愈全し。

當晩衆人酒食を喫了し、又些の路上の乾糧を安排了し、次日五更に起來し、衆人都喫し得て飽了し、魯智深的の行李包裹は都て寄せて曹正の家に放在す。當日楊志、魯智深、曹正、小舅并に五七箇の莊家を帶了し、路を取つて二龍山に投じ來る。响午後直に林子裏に到り、衣裳を脱了し、魯智深を把つて活結頭を用つて索子を使ひ縛了す、兩箇の莊家をして牢牢地に索頭を牽着せしむ、楊志日頭を遮る涼笠兒を戴了し、身に破れたる布衫を穿ち、手裏に倒さまに朴刀を提着し、曹正他的の禪杖を拿着し、衆人都て棍棒を提着し、前後に在りて簇擁着し、山下に到りて、那關を見る時、都て強弩硬弓灰瓶砲石を擺着し、小喽囉關上に在り、這箇の和尚を縛得し來るを見し、飛ぶも也似て山上に報じ去る。【四四】 多様時にして只見る兩箇の小頭目關に上り來り、問道ふ、你等何處の人ぞ、我這裏に來りて甚麼を做す、那裏に這箇の和尚を捉へ得來

【四四】 しばらく。

る。曹正答へ道ふ、小人等は是這の山下の近村の莊家、一箇の小酒店を開着す、這箇の胖和尚、不時に我が店中に來りて酒を喫す、喫し得て大醉し、肯て錢を還さず、口裏に說道ふ、梁山泊に去いて千百箇の人を叫び來り、此の二龍山を打ち、你的この近村坊と和に都て洗濯し了せん、此に因りて小人只得たり又好酒を將つて他を請ひ、灌し得て醉はしめ了し、一條の索子這所を縛縛し來り、大王に獻與し、我等村鄰孝順之心を表し、村中の後患を免れ得んとす。兩箇の小頭目這話を聽了り、天に歡び地に喜び說道ふ、好了、衆人此に在りて少く一時を待て。兩箇の小頭目就ち山に上り來りて、鄧龍に報知し、那の胖和尚を拿得て來ると説ふ。鄧龍聽了りて大に喜び、叫びて山に解上し來らしめよ、且這所の心肝を取り來りて下酒と做し、我が這點の冤仇の恨を消さん。小喽囉令を得て、來りて關隘の門を把りて開了し、便ち送上せしめ來る。楊志曹正魯智深を緊押し、山に解上し來る。那の三座の關を見る時、端的に峻峻にして、兩下裏の山、環繞し將來し、這座寺を包住す。山峰生り得て雄壯、中間只一條の路、關に上り來る。三重の關上、欄木、砲石、硬弩、強弓を擺着し、苦竹鎗密密地に攢着す。三處の關開を過得、寶珠寺の前に到りて看る時、三座の殿門、一段鏡面も也似たる平地、週遭都て是木柵を城と爲す、寺前山門下、七八箇の小喽囉を立着す、魯智深を縛し得て來るを見し、都て手を指し罵りて道ふ、你這の秃驢大王を傷け了る、今日また拿了せらる、

- 【四五】 すつかり打たひらげる。
- 【四六】 酒を飲ませて。
- 【四七】 酒のさかな。
- 【四八】 攢着はあつまる也。
- 【四九】 づくにふ。

慢慢的に這所を碎割し了せん。魯智深只聲を做さず、佛殿に押到されて看る時、殿上都て佛を把り來つて擡去し了し、中間一把の虎皮の交椅を放着し、衆多の小喽囉鎗棒を拿着し、立つて兩邊に在り、少刻にして只見る兩箇の小喽囉鄧龍を扶出し來りて交椅上に坐在せしむ。曹正楊志緊緊地に魯智深を挈着して階下に到る。鄧龍道ふ、你那厮秃驢前日我を點翻し了し、小腹を傷了す、今に至りて青腫未だ消えず、今日也我を見る的の時節あり。魯智深怪眼を睜圓し、大喝一聲、撮鳥走る休れといふ。兩箇の莊家索頭を把つて只一拽し、活結頭を拽脱し了し、索子を散開す。魯智深曹正の手裏就り禪杖を接過し、雲飛輪動す。楊志涼笠兒を撤了し、手中の朴刀を提起す。曹正又桿棒を輪起す。衆莊家一齊に發作し、力を併せて向前す。鄧龍急に拵扎せんと待る時、早く魯智深の一禪杖に當頭に打着せられ、腦蓋を把つて劈いて兩半箇と做し、交椅と和に都て打碎せられ了す。手下的小喽囉、早く楊志に四五箇を擡翻せらる。曹正叫道ふ、都て來りて投降せよ、若從はざる者は、便ち掃除を行つて死に處せん。寺前寺後の五六百の小喽囉、并に幾箇の小頭目、驚嚇し得て呆了し、只得たり都て來つて歸降投伏するを。隨即鄧龍等の屍首を把つて扛擡し、後山に去つて燒化し了せしむ。一面去いて倉廩を點し、房舍を整頓し、再び去いて那の寺後を看る、多少の物件あり、且酒肉を把りて安排し來りて喫す。魯智深并に楊志、山寨の主と做了し、置酒して宴を設け慶賀す。小喽囉們

- 【五〇】 護送されて到る。
- 【五一】 そやつ。
- 【五二】 やりだし。
- 【五三】 まつかう。
- 【五四】 しらべ。

盡く皆投伏し了す。仍つて小頭目を設けて管領せしむ。曹正二位の好漢に別了し、莊家を領めて自ら家に回り去る。話下に在らず。正に是、

百刹雄奇にして、翠微に隠る、翻つて賊寨と爲り慈悲を假す。天の生せる神力の花和尚、棒を弄し刀を磨して住持と作る。

又詩一首有り、并に楊志に及ぶ、

智有り能く深くして智深を助く、緑林の豪客 叢林を主る。龍を降し虎を伏す眞の同志、獸面誰か知らん佛心有るを。

説かず魯智深楊志が自ら二龍山に在りて落草することを。却て説く、那の生辰綱を、押せる老都管并に這の幾箇の廂禁軍、曉に行き夜に住まりて北京に赶ぎ回る、梁中書府に到り得て直に廳前に至り、齊齊都て拜顔して地下に在り罪を告ぐ。梁中書道ふ、你們路上辛苦、多く你衆人に虧了、又問ふ、楊提轄何に在る。衆人告説ふ、説く可からず、這人は是箇の大膽忘恩的の賊、此間を離るるより五七日後、行得て黄泥岡に到る、天氣大に熱し、都て林子裏に在りて歇涼す、想はざりき楊志と七箇の賊人と通同し、假装して棗子を販する客商と做り、楊志約會して他と一路を做し、先づ七輛の江州車兒を推して、這の黄泥岡上松林裏に在りて等候せしめ、却て一箇の漢子をして一擔の酒を挑

【五五】 山の上の方、翠微なり。

【五六】 叢林は寺。

【五七】 降龍伏虎は道の至れる羅漢等の事。こは勇威の事にかけて作意せる也。

【五八】 護送せる。

【五九】 不可説は御話も出來ぬ。

げ來り、岡子上に歇下す、(五) 小的衆人、不合に他の酒を買ひて喫し、那厮に蒙汗藥を把りて都て麻翻し了され、又索子を將て衆人を網縛さる、楊志と那の七箇の賊人と、却て生辰綱の財寶并に行李を把つて、盡く車上に裝載して將了去る。見に今、本管濟州府に去いて呈告し了し、兩箇の虞候を留め、那裏に在りて衙に隨ひ聽候せしめ、賊人を捉拿せしむ、小人等衆人、星夜赶ぎ回來り、恩相に告知す。梁中書聽了り、大に驚き罵り道ふ、這の賊配軍、你是犯罪的の囚徒、我、一力你を擡擧して人と成さんとす、怎ぞ敢て這等不仁忘恩的の事を做す、我若他を拿住する時、碎屍萬段せん。隨即、書吏を喚び、文書を寫了し、當時人を差し、星夜濟州に來りて投下せしむ。又一封の家書を寫し、人をして也連夜に東京に上りて太師に報與して知道せしむ。且人を差はして濟州に去き公文を下すことを説かず、只説く、人を着て東京に上り太師府に來到して報知す、太師に見え了り、書札を呈上す。蔡太師看了し、大に驚き道ふ、這班の賊人甚是膽大なり、去年我が女婿の送り來るの禮物を將て、打劫し了し去り、今に至りて未だ獲ず、今年又來つて無禮す、如何ぞ、干し罷まんと、隨即一紙の公文を押了し、一箇

【六〇】 わたくし衆人。

【六一】 さう爲すべからざりしに

然様したるが不合なり。あい

にくにといふに近く、ついと

いふにも近し。まさに他の酒

を喫すべからざりしにと讀み

て、其後に、他の酒を買ひて

喫す、と一句を添へて讀む時

は分明なり。

【六二】 其の管轄地方廳に告訴

し。

【六三】 もつばら。

【六四】 すたすたにせん。

【六五】 かき役。

【六六】 打捨置き得ん。

【六七】 公文をつくりわたし。

の 府 幹 を して 親 しく 自 ら 齎 了 せ し め、 星 夜 に 濟 州 を 望 み 來 ら し め、 府 尹 に 着 落 し、 立 ち ど ころ に 這 夥 の 賊 人 を 捉 拿 す る を 等 ち て、 便 ち 回 報 せ ん を 要 す。 且 説 く、 濟 州 府 尹、 北 京 大 名 府 の 留 守 司 梁 中 書 の 札 付 を 受 了 せ し よ り、 毎 日 理 論 し 下 さ ず、 正 に 憂 悶 す る の 間、 只 見 る 門 吏 報 じ 道 ふ、 東 京 太 師 府 裏 より 差 さ れ た る 府 幹、 見 に 廳 前 に 到 り、 緊 急 の 公 文 有 り、 相 公 に 見 ゆ る を 要 す と。 府 尹 聽 得 て 大 に 驚 き 道 ふ、 多 管 是 生 辰 綱 的 の 事 なら んと、 慌 忙 廳 に 陞 り 來 り、 府 幹 と 相 見 し 了 す、 説 道 ふ、 這 件 の 事、 下 官 已 に 梁 府 の 虞 候 的 の 状 子 を 受 了 し、 已 に 緝 捕 す る 的 の 人 を 差 し 賊 人 を 跟 捉 せ し む る を 經 た る も、 未 だ 踪 跡 を 見 ず、 前 日 留 守 司 又 人 を 差 し、 札 付 を 行 ひ 到 來 す、 又 尉 司 并 に 緝 捕 觀 察 に 仰 せ て 杖 限 跟 捉 す る を 經 着 せ

- 【六〇】 府の幹事人、用人のこと
- 【六一】 申渡し。
- 【七〇】 書札。
- 【七一】 おほかたは。
- 【七二】 尉司檢察、觀察は捕吏の頭。

- 【七三】 日ざりしてつかまへる。
- 【七四】 此の一千係の人。
- 【七五】 立等ばひどく急に等つ也。

る も、 未 だ 會 て 獲 る を 得 ず、 若 些 の 動 靜 消 息 有 ら ば、 下 官 親 しく 相 府 に 到 り て 回 話 せ ん。 府 幹 道 ふ、 小 人 は 是 太 師 府 裏 の 心 腹 の 人、 今 太 師 の 鈞 旨 を 奉 じ て 特 に 這 裏 に 差 來 し、 這 の 一 干 の 人 を 要 す、 行 に 臨 む 時 太 師 親 自 に 分 付 し、 小 人 を して 本 府 に 到 ら し め、 只 州 衙 の 裏 に 就 て 宿 歇 し、 立 つ て 相 公 の 這 の 七 箇 の 販 棗 子 的 并 に 賣 酒 一 人、 在 逃 の 軍 官 楊 志、 各 賊 の 正 身 を 拿 る を 要 す る を 等 つ、 限 は 十 日 に 在 り、 捉 拿 完 備 せ ば、 人 を 差 して 東 京 に 解 赴 せ し む、 若 し 十 日 に して 這 件 の 公 事 を 獲 得 せ ざ る 時、

【七六】 怕らくは先づ來り相公を請ひ、去つて沙門島に走一遭せざらんや、小人も也太師府に回り去り難く、性命も亦如何を知らず、相公信せずば、請ふ太師府裏より行來するの鈞帖を看よ。府尹看罷り、大に驚き、隨即便ち緝捕人等を喚ぶ。只見る塔下一人聲喏し、立つて簾前に在り。太守道ふ、你是甚人。那人稟し道ふ、小人は是三都緝捕の使臣何濤。太守道ふ、前日黄泥岡上打劫し了去らるるの生辰綱、是你の該管なり麼。何濤答道ふ、相公に稟覆す、何濤、這件の公事を領了してより、晝夜眠り無く、本管の眼明らかに手快きの公人を差し、黄泥岡上に去いて往來緝捕せしむ、是杖責を經と雖も、今に到りて未だ踪跡を見ず、是何濤の官府を怠慢するに非ず、實に奈ともする無きに出づ。府尹喝し道ふ、胡説なり、上緊しからざれば則ち下慢る、我進士出身してより、歴任して這の一郡の諸侯に到る、容易に同じきにあらず、今日東京の太師府より一幹辦を差し這裏に來到し、太師の台旨を領し、十日内を限り、須ち各賊の正身を捕獲するを要め、完備して京に解らんとす、若還限次に違了せば、我止官を罷めらるるのみにあらず、必ず我を陥れて沙門島に投じ走一遭せしめられんとす、你是箇の緝捕の使臣、倒つて心を用ひず、以て禍を致して我に及ぶ、先づ你這断を把つて、遠惡の軍州、雁も飛びて到らざるの去處に迭配せん、と便ち文筆匠を喚過し來り、何濤の臉上に去いて迭配州の字様を刺下し、甚の處の州名を空着す。發落し道ふ、何濤你若賊人を獲得すば、重罪決して饒恕せじ。正に是、

【七六】 怕不云云とつづくは、多分といふ意に歸す。多分沙門

臉皮 (合) 打稿太だ 乖張、自ら平安を要し
人は殃を受く。賤面計を作すを煩す無かる
べし、本心也合に細かに商量すべし。
却説、何濤台旨を領了し、廳前に下り來り使臣
房裏に到り、許多の 做公的を會集し、都て
機密房中に到りて公事を商議す。衆の做公的、
都て面相觀て、箭の雁の嘴を穿ち、鈎の魚
の腮を搭るが如く、盡く言語無し。何濤道ふ、
使用す、如今此一事の捉へ難き有れば都て聲を做さず、
衆人道ふ、觀察に上覆す、小人們、人草木に非ず、
豈省し得ざらんや、只是這一夥の客商と做
るは、必ず是他州外府、深山曠野の強人、
遇着せる一時他的の財寶を劫了し、自ら小寨裏に去りて
快活にするならん、如何ぞ拿的着せん、
便ち是知道するも也只他を看得一看するのみならん。
何濤聽了し、當初只五分の煩惱あり、
這話を説了され、又五分の煩惱を添了す。
自ら使臣房裏を離了し、馬に上りて家中に回到し、
馬を把つて牽きて後槽上に去りて拴了し、
獨自一箇悶悶已ます、正に

- 【三】 申渡し。
- 【四】 打稿、俗字面、意知り難し。
- 【五】 乖はそむく、張ははる、乖張はのばりかへる氣味也。
- 【六】 目あかし、賤者、捕吏の類、皆做公的也。
- 【七】 へいぜいは。
- 【八】 撰、金本儲に作る。
- 【九】 鳥あたりへ流されなざるといふなり。
- 【七】 管に該る、即ち其かかり。
- 【七】 配下の銳きとりて役人。
- 【七】 容易の事ではない。
- 【八】 いれずみ師。
- 【八】 何州に送配(ながす)するといふ。
- 【八】 州名だけをあげておく。

是、
雙眉重上す三 鏗の鎖、滿腹填平す萬斛の愁。
網裏に魚を漏らす何の處に覓めん、甕中に鼈を
捉る誰に向つて求めん。
只見る 老婆問道ふ、丈夫你如何ぞ今日 這般の嘴臉なる。何濤道ふ、你知らず、前日太守我に一
紙の 批文を委す、黃泥岡上一夥の賊人、梁中書が丈人蔡太師に與へて生辰を慶するの金珠寶貝
計十擔を打劫了するが爲なり、知らず是甚麼
様の人の打劫了し去るを、我這(一)道の
鈎批を領了するより、今に到るまで未だ曾て獲
るを得ず、今日正に去いて 轉限せんとなす、
想はざりき太師府又幹辦を差し來り、立つて等
つて這一夥の賊人を拿りて京に解するを要す、
太守我に賊人の消息を問ふ、我回復し道ふ、未
だ次第を見ず、曾て獲得せずと、府尹我が臉上將送配州の字様を刺下し、
只曾て甚の去處を填し去ら
ず、在後知る我が性命如何を。老婆道ふ、此の似くば怎地にして好からん、
却て是如何ぞ得了せん。
正に説くの間、只見る 兄弟何清來つて哥哥を 望す。何濤道ふ、
你來りて甚麼を做す、去いて
賭錢せず、却て來つて怎地する。何濤的の妻子 乖覺、
連忙に 招手して説道ふ、
阿叔、你且

- 【六】 鏗字用ひ得て俗、鏗は劍の如く、三刃。起承二句は眉を皺め眉間に筋をつくり、鬱鬱として腹中に愁を蓄ふることをいへるなり。
- 【九】 捉字原本不明、今しばらく捉に従ふ。
- 【九】 老婆は妻なり、必ずしも年老いたるにあらず。
- 【九】 そんなかほしてゐる。
- 【九】 命令を下されたり。
- 【九】 命令。
- 【九】 日のべを乞ふ。
- 【九】 弟也。
- 【九】 機嫌ききに來る也。
- 【九】 リこうもの、すばやし。
- 【九】 てまねき。
- 【一〇】 おとうとい。

賭錢せず、却て來つて怎地する。何濤的の妻子 乖覺、
連忙に 招手して説道ふ、
阿叔、你且

【101】厨下に來れ、你と說話せん。何清當時嫂嫂に跟了し、進んで厨下に到り坐了す、嫂嫂些の酒肉菜蔬を安排し、幾杯の酒を盪し、何清を請び喫せしむ。何清嫂嫂に問ひ道ふ、哥哥忒殺、人を欺負す、我中らざるも也那你的一箇の親兄弟、你便ち奢遮殺するも、只箇の緝捕觀察と做得たるのみ、便ち我をして一處に(一)盞酒を喫せしむるも甚麼の你を辱莫する有らん。阿嫂道ふ、阿叔、你知不知道せず、你哥哥(二)心裏自ら過活し得ざる哩。何清道ふ、他毎日大錢大物を起了し、那裏に去了や、有る的是錢と米と、甚麼の過活し得ざる處有らん。阿嫂道ふ、你知らず、這の黄泥岡上前日一夥の棗子を販ぐ客的客人あり、北京梁中書の蔡太師を慶賀するの生辰綱を打劫し去る、如今濟州府尹、太師の鈞旨を奉着し、十日内を限り、定めて各賊を捉拿して京に解するを要す、若還正身を捉へ着せざる時、便ち遠惡の軍州に刺配し去るを要す、你見ずや你的哥哥先に府尹に臉上に送配州字様を刺了され、只會て甚麼の丟處を填せず、早晚捉へ着せざる時、實に是苦を受く、他如何ぞ你和酒を喫するに心有らんや、我却纔酒食を安排して你に與へて喫せしむ、他悶了する幾時了、你却て他を怪み得ず。何清道ふ、我も也(三)誹誹地に人の說道するを聽得たり、賊有りて生辰綱を打劫了了し去ると、正に那裏の地面上に在てせる。阿嫂道ふ、只聽的たり黄泥岡上と說道せるを。何清道

【102】勝手においで。
 【103】人を馬鹿にす、我は用には中らずともは一箇の親兄弟。
 【104】辱莫、金本辱没に作る、意同じ。
 【105】やりきれないで居る。
 【106】ちらちらと。

ふ、却て是甚麼様の人劫了せる。阿嫂道ふ、叔叔你又醉はず、我纔に方に説了せり、是七箇の販棗子の客人打劫了了し去る。何清呵呵の大笑着道ふ、原來恁地なるか、是棗子を販ぐ客的客人なることを知道し了して、却て悶ゆるは怎地ぞ、何ぞ精細の人を差して去つて捉へざる。阿嫂道ふ、你倒つて説得て好し、便ち捉ふる處没し。何清笑ひ道ふ、嫂嫂倒つて你的憂ふるを要す、哥哥は常に來るの(一)一般兒、好酒肉兒を放着して、間常に是親兄弟を保的す、今日纔に事有れば便ち捉ふる處没しと叫ぶ、若是兄弟をして知を得て幾貫の錢を撰得して使はしめば、量るに這夥の小賊甚の難き處有らんや。阿嫂道ふ、阿叔、你倒つて敢て些の(二)風路を知得るや。何清笑ひ道ふ、直哥哥危に臨むの際に、兄弟却て來つて箇の道理有りて他を救はん。説了りて便ち身を起し去らんと要。阿嫂留住し、再び兩杯を喫せしむ。那の婦人這話の説得て蹣蹣あるを聽了し、忙はしく來りて丈夫に對して備細に説了す。何清連忙に何清を叫請て面前に到らしむ。何清笑臉を陪着して說道ふ、兄弟你既に此賊の(三)去向を知らば、如何ぞ我を救はざる。何清道ふ、我甚麼の來歴を知らず、我自ら嫂子和(四)要を説くのみ、兄弟如何ぞ哥哥を救的ん。何清道ふ、好兄弟、看て(五)冷暖なるを要するを得る休れ、只我が日常的の好處を想ひて、我が(六)間

【107】一般兒一班兒同じ、一ト
 【108】手がかりあるにや。
 【109】ゆへ。
 【110】要はじようだん。
 【111】冷暖は冷淡に同じ。
 【112】時たまの。

時の歹處を記する休れ、我が這の(一)條の性命を救へ。何清道ふ、哥哥、你許多の眼明手快的の公人を管下し、也三二百箇有り、何ぞ哥哥の與に些の(二)大氣を出さざる、量るに兄弟一箇、怎ぞ哥哥を救ひ的ん。何清道ふ、兄弟他們を説ふ休れ、你的の(三)話眼裏に些の門路有り、別人に把與して好漢と做すを要する休れ、你且我に些の去向を説與せよ、我自ら你に補報する處有らん、正に我をして怎地心寛ならしめよ。何清道ふ、甚麼の去向の(四)兄弟の省らざる的有らんや。何清道ふ、你我を(五)毆するを要せず、只看同胞共母の面を。何清道ふ、慌するを要せず、且待に至急の處に到り、兄弟自ら來りて些の氣力を出し、這夥の小賊を(六)拿らん。阿嫂便ち道ふ、阿叔、胡亂に你的の哥哥を救へ、也是弟兄の情分なり、如今太師府の鈞帖を被り、立つて這の一千の人を要するを等つ、天來の大事なり、你却て小賊と説ふや。何清道ふ、嫂嫂你知るべし、我只賭錢上の爲に哥哥に多少言語せられ、但是(七)打罵せらるるも曾て他と争せず、間常酒有り食有れば只別人と(八)快活す、今日兄弟も也用ふる處有り。何清道ふ、權に這錠銀を將て收了せるを見て、慌慌に一箇十兩の銀子を取りて卓上に放在し、説道ふ、兄弟、權に這錠銀を將て收了せよ、日後賊人を捕へ得る時、金銀段匹賞賜し、我一力(九)包辨せん、何清笑道ふ、哥哥、正に是(一〇)...

- 【二三】大ぬばりをさせざる。
- 【二四】話の中にわけがある。手がかりあるやうなり。
- 【二五】兄弟、ここには兄なり。
- 【二六】反語、皆兄さんは知つてゐるだらう。
- 【二七】毆は嘔なり、嘔氣也、いやな心持させて困らすといふに當る。
- 【二八】打罵せらるるも兄と争はず。
- 【二九】おもしろくす。
- 【三〇】引受けて取辨せん。

急來佛脚を抱く、間時燒香せず、我若(一一)你的銀子を要する時は、便ち是兄弟你を(一二)勸措するなり、你且把去つて收了せよ、將來りて我を賺すを要せず、你若此の如くならば我便ち説はざらん、既(一三)是你(一四)兩口兒、我と陪話を行ふ、我你に説與せん、銀子を把り出し來りて我を驚かすを要せず。何清道ふ、銀兩は都て是官司の信賞として出す的、如何ぞ三五百貫の錢沒からん、兄弟你推却する休れ、我且你に問はん、這夥の賊、却て那裏に在りて、些の來歴有りや。何清大腿を拍着して(一五)道ふ、這夥の賊、我都て捉へて(一六)便袋の裏に在り。何清大に驚きて道ふ、兄弟你如何ぞ這夥の賊、你的の便袋裏に在りと説ふや。何清道ふ、哥哥、你我を管する莫れ、自ら都て這裏に在る有らば(一七)便了ならん、你只銀子を把つて收了し去れ、將來りて我を賺すを要せざれ、只(一八)常情を要せば便了ならん、我却て你に説與して知道せしめん。何清慌てす忙てす、兩箇の指頭を疊着して説出し來る。分教有り。聊城縣裏に箇の義に仗るの英雄を引出し、梁山泊中、一夥の天を撃ぐるの好漢を聚(一九)起す。畢竟何清何濤に對して甚人を説出し來るや。且下回の分解を聽け。

- 【一〇】苦しい時の佛のみ、ふだんは線香もあげぬ。
- 【一一】你的銀子を受けた時にはわたしが你をいたぶつたことになる。
- 【一二】勸は締める也、措は無理にこき出す。
- 【一三】ふたり。
- 【一四】わび。
- 【一五】古より内腿ちかくに便袋を置きしならん、それ故大腿を拍着せる也。
- 【一六】よからう。
- 【一七】ふだんの人情あらんことを要す。
- 【一八】起字脱す、金本によりて補ふ。

第十八回

美髯公・智・捕翅虎を穩め、宋公明・私・鬼天王を放す。

當時何觀察、兄弟何清と道ふ、這錠の銀子は是官司信賞的、是我が把來りて你を賺すに非ず、後頭再び重賞有らん、兄弟你且説け、這夥の人如何ぞ你的便袋裏に在るや。只見る、何清身邊の 招文袋内去り、一箇の 經摺兒を摸出し來り、指し道ふ、

這夥の賊人、都て上面に在り。何濤道ふ、你且説け、怎地に寫して上面に在る。何清道ふ、哥哥を瞞せずして説かん。兄弟前日賭博の輸了たる爲、一文の盤纏無し、箇の 一般の賭博的あり、兄弟を引き北門外十五里去、地は安樂村と名づく、箇の王家客店內に、些の碎賭を湊むる有り。是官司の文書を行下し來りて本村に着落する爲に、但凡そ客店を開く的は、須ち文簿一面を置立し、上に勘合印信を用ひ、夜客商有りて來りて歇宿する毎に、須ち他の那裏より來り、何處に去る、姓は甚、名は誰、甚の買賣を做すを問ふを要し、都て抄寫して簿子上に在き、官司の查照する時、毎月一次、里正の處に去いて名を報するを

- 【一】 招文袋は書ものなど納るる袋、鼻紙ぶくると古にいへるもの類。
- 【二】 經は野ひきある、摺は我が扇子などの如く疊めるもの。
- 【三】 一班同じ、同じばくち仲間。
- 【四】 官司より文書命令ありて本村に申渡し、旅籠屋は宿帳をこしらへ、検査の印を受け、それへ客の去來を記する。

要す、是小二哥字を識らざるが爲に、我を央み他の替に半箇月を抄了す、當日是六月初三日、七箇の棗子を販する客的客人有り、七輛の江州車兒を推着して來り歇まる、我却て一箇の頭たる客的客人を認得たり、是郟城縣東溪村の晁保正なり、何に因りて他を認め得たる、我比先一箇の間漢に跟きて去いて他に投透す、此に因りて我認め得、我文簿を寫着し、他に問ひ道ふ、客人高姓はと、只見る一箇の 三髯鬚、白淨の面皮的なるが、搶將過來して答應し道ふ、我等姓は李、濠州より來り、棗子を販して東京に去きて賣ると、我寫了すと雖も些の疑心有り、第二日他自ら去了す、店主我を帯びて村裏に去きて相賭し、一處の三叉の路口に來到す、

只見る一箇の漢子、兩箇の桶を挑ひ來る、我他を認め得ず、店主自ら他厮と叫び道ふ、白太郎、那裏に去る、那人應じ道ふ、(一)擔の醋有り、將去りて村裏の財主の家に賣ると、店主我と説道ふ、這人白日鼠白勝と叫

做す、他另箇の賭客と、我也只安きて心裏に在り、後來聽得たり沸沸、湯湯地に説道ふ、黃泥岡上一夥の棗子を販する客的客人、蒙汗藥を把つて人を麻翻了了し、生辰綱を奪ひ去ると、我猜するに晁保正ならずして却て是兀誰ぞ、如今只白勝を捕了して一問すれば便ち端的を知らん、這箇の經摺兒は是我抄する副本なり。何濤聽了して大に喜び、隨即兄弟何清を引了し、逕ちに州衙裏に到り、太守に見ゆ。府尹問道ふ、那の公事、些の 下落有りや。何濤稟し道ふ、略些の消息有り了す。府尹叫

- 【五】 まへかど。
- 【六】 三ところひげ、色白き男が、ひつとりて。
- 【七】 湯湯を揚揚に作る、揚揚は非也。
- 【八】 手がかり。

びて後堂に進み來り、仔細を説かしめ、來歴を問了す。何清一稟説了す。當下八箇の做公的を差し、何濤何清と一同に、連夜安樂村に來到し、店主人を叫了して、(五) 眼と做し、逕に白勝の家裏に奔到す。却て是三更の時分なり。店主人をして賺して門を開き來り打火せしむ。只聽得たり白勝牀上に在りて聲を做すを。他の老婆に問ふ時、却て說道す、熱病を害して曾て汗を得ずと。牀上より拖將起來す。白勝の面色、紅白なるを見る。就ち索子を把つて綁了し、喝し道ふ、(二) 黄泥岡上、好事を做得たりと。白勝那裏に、肯て認めん。那の婦人を把つて細了するも、也肯て、(三) 招せず。衆做公的屋を繞りて、(四) 賊を尋ぬ、尋ねて牀底下に到る、地面の平らかならざるを見、衆人掘開す、三尺の深に到らずして、衆多の公人聲喊を發す、白勝面土色の如し、地下に就て一包の金銀を取出し、隨即白勝の頭臉を把つて包了し、他の老婆を帶び、賊物を扛擡し、都て連夜に濟州城裏に赶回し來る。却て好し五更天明の時分、白勝を把つて廳前に押到し、便ち索子を將て細了し、(二) 主情造意を問ふ。白勝、(二) 抵賴し、死して肯て晁保正等七人を招せず。連打する三四頓、打的皮開き肉綻び、鮮血迸り流る。府尹喝して道ふ、(三) 告的の正主、賊物を招了し、人を捕へ、(二) 已に知

- 【九】 見知り人。
- 【一〇】 紅白は紅くほてれる也。
- 【一一】 よいこと、うまいこと。
- 【一二】 えらいこと。
- 【一三】 白狀はせぬ。
- 【一四】 白狀せぬ也。
- 【一五】 企の主となりしもの、考へ出したもの。
- 【一六】 ありがふ。
- 【一七】 此公事の正主、即ち訴へられたものは、取つたものを白狀し。
- 【一八】 晁保正とわかつた。

是是郟城縣東溪村の晁保正なるを、你這厮如何ぞ頼ひ得て過ぎん、你快く那の六人は是誰なるを説はば、便ち你を打たざらん。白勝、又捱了する一歇なるも、打熬し過ぎず、只得たり招して道ふ、首爲る的是是晁保正なり、他自ら六人と同に來りて白勝を糾合し、他の與に酒を挑ぐ、其實那の六人を認得せずと。知府道ふ、這箇は難からず、只晁保正を拿住せば、那の六人便ち、(一) 下落有らんと。先づ一面の二十斤の、(三) 死枷を取りて白勝を枷了す。他的の老婆も也鎖了し、女牢裏に押去して監收せしめ、隨即一紙の公文を、(三) 押し、就ち何濤を差し、親自二十箇の眼明手快的の公人を帶領し、逕ちに郟城縣に去いて投下し、本縣に、(三) 着落し、立どころに等つて晁保正并に姓名を知らざる六箇の正賊を捉ふるを要す、就ち原生辰綱を解るの兩箇の虞候を帶びて眼と作し人を拿る。一同に何觀察の一行人を領了し去る時、大驚小怪を要せず、只、(三) 消息を走透了するを恐怕れ、星夜郟城縣に來到し、先づ一行の公人並に兩箇の虞候を把つて都て藏して客店裏に在き、只一兩箇を帶びて跟着、公文を來下し、逕に郟城縣の衙門前に遶り來る。當下已牌の時分、却て知縣の早衙を退了するに値ふ、縣門前靜悄悄地なり。何濤走つて縣の、(三) 對門の一箇の茶坊裏に去き、坐下し、

- 【一九】 又一下しきりこらへたれど、こらへかれて。
- 【二〇】 手がかり、つまる處。
- 【二一】 死枷の間、囚字を脱する
- 【二二】 宇面通りならばひどく嚴重にて何ともすることならぬ枷。
- 【二三】 押、ここには公文を下すこと也。
- 【二四】 申しわたし。
- 【二五】 捕手のむかつた事を氣取られんことを怖る。
- 【二六】 まへ。

茶を喫し相等つ。一箇の泡茶を喫了し、茶博士に問ひ道ふ、今日如何ぞ縣門前恁地に靜なる。茶博士
說道ふ、知縣相公、早衙方に散じ、一應の 公人と告狀するものと、都去いて飯を喫了し未だ來ら
ざるなり。何濤又問道ふ、今日縣裏知らず是 那箇の押司か直日なる。茶博士指着して道ふ、今日
の直日的押司來ると。何濤看る時、只見る縣裏より一箇の吏員を走出し來る。看る那の人箇の怎生の
模様ぞ。但見る、

眼は丹鳳の如く、眉は臥蠶に似たり。滴溜溜
たる兩耳は珠を懸け、明皎皎たる雙睛は漆を
點す。唇方に口正しく、髭鬚は 地閣に輕
く盈ち、額瀾く頂平らかに、皮肉は 天倉
に飽満す。坐定する時、渾て虎の相の如く、
走動する時、狼形の如き有り。年は三旬に及び、萬人を養濟するの度量有り。身軀は六尺、四海を
掃除するの心機を懷く。志氣は軒昂、胸襟は秀麗、 刀筆は敢て蕭相國を欺き、聲名は讓らず孟嘗
君。

【二六】 役人と訴ふる者と。
【二七】 今日の當番の押司は誰
ぞ。
【二八】 地閣は顔の下部。口のま
はり。
【二九】 天倉は上部、眼の上、人

相の語。
【三〇】 刀筆、吏務を執る事、度
の蕭何を凌ぎ、評判は戰國の
孟嘗君に劣らず。
【三一】 兄弟の順第三。

那の押司、姓は宋、名は江、表字は公明、 排行は第三。 祖居鄆城縣宋家村の人氏、他が面黒く身矮き
が爲に、人都て他を喚んで黒宋江と做す。又且家に於て大孝に、人と爲り義に仗り財を疎んず、人皆

他を稱して孝義黒三郎と做す。上に父親の堂に在る有り、母親蚤く喪ふ、下に一箇の兄弟有り、鐵扇
子宋清と喚做す、自らの父親宋太公と和に村中に在りて農を務め、些の田園を守りて 過活す。
この宋江は自ら鄆城縣に在りて押司と做る。他刀筆精通し、吏道純熟す、更に兼ねて鎗棒を習ふを
愛し、武藝を學び得て多般なり、平生只好んで江湖上の好漢に結識す、但人有りて來りて他に投進す
るは、若くは高く若くは低きも、納れざる有る無し、便ち留めて莊上に在きて 館穀し、終日追陪
して、竝に厭倦無し、若し起身せんと要れば、
力を盡して資助す、端的に是揮霍して金を視る
こと土に似たり、人他に問ひて錢物を求むれば、
亦推托せず、且好く方便を做して、每每難を排
し紛を解き、只是人の性命を周全す、如常
棺材藥餌を散施し、人の貧苦を濟ふ、人の急を調ひ、人の困を扶く。此を以て山東河北に名聞え、都
て他を稱して 及時雨と做し、却て他を把つて天上より下るの及時雨と一般に能く萬物を救ふに
比し做す。曾て一首の臨江仙あり、宋江の好處を讚す。

【三二】 日をおくる。
【三三】 やしなひ置く。
【三四】 支那人は葬を厚うす、故
に貧者は棺材を準備し得ざる
を非常に悲む、これを施すは
陰徳とせらる。

【三五】 時雨をしぐれと訓せる人
あるも宜しからず、時に及ぶ
雨なり、次の臨江仙の詞を讀
みて證を得ん。
【三六】 花字疑ふべ、恐らくは
誤。

花村の刀筆の吏より起り、英靈上天星に應ず。財を疎んじ義に仗り更に多能、親に事へて孝敬
を行ひ、士を待つて聲名有り。弱きを濟ひ傾けるを扶けて心慷慨、高名水月と雙び清し、時に及ぶ

甘雨四方稱す。山東の呼保義、豪傑宋公明。

當時宋江一箇の伴當を帶着して縣前に走將出し來る。只見る這の何觀察街に當りて迎住し、叫び道ふ、押司、此間請ふ坐し拜茶せよ。宋江他の箇の公人に似たるの打扮を見て、慌忙答禮して道ふ、尊兄何の處ぞ。何濤道ふ、且請ふ押司、茶坊の裏面に到りて茶を喫し說話せん。宋公明道ふ、謹み領す。兩箇茶坊裏に入道して坐定まる。伴當都て門前に去いて等候す。宋江道ふ、敢て拜問せず、尊兄の高姓は。何濤答道ふ、小人は是濟州府の緝捕使臣何觀察の便ち是なり、敢て動問せず、押司の高姓大名は。宋江道ふ、賤眼觀察を識らず、罪する少れ、小吏姓は宋、名は江といふの便ち是なり。何濤地に倒れ便ち拜し、說道ふ、久しく大名を聞き、縁無くして曾て拜識せず。宋江

【三七】 拜茶の語、前に出づ。邦人には異様に聞ゆれど拜年の拜の如し、一寸御茶おあがり下され。

【三九】 失禮ですが御高姓は。
【四〇】 封のある公文、特に大切故封ある也。
【四一】 助けて事を成就するを願ふ。

道ふ、惶恐す、觀察請ふ上座せよ。何濤道ふ、小人安んぞ敢て上を占めん。宋江道ふ、觀察は是上司衙門的人、又是遠來之客。兩箇謙讓し了する一回、宋江主位に坐了し、何濤客席に坐了す。宋江便ち茶博士をして兩杯の茶を將ち來らしむ。多時没くして茶到る。兩箇茶を喫了す。宋江道ふ、觀察敵縣に到る、知らず上司何の公務有るを。何濤道ふ、實に相瞞せず、貴縣に來る、幾箇の要緊の人有り。宋江道ふ、賊情の公事に非る莫きや否や。何濤道ふ、實封の公文此に在る有り、敢て押司の

成せんを煩はす。宋江道ふ、觀察は是上司より差來して盜を捕る的人、小吏怎で敢て怠慢せん、知らず甚麼の賊情緊事たるを。何濤道ふ、押司は是當案的人、便ち説ふも也妨げず、敵府管下の黄泥岡上の一夥の賊人、共に是八箇、蒙汗藥を把て北京大名府梁中書差遣して蔡太師に送る的生辰綱軍健一十五人を麻翻了し、十一擔の金珠寶貝、計十萬貫に該るの正賊を劫去了す、今從賊一名白勝を捕へ得、指説ふ七箇の正賊、都貴縣に在り、這は是太師府特に一箇の幹辦を差はして本府に在り、立等して這件の公事を要む、望むらくは押司の早々に維持せんことを。宋江道ふ、太師の處の着落を説ふを休めよ、便ち是觀察自ら公文を齎して來り要す、敢て捕送せざらんや、只知道せず白勝の供指せる那の七人の名字を。何濤道ふ、押司を瞞せずして説かん、是貴縣東溪村の晁保正首たり、更に六名の從賊有り、姓名を識らず、煩はくは用心を乞ふ。宋江聽罷りて一驚を喫了し、肚裏尋思して道ふ、晁蓋は是我が心腹弟兄なり、他如今迷天の罪を犯了す、我他を救はざる時、捕獲されて將去され、性命便ち休了せんと、心内自ら慌て、却て答應し道ふ、晁蓋這厮姦頑の役戸、本縣内の上下人、一箇の他を怪まざる没し、今番做出し來了す、好し他をして受けしめん。何濤道ふ、押司を相煩はして便ち此事を行はん。宋江道ふ、妨げず這事容易なり、甕中に鼈を捉ふる、手到りて拏來らん、只是一件、這の實封公文は、須らく是觀察自己當廳に投下す

【四二】 かりの人。
【四三】 村の役人、保正は莊屋故かく云ふ。
【四四】 如是事を做出し來る、よし愛目を見せん。

べし、本官看了らば、便ち好し施行發落して人を差して去つて捉へん、小吏如何ぞ敢て私下擅開せん、這件の公事、是小可に非ず、當に輕く人に泄す勿れ。何濤道ふ、押司高見極めて明らかなり、引進を相煩はす。宋江道ふ、本官一早晨の事務を發放し、倦怠し了して少歇す、觀察略一時を待て、少刻にして應に坐する時、小吏來り請はん。何濤道ふ、押司の千萬作成せんことを望む。宋江道ふ、理の當然、這等に説話するを休めよ、小吏 略略寒舎に到り、此の家務を分撥し了して便ち到らん、觀察少らく坐一坐せよ。何濤道ふ、押司尊便にせよ、小弟只此に在りて専ら等たん。宋江身を起し、閣兒を出得、茶博士に分付して道ふ、那の官人再茶を用ふるを要す、一發我茶錢を還さんと、茶坊を離了し、飛ぶも也似て 下處に跑到し、先づ伴當に分付し、去いて直司をして茶坊門前に在りて伺候せしめ、若し知縣衙に坐する時は、便ち茶坊裏に去いて那の公人を安撫し、押司 穩便にせんと道ひて、他をして略待一待せしめよと。却て槽上より馬に鞍し、後門外に擡出し去り、鞭子を拿り、慌忙的に馬に跳上し、慢慢地に縣治を離了し、東門を出得て、兩鞭を打上す。那の馬撥喇喇的に東溪村を望んで擡將し去る。半箇の時辰没く、早く晁蓋莊上に到る。莊客見了り、入つて莊裏に去いて報知す。正に是、義は重し他の不義の財を輕んず、天を奉じて法網時有つて開く。民を剝する官府賊より過ぐ、應に知

- 【四三】 本官は知縣。
- 【四六】 知縣の廳中へ引進し下さる。
- 【四七】 略はちよいと也。
- 【四八】 さばきて。
- 【四九】 へや。
- 【五〇】 下宿。
- 【五一】 よく取計らはん。

交の爲に賊を放ち來るべし。

且説く、晁蓋正に吳用、公孫勝、劉唐と和に後園葡萄樹下に在りて酒を喫す。此時三阮已に錢財を得たり、自ら石碣村に回りに去り了す。晁蓋莊客の宋押司門前に在りと報説するを見、晁蓋問ひ道ふ、多少の人有りて隨從し着するや。莊客道ふ、只獨自一箇馬を飛ばして來る、説ふ快く保正を見るを要すと。晁蓋道ふ、必然事有りと、慌忙出來りて迎接す。宋江一箇の喙を道了り、晁蓋の手を携了し、便ち側邊の小房裏に投じ來る。晁蓋問道ふ、押司如何ぞ來りて慌速なる。宋江道ふ、哥哥知らず、兄弟是心腹弟兄なり、我(一)條の性命を捨着して來りて你を救ふ、如今黃泥岡の事發はる、白勝已に自ら拿へられて濟州の大牢裏に在り了し、你等七人を供出す、濟州府一箇の何緝捕を差し、若干人を帶領し、太師府の鈞帖并に本州の文書を奉着し來り、你等七人を捉へんとす、道ふ你首たりと、天幸にして撞して我が手裏に在り、我只推説す、知縣睡着すと、且何觀察を教て縣の對門の茶坊裏に在りて我を等たしむ、此を以て馬を飛ばして來りて你に報す、哥哥三十六計は走るを上計と爲す、若し快く走らざる時更に甚麼せんとする、我回り去つて他を引き、當廳に公文を下了せば、知縣は時を移さずして便ち人を差し連夜に下來せん、你們 擔閣す可らず、倘些の疎失有らば之を如何、小弟の來りて你を救はざるを怨む休れ。晁蓋聽罷つて一驚を喫了し道ふ、賢弟大恩報じ難し。宋江道ふ、哥哥你多説を要するを

- 【五一】 つきあたつて。
- 【五三】 ゆるゆるしあんなどする勿れ。

休めよ、只願走路を安排し、纏障するを要せざれ、我便ち回り去ら。晁蓋道ふ、七箇人、三箇は是
阮小二、阮小五、阮小七、已に財を得了り、自ら石碣村に回り去了す、後面に三箇有りて這裏に在
り、賢弟且他を見る一面せよ。宋江來りて後園に到る。晁蓋指着して道ふ、這三位、一箇は吳學究、
一箇は公孫勝、薊州より來る、一箇は劉唐、東潞州の人なり。宋江略一禮を講じ、身を回して便ち
走り、囑付して道ふ、哥哥保重せよ、急快走を作せ、兄弟去れと。宋江出でて莊前に到り、馬に上り、
兩鞭を打上し、飛ぶも也似て縣裏を望み來了す。當時箇の學究有り、此事の爲に詩一首を作る、也説
き得て是なり。詩に曰く、

【西】 虧は、よりて、おかげで、
殺は其意を強む。
【五】 危き場合をせおつて。

保正何に縁りて賊曹を養ふ、押司賊を縦つ罪逃れ難し。須らく知るべし
法を守る清名の重きを、謂ふ莫れ情を通ず義氣高しと。爵固より 鷓を
畏るるは能く爵を害すればなり、猫如し鼠に伴なば豈猫を成さんや。空しく刀筆を持して文吏と
稱す、説くを差つ當年の漢の相の蕭。
且説く、晁蓋と吳用、公孫勝、劉唐三人と道ふ、你們那の來りて相見するこの這箇の人を認得る麼。吳
用道ふ、却て怎地慌忙便ち去了するや、正に是誰人ぞ。晁蓋道ふ、你三位還知らざる哩、我々は他
の來るにあらざる時、性命只咫尺に在りて休了せん。三人大に驚き道ふ、消息を走了して這(一)件の
事發するにあらざる莫きや。晁蓋道ふ、這箇の兄弟に 虧殺して、血海也似たる干係を擔着して、

來つて我々に報與す、原來白勝已に自ら捉へられて濟州大牢裏に在り了し、我等七人を供出す、本
州箇の緝捕何觀察を差し、若干人を將帶し、太師の鈞帖を奉着し來り、鄆城に着落し、立つて等つて
我々七箇を拿るを要す、他の那の公人を 穩了して茶坊裏に在りて候候せしめ、他馬を飛ばして先
來りて我々に報知するに虧了、如今回り去る、公文を下了ば、少刻便ち人を差して連夜に到來して我
們を捕獲せん、却て是怎地にして好からん。吳用道ふ、若此人の來報するに非ずば、都て網裏に打在
せられん、這大恩人姓は甚、名は誰。晁蓋道ふ、他便ち是本縣の押司呼保義宋江の便ち是なり。吳用
道ふ、只宋押司の大名を聞く、小生却て會て會ふを得ず、是咫尺に住居すと雖も、縁無くして面を見
るを得難かりき。公孫勝、劉唐都道ふ、是江湖上に傳説するこの及時雨宋
公明にあらざる莫きや。晁蓋點頭して道ふ、正に是此人なり、他と我と心
腹相交り、結んで義弟兄たるも、吳先生會て會するを得ざりき、四海の内、名は虚傳せず、義を結び
て這箇の兄弟を得、也枉げず了す。晁蓋吳用に問ひて道ふ、我々事危急に在り、却て是怎地に解救せ
ん。吳學究道ふ、兄長商議を須ひす、三十六計、走るを上計と爲す。晁蓋道ふ、却纔宋押司も我
們をして走るを上計と爲さしむ、却て是那裏に走り去るが好き。吳用道ふ、我已に尋思して肚裏に在
り了す、如今我々五七擔を收拾して挑了し、一逕都べて石碣村三阮の家裏に走り去らん、今急に一人
を遣はして先づ他の弟兄に説知せしめん。晁蓋道ふ、三阮是箇の打魚の人家なり、如何ぞ我等許多の

【六】 公人をしづめて、なだめ
て。

人を安き得ん。吳用道ふ、兄長你好だ精細ならず、石碣村の那裏、一步歩近去すれば便ち是梁山泊なり、如今山寨裏好生興旺なり、官軍捕盜も敢て正眼兒に他を看す、若是趕得て緊しからは、我一發夥に入り了らん。晁蓋道ふ、這の一論極めて是上策なり、只恐怕る他們的肯て我を收留せざるを。吳用道ふ、我等有る的是金銀なり、些を送獻して他に送與せば、便ち夥に入丁せん。正に是、無道之時多く盜有り、英雄進退兩ながら俱に難し。只秀士の山寨に居るに因りて、盜を買ふは猶然く官を買ふに似たらん。

當時晁蓋道ふ、既に然く恁地に商量し定れば、事遅くすべからず、吳先生你便ち劉唐と幾箇の莊客を帶了して、挑擔して先づ阮家に去いて安頓し了し、却て早路上に來りて我を接せよ、我と公孫先生と兩個併し了して便ち來らん。吳用劉唐這の生辰綱に打劫し得たる金珠寶貝を把つて五六擔と做して裝了し、五六箇の莊客をして一發に酒食を喫了せしめ、吳用銅鍊を袖にし了し、劉唐朴刀を提了し、五七擔を監押し着し、一行十數人、石碣村に投じ來る。晁蓋と公孫勝と莊上に在りて收拾す、些の去るを肯せざるの莊客有り、他に些の錢物を齎發し、他の去つて別主に投するに従す、去るを願ふ的あれば、都て莊上に在りて財物を併疊し、行李を打控せしむ。正に是、須らく信すべし錢財は是毒蛇なるを、錢財聚まる處即ち家を亡す。人は義士と稱するも猶保し難

【五七】 秀士は秀才、秀才などが山寨に居るならば、錢づくにて何事も成らん。
【五八】 かたづけ。

し、天は鑿す貪官の漫に自ら誇るを。

再説く、宋江馬を飛ばして去つて、下處に到り、連忙に茶坊裏に到り來る。只見る何觀察、正に門前に在りて望む。宋江道ふ、觀察久しく等たれつらん、却て村裏に箇の親戚有り、下處に在りて些の家務を説く、此に因り些を擔閣し了せり。何濤道ふ、押司の引進を煩はす有り、宋江道ふ、請ふ觀察縣裏に到れ。兩箇衙門に入得て來る。正に知縣時文彬の廳上に在りて事務を發落するに値ふ。宋江實封公文を將着し、何觀察を引着して、直に書案の邊に至り、左右をして廻避の牌を掛上せしむ。宋江向前して稟し道ふ、濟州府の公文を奉じ、賊情緊急の公務の爲に、特に緝捕使臣何觀察をして此に到り文書を下さしむと。知縣接來して拆開し、當廳に就いて看了り大に驚きて、宋江に對し道ふ、這は是太師府幹辦を差し來り、立等して回話を要するの勾當なり、這の一千の賊便ち人を差はして去いて捉へしむ可し。宋江道ふ、日間去かば只怕らくは消息を走了せん、只人を差し夜に就て去いて捉ふべし、晁保正を拏得來らば、那の六人便ち下落有らん。時に知縣道ふ、這の東溪村の晁保正、聞名の是箇の好漢、他如何ぞ肯て這等の勾當を做すと、隨即尉司并に兩箇の都頭、一箇は姓朱、名は全、一箇は姓雷、名は横を叫喚す。他兩箇是等間の人に非ず、當下朱全雷横兩箇後堂に來到す、知縣の言語を領了し、縣尉と和

【五九】 下宿。
【六〇】 おそくなりたり。
【六一】 遠慮して退けといふ札をかくる也。
【六二】 ひるまゆかば、其事漏洩せん。
【六三】 有名の好漢。

に馬上に上り、逕に尉司に到り、馬、歩、弓、手、并に土兵一百餘人を點起し、就ち何觀察と同一にし、并に兩箇の虞候を眼と作し人を拏らんとす。當晩都て繩索軍器を帶了し、縣尉は馬に騎着し、兩箇の都頭も亦各馬に乗じ、各腰刀弓箭を帶了し、手に朴刀を拏り、前後馬歩弓手、簇擁し着し、東門を出得て、東溪村の晁家に飛進し來る、東溪村裏に到り得るとき、已に一更の天氣なり、都て一箇の觀音菴に到り、齊を取る。朱全道ふ、前面は便ち晁家莊、晁蓋の家前後兩條の路有り、若は一齊に去いて他の後門を打せば、他前門に逃り走了せん、我須ち知る晁蓋は好生、了得するを、又知らず那の六箇は甚魔の人なるを、必ず也是善良の君子ならざるべし、那厮們都て是、死命に倘或は一齊に殺出し來り、又莊客の協助する有らば、却て如何ぞ他に抵敵せん、只好し東に聲して西を撃つに、那厮等の亂擲するを等ちて、便ち手を下すに好し、若かず我と雷都頭と分れて兩路と做り、我と你一二人を分ち、都て是步行し去り、先づ他の後門を望みて埋伏し了し、
【六四】 縣尉の役所即ち尉司なり。
【六五】 取齊は勢揃ひする也。
【六六】 武術がよく出来る。
【六七】 死にものぐるひ。
【六八】 唵哨、口笛、一種の聲音の相圖の號はあひづ、しらせ。

出沒的の去處を知らず、倘若事情を走漏せば是、要處にあらじ。縣尉道ふ、朱都頭説得て是なり、你一二人を帶び去れ。朱全道ふ、只三十來箇を消得ば勾了す。朱全十箇の弓手、二十箇の土兵を領了し、先去り了す。縣尉再び馬上に上り、雷横馬歩弓手を把りて都て擺して前後に在り縣尉を拏護着す、土兵等都て馬前に在り、明晃晃として三二十箇の火把を照着す、樵叉、朴刀、留客住、鈎鎌刀を拏着し、一齊に都て晁家莊に逃り來る。莊前に到り得て、兀自半里多路あり、只見る晁蓋の莊裏一縷の火起り、中堂より燒將起し來り、湧得て黒焰地に逼り、紅焰空に飛ぶ。又走りて十數歩に到らず、只見る前後門四面八方、約そ三四十把の火ありて發す、焰騰騰地に一齊に都て着す。前面には雷横朴刀を挺着し、背後には衆土兵喊を發着す、一齊に莊門を把つて打開し、都て裏面に撲入して看る時、火光照らして白日の如同く一般明亮なり、竝に會て一箇人を見る時、只聽得たり後面喊を發着し叫將起し來り、前面をして人を捉らへよと叫ぶ。原來朱全晁蓋を放さんと要るに心有り、故意に雷横を賺して去いて前門を打せしむ。この雷横も亦晁蓋を救はんと要るに心有り、此を以て先を争ひて來りて後門を打せんと要す、却て朱全に説き了せられ、只得たり去つて前門を打するを、故意に這等大驚小怪し、東に聲し西を撃ち、晁蓋を催逼して走了せしむるを要す。朱全那時莊後に到る時、兀自晁蓋收拾未了了せず、莊客看見し、來りて晁蓋に報興して説道ふ、

【六九】 様子なさとられなば。
【七〇】 じようだん事にあらす。
【七一】 留客住、前に出づ。袖がらみ、つく棒の類。鈎鎌刀、鈎の如くなりたる得もの。此又人を捉ふるに適したるもの也。

官軍到了す、事宜しく遅くすべからず。晁蓋莊客をして四下里に只顧火を放たしむ、他と公孫勝と十數箇の 去的の莊客を引了し、喊を納着し、朴刀を挺起し、後門より殺將出し來り、大喝して道ふ、吾に當る者は死し、吾を避くる者は生くと。朱全黑影裏に在りて叫び道ふ、保正走る休れ、朱全這裏に在りて你を等つこと多時なり。晁蓋那裏に他の説ふことを顧みん。公孫勝と與に 晁蓋却て公孫勝を叫て莊客に殺出し來る、朱全虚閃一閃、(一)條路を放開し、晁蓋をして走らしむ、晁蓋却て公孫勝を叫て莊客を引了して先走らしめ、他は獨自後を押着す。朱全歩弓手をして後門より撲入し去らしめ、叫道ふ、前面賊人を赶捉へよと。雷横聽的て身を轉じ便ち莊門外に出で、馬歩弓手をして頭を分つて去つて赶はしむ。雷横自ら火光の下に在り、東觀西望して、人を尋ぬるを做す。朱全土兵を撤了し、刀を挺着して去いて晁蓋を赶ふ、晁一面走り、口裏に説道ふ、朱都頭你只管我を追うて甚麼を做す、我 互處没かるべきに。朱全後面に人没きを見て、方纔に敢て説道ふ、保正你兀自我が好處を見ざるや、我雷横の執迷して人情を做すを會せざるを怕れ、我に他を賺して你的前門を打せしめらる、我は後面に在り、你的出來るを等ちて你を放さんとす、你見よ我が(一)條路を閃開して你を讓て過去らしむるを、你別處に投じ去るべからず、只除梁山泊以て身を安く可からん。晁蓋道ふ、深く救命の恩を感ず、異日必ず報せん。詩有り證と爲す。

【七二】今度隨從して去るところの莊客。
【七三】命かぎり。
【七四】あしくしたること無からんに。

捕盜如何ぞ盜と通ずる、官賊應に盜賊と同じかるべし。官府の能く盜を爲すを疑ふ莫れ、自ら皇天の肯て容さざる有り。

朱全正に赶ふの間、只聽得たり背後の雷横大に叫びて道ふ、人を走了せしむる休れ。朱全晁蓋に分付して道ふ、保正你慌する休れ、只顧一面走れ、我自ら他を轉じ去らしめん。朱全回頭して叫び道ふ、三箇の賊有り、東小路を望みて去了す、雷都頭你急に赶ふ可し、雷横人を領了し、便ち東小路上に投じ、土兵衆人と并に趕去る。朱全一面には晁蓋と話を説着し、一面には他を赶ふ、却て 防送的と相似たり、漸漸黑影裏に晁蓋を見ず了す。朱全只失脚を做し、撲地と倒れて地下に在り、衆土兵後より趕來り、向前して扶起し、急に救得たり。朱全答へ道ふ、黑影裏路徑を見ず、失脚して野田裏に走下し滑倒了し、左腿を閃挫了すと。縣尉道ふ、正賊を走了す、怎生奈何。朱全道ふ、是小人の趕はざるに非ず、其實月黒し、道理を做す處没し、這些の土兵全く幾箇の有人的の人無し、敢て向前せず。縣尉再び土兵をして去いて趕はしむ。衆土兵心裏に道ふ、兩箇の都頭尙兀自事を濟さず、他に近づき得ず、我門何用有らん、都て去つて虚趕了する一回、轉來して道ふ、黒地裏正に知らず那の條に去了するを。雷横也趕了する一直、回來つて心内に尋思し道ふ、朱全と晁蓋と最も好し、多く敢て是他を放了し去れるならん、我來由

【七五】防送は罪人を送る者、前に數々見ゆ。
【七六】脚ふみそこれたる眞似なり。
【七七】左の脚をひよいと挫きたり。
【七八】我來由没くより今日に去了す迄、金本に無し。

没く、甚麼の人に悪まるるを做さん、我也心有りて亦他を放すを要す、今已に去了す、只是人情を見はさす、(五)晁蓋那の人も是、(六)好だ、惹的ならず。回來りて說道ふ、那裏に趕得て上さん、這夥の賊は端的に了得す。縣尉と兩箇都頭と回りに莊前に到る時、已に是四更の時分。何觀察衆人の四分五落して一夜を趕了り、曾て一箇の賊人を拏得ざるを見、只叫苦して道ふ、如何ぞ濟州に回り得て去いて府尹に見えんと。縣尉只得たり幾家の鄰舍を捉了し去つて、鄆城縣裏に解し來る。這時知縣一夜曾て睡るを得ず、立つて回報を等つ。賊都て走了し、只幾箇の鄰舍を拏得すと道ふを聽得て、知縣一千の拏到するの鄰舍を把つて當廳に勘問す。衆鄰舍告げて道ふ、小人等晁保正の鄰近に在りて住居すと雖も、遠き者は三二里の田地、近きも也些の村坊を隔着す、他の莊上如常に鎗を擲し棒を使ふ的の人有りて來る、如何ぞ他の這般的の事を做すを知らん。知縣逐一問了する時、他們に、(七)一箇の下落を問はんと要するを務む。數の内の一箇の貼鄰告げて道ふ、若他の端的を知るを要せば、除非他の莊客に問へ。知縣道ふ、説ふ他の家の莊客也都跟着して走了すと。鄰舍告道ふ、也去るを願はざる的有り、還つて這裏に在り。知縣聽了し、火速に人を差し、就ち這箇の貼鄰を帶了して眼と做し、東溪村に來つて人を捉る。兩箇の時辰無く、早く兩箇の莊客を拿到る。當廳に勘問する時、那の莊客初時は、(八)抵頼す、(九)打を乞し過さず、只

【五】晁蓋那の句、金本に無し。
 【六】何とか埒明くことを問ひ出さんことを務めたり。
 【七】あらがひ。
 【八】乞打不過、喫打不過同す。

得たり招道するを。是より先六箇人商議す、小人只認め得たり、一箇は是本郷中の教學の先生、吳學究と叫做す、一箇は公孫勝、是、(一〇)全眞先生、又一箇の黒大漢有り、姓は劉、更に那の三箇有り、小人認得ず、却是吳學究の合將來するのり、說道ふを聽得たるに、他姓は阮、石碣村に在りて住す、他は是打魚的、弟兄三箇、只此是實なり。知縣一紙の招状を取り了し、兩箇の莊客を把つて交割し何觀察に與へ、一道の備細の公文を回し、本府に申呈す。宋江自ら那の一千の鄰舍を周全し、保放して家に回り聽候せしむ。且説く、這の衆人、何濤の與に兩箇の莊客を押解了し、連夜に濟州に回到す、正に府尹の廳に陞るに値ふ、何濤衆人を引了して廳前に到り、晁蓋の莊を焼いて在逃するの一事を稟説し、再び莊客の口詞を把つて説くこと一遍す。府尹道ふ、既に是恁地に説ふ時、再び白勝を拿出來り、問道ふ、那の三箇の姓阮的、端のことに那裏に住する。白勝抵頼し過さず、只得たり三箇の姓阮的、一箇は立地太歳阮小二と叫做し、一箇は短命二郎阮小五と叫做し、一箇は是活閻羅阮小七、都て石碣村裏に在りて住すと、供説す。知府道ふ、還て那の三箇有り、姓は甚麼。白勝告げ道ふ、一箇は是智多星吳用、一箇は是入雲龍公孫勝、一箇は赤髮鬼劉唐と叫做す。知府聽了し、便ち道ふ、既に下落有り、且白勝を把つて原に依りて監了し、收めて牢裏に在き、隨即又何觀察を喚び、石碣村に差し去り這の幾箇の賊人を緝捕せしむ。是何

じ、打たれてこらへかれて也。
 【一〇】全眞は道家の全眞派、但しこにはただ道家の意味に用ふ。

濤の石碣村に去き去つて、分教有り、天罡地煞、來り尋ねて風雲に際會し、水滸山城、去いて聚まりて人馬を縱横するにあらすや。畢竟何觀察、怎生に石碣村に差去されて緝捕するや、且下回の分解を聽け。

第十九回

林冲水寨に大に併火し、晁蓋梁山に小奪泊す。

說話す、當下何觀察知府の台旨を領了し、廳を下り來る。隨即機密房裏に到り、衆人と商議す。衆多の做公的道ふ、若這箇の石碣村を説へば、湖蕩緊しく梁山泊に靠着し、都是茫茫蕩蕩たる蘆葦水港、若大隊の官軍舟船人馬を得ずんば、誰か敢て那裏に去いて賊人を捕捉せん。何濤聽罷り、説道ふ、這の一論也是なりと、再び廳上に到り、府尹に稟覆して道ふ、原來這の石碣村の湖泊は正に梁山水泊に傍着し、周圍盡く是深港、水汊、蘆葦草蕩、間常時も、也自兀人を劫了す、説ふ莫れ如今又那の一夥の強人を添了して裏面に在り、若大隊の人馬を起し得ずんば如何ぞ敢て那裏に去いて人を捕獲し得ん。府尹道ふ、既に是此の如く説ふ時、再び一員の事を了得するの捕盜巡檢を差し、五百の官兵人馬を點與し、你と一處に去いて緝捕せしめん。何觀察台旨を領了し、再び機密房に回り來りて這の衆多の做公的を喚集し、五百餘人を選了し、各自自ら去いて什物器械を準備す。次日那の捕盜巡檢、濟州府の帖文を領了し、何觀察と與同に兩箇五百の軍兵を點起し、衆多の做公的と同一に一齊に石碣村に奔り來る。且説く、晁蓋、公孫勝、

- 【一】 併火、火併同じ、火も夥も同じ、仲間内争ひ勝つて一に歸するが火併也。
- 【二】 目あかし、とりて、が做公的也。
- 【三】 水汊は水の縱横交錯するところ。

火を把つて莊院を焼了し、十數箇の莊客と共に石碣村に來到す、半路上三阮弟兄の各器械を執つて却つて來りて接應するに撞見して家に到る。七箇人都て阮小五莊上に在り、那時阮小二已に老小を把つて湖泊裏に搬入し、七人夫つて梁山泊に投せんと要るの一事を商議す。吳用道ふ、見今李家道口に、那の旱地忽律朱貴有りて那裏に在つて酒店を開き、四方の好漢を招接し、但入夥するのを要す、是先づ他に投送すべし、我々如今船隻を安排し了し、一應的の物件を把つて船裏に裝在し、些の人情を將て他に送與し引進せしめん。大家正に那裏に在りて梁山泊に投送するを商議す、只見る幾箇の打魚的來り報じ道ふ、官軍の人馬村裏に飛進し來ると。晁蓋便ち身を起し叫び道ふ、這厮們我等を趕來る、走るを休めん。阮小二道ふ、妨げず、我自ら他に對付し、那厮をして大半水裏に下り去いて死せしめ、小半は都て他を擲殺せん。公孫勝道ふ、慌つる休れ、且貧道的の本事を看よ。晁蓋

【四】 みなみな。

【五】 むかひ、相手になり。

【六】 やうすを見てあとから行かん。

【七】 こぎのり。

道ふ、劉唐兄弟、你と學究先生と且財賦老小を把つて船裏に裝載し、逕ちに李家道口の左側に撐ぎ去いて相等て、我々些の頭勢を看て隨後に便ち到らん。阮小二兩隻の棹船を選び、娘と老小と家中の財賦とを把つて都て船裏に裝下し、吳用劉唐各一隻を押着し、七八箇の伴當をして船を搖了し、先づ李家道口に到り去いて等たしめ、又阮小五阮小七に、小船に、撐駕して、此の如く迎敵せよと分付し、兩箇各船を棹し去了す。且説く、何濤并に捕盜巡檢官兵を帶領し、漸く石碣村に近づく。但河埠

に船有るを見れば、盡數奪了し、便ち水を會する官兵をして且船裏に下り進發せしめ、岸上の人馬と船騎相迎へ、水陸並び進んで阮小二の家に入り、一齊に納喊し、人兵並び起り、撲將入去す。早く是空房にして裏面只些の麤重の家火あるのみ。何濤道ふ、且去いて幾家の附近の漁戸を拏れと。問ふ時說道ふ、他的の兩箇の兄弟阮小五阮小七は、都て湖泊裏に在りて住す、船に非れば去る能はず。何濤と巡檢と商議して道ふ、這の湖泊裏、港汊又多、路逕甚だ難る、抑且水蕩坡塘、深淺を知らず、若是四分五落し去りて捉ふる時は、又怕る這の賊人の姦計に中らんことを。我々馬匹を把つて都て人をして看守せしめて這の村裏に在き、一發に都て船裏に下り去らんと。當時捕盜巡檢竝に何觀察、一同做公的人等、都て船に下り了す。那時捉るの船止に百十隻のみならず、也撐す的有り、亦搖ぐの有り、一齊に都て阮小五の打魚の莊上を望み來る。行くこと五六里に到らず、水面只聽得たり蘆葦中間人有りて嘲歌す。衆人且船を住め了りて聽く時、那の歌に道ふ、

【八】 ことごとく。

【九】 船のあつかへる官兵。

【一〇】 所帶道具。

【一一】 趙は宋の天子の姓なり。

魚を打す一世蓼兒汪、青苗を種る麻を種る。酷吏賊官都て殺盡し、忠心報答せん。趙官家。何觀察并に衆人聽了して盡く一驚を喫す。只見る遠遠地に一箇の人獨り一隻の小船兒に棹さして唱將し來る。認め得るの有り、指さして道ふ、這箇便ち阮小五なりと。何濤手を把りて一招す、衆人力を併せて向前し、各器械を執りて挺看し迎將し去る。只見る阮小五大笑し罵つて道ふ、你這等

百姓を虐害するの賊官、直に此の如く大膽に、敢て來つて老爺を引き甚麼を做す、却て是來つて虎鬚を拵くならずや。何濤の背後に弓箭を射るを會する有り、箭を搭上し、弓を拽滿し、一齊に箭を放つ。阮小五箭を放ち來るを見、樺楸を擎着、翻筋斗して水裏に鑽下し去る。衆人趕到りて、跟前すれば箇の空を拵る。又行いて兩條の港汊に到らず、只聽得たり蘆花の蕩裏に唵哨を打するを。衆人船を把つて擺開すれば、前面兩箇の人の一隻船を棹着し來り、船頭上に一箇の人の頭に青箬笠を戴き、身に綠蓑衣を披、手裏に(一)條の筆管鎗を燃着せるを立着す。口裏に也唱着し道ふ、

老爺生長す石碣村、稟性生來人を殺すを要す。先づ何濤巡檢の首を斬りて、京師に趙王君に獻與せん。

何觀察并に衆人聽了りて又一驚を喫し、一齊に看る時、前面の那箇の人は鎗を燃着して歌を唱着し、這箇は櫓を搖着せり。認め得る有り、說道す、這箇は正に是阮小七なりと。何濤喝し道ふ、衆人力を併せ向前して先づ這箇の賊を拿住し、走了せしむる休れ。阮小七聽得て笑ひ道ふ、潑賊と、便ち鎗を把つて只一點す、那船、便ち使轉し來り、小港裏を望みて、串着して走る。衆人喊を發着して趕將し去る。這の阮小七、那の搖船のと飛ぶも也似て櫓を搖着し、口裏に唵哨を打着して、小港汊中を串着して只顧走る。衆官兵趕來り

- 【三】 樺楸は船をこぐ具。
- 【四】 蕩も亦水。
- 【五】 指すなり。一トさしづす。
- 【六】 眞中をとほす、それをさして。

趕去り、那の水港の窄狭し了るを看見す。何濤道ふ、且住まれ。船を把つて且泊了し、都て岸邊に傍了、岸に上りて看る時、只見る茫茫蕩蕩、都て是蘆葦にして正に一些の旱路を見ず。何濤心に疑惑し、却て商議し定まらず、便ち那の當村の住の人に問ふ。說道す、小人們是此に在りて居住すと雖も、也這裏に許多の去處有るを知道せず。何濤便ち兩隻の小船を划着し、船上に各三兩箇の做公的を帯びて前面に去いて路を探らしむ。去き了りて兩箇の時辰有餘、回報を見ず。何濤道ふ、這厮們、好た事を了せずと、再び五箇の做公的を差し、又兩隻の船を划き去つて路を探らしむ。這の幾箇の做公的、兩隻の船を划了し、又去り了る一箇の多時辰、並びに些の回報を見ず。何濤道ふ、這の幾箇は都て是久しく慣れたる做公的、(一七)四清六活的人、却て怎地して也事を曉らずして、如何ぞ一隻船をして轉來して回報せしめざる、想はず這些の帶來的官兵、人人亦顛倒を知らざる。天色又看看晚了す、何濤思想す、此に在りて邊際に着せず、怎生奈何、我須らく自ら去る一遭するを用ふべしと。一隻の疾快の小船を揀み、幾箇の老郎の做公的を選了し、各器械を拿了り、五六把の樺楸を、(一八)漿起せしめ、何濤船頭に坐在し、這箇の蘆葦港裏を望みて蕩將し去る。那の時已に是日没して西に沈み、船を划得して開き、約そ五六里の水面を行了す。看見す側邊岸上一箇の人、(一九)把の鋤頭を提着して走將し來る。何濤問道ふ、兀那の漢子、你是甚人、這裏是甚麼の去處ぞ。那人應へ道ふ、我は是這村裏の莊家、

- 【一七】 物のよくわかる的。
- 【一八】 器械は兵器。
- 【一九】 こぎ出し。

這裏 斷頭溝と喚做す、路没し。何濤道ふ、你曾て兩隻の船の過來するを見るや麼、那人道ふ、是來りて阮小五を捉るのならずや。何濤道ふ、你恁地にして是來りて阮小五を捉るのなるを知得たる。那人道ふ、他們只前面の烏林裏に在りて 斷打す。何濤道ふ、這裏を離るる還て多少の路有る。那人道ふ、只前面に在りて望み得て見る便ち是なり。何濤聽得て便ち船を擱ぎて前去して接應せしめんとし、便ち兩箇の做公的を差はし、櫂又を拿了して岸に上らしめ來る。只見那の漢鋤頭を提起し來り、手到つてこの兩箇の做公的を把つて一鋤頭一箇に翻筋斗し、都て水裏に打下し去る。何濤見了りて一驚を喫し、急に身を跳起し來る時、却て待に岸に遡上せんとす。只見那の隻船忽地に塘將開し去り、(一) 水底下より一箇の人を鑽起し來り、何濤の兩腿を把つて只 (二) 一扯し、撲通地に水裏に倒撞し去る、那の幾箇の船裏的は、却て走らんと待要、この鋤頭を提ぐる的に、船に趕將上し來りて、一鋤頭一箇に頭を排して打下し去られ、腦漿また打出し來らる。この何濤水底下に這人に倒拖して岸に上せ來られ、就ち他的の 胳膊を解下し來りて網了せらる。水底下の這人を看れば却て是阮小七、岸上に鋤頭を提る的那漢は就ち阮小二、弟兄兩箇何濤を看若して罵り道ふ、老爺弟兄三箇從來人を殺し火を放つを愛す、量るに你這厮、甚麼に直ひし得ん、如何ぞ大膽に特地に官兵を引着し、來つて我門を捉へんとする。何濤道ふ、好

- 【一】 頭をきる溝、かかる地名あるにはあらず、時に應じて拈出し、何濤を驚かすのみ。
- 【二】 たたかひ居れり。
- 【三】 水底下よりぬつと出て。
- 【四】 一トひきひつぱりて、ぼんと水裏にひきこむ。
- 【五】 ばらまき。

漢、小人上命を奉じ差遣せらる、蓋し (一) 己に由せず、小人怎ぞ敢て大膽に來りて好漢を捉ふるを要せん、望むらくは好漢憐見すべし、家中箇の八十歳の 老娘有りて人の養贍する無し、乞ふ性命を 饒恕し則箇。阮家弟兄道ふ、且つ他を把つて來つて箇の (二) 粽子と細り做して船船裏に在き、那の幾箇の屍首を把つて都て水裏に (三) 擲去し去れと。箇箇胡哨一聲すれば、蘆葦叢中より四五箇の打魚的の人を鑽出し來り、都て船上に上りす。阮小二阮小七、各一隻に駕了して出來る。且説く這の捕盜巡檢、官兵を領着して、都て船裏に在り、説道ふ、何觀察他道ふ、做公的事を了せずと、自ら去いて路を探り、也去了する許多時、回り來るを見ず。那の時正に是 (四) 初更の左右、星光天に滿つ、衆人都て船上に在りて (五) 歇涼す。忽然として只見一陣の怪風起るを。但見

- 【一】 自分の勝手にはならず、上命にて參りたるなり。
- 【二】 はは。
- 【三】 恕しけれなば有り難し。
- 【四】 ちまきの如く網りてすて
- 【五】 なげすて。
- 【六】 八時前後。
- 【七】 やすみすみ居る。

沙を飛し石を走らせ、水を捲き天を揺がす。黒漫漫として烏雲を堆起し、昏鄧鄧として急雨を催し來る。荷葉を傾翻し、波心に滿ちて翠蓋交加し。蘆花を擺動し、湖面を遠りて白旗繚亂す。吹折る崑崙山頂の樹、喚醒す東海の老龍君。那の一陣の怪風、背後より吹將し來る。吹得て衆人面を掩ひ大に驚き、只得苦を叫ぶ。那の纜船の

索を把つて都て刮斷し了り、正に 擺布の處沒し、只聽得たり後面 胡哨響くを。風を迎着して
 看る時、只見る蘆花側畔より一派の火光を射出し來る。衆人道ふ、今番却て 休了すと。那の大船
 小船、約そ四五隻有り、正に這の大風に 刮得され、你 撞き我磕ち、捉摸し住まらず。那の火
 光却て早く面前に來到す。原來都ては一叢の小船、兩隻家幫住し、上面には滿滿と蘆葦柴草を堆
 着し、刮刮雜雜と燒着し、順風に乘着して直に衝將し來る。那の四五隻の官船、屯塞して一
 塊と做る、港汊又狭く、又廻避の處沒し。那の
 頭等の大船也十數隻有り、却て他の火船に
 推來して、鑽して大船隊裏に在りて一燒さる。
 水底下には原來又人有りて船を扶助着して燒將
 し來る。大船上の官兵を燒得て、都て岸に跳上
 り來り、逃命奔走す。想はず四邊 盡く是蘆葦
 野港、又早路沒し。只見る岸上の蘆葦又刮刮雜雜也燒將起來す。那の捕盜の官兵、兩頭走る處沒
 し、風又緊しく、火又猛に、衆官兵只得たり 鑽去して都て爛泥裏に奔りて 立地す。火光叢中、只
 見る一隻の小快船あり、船尾上に一箇は頭を搖着し、船頭上に一箇の先生を坐着す。手裏明晃晃地
 に一口の寶劍を拿着し、口裏に喝道す、一箇を走了せしむる休れと。衆兵都て爛泥裏に在りて慌して

- 【三】 擺はならべる、布はお
- 【三】 處置する、始末する。
- 【三】 胡哨、哨哨同じ。
- 【三】 もうおしまひだ。
- 【三】 ふきめくる。
- 【三】 撞突する也、磕着する也。
- 【三】 磕はたりとなるなり。
- 【三】 兩隻家は兩隻價なり、兩
- 【三】 隻ほど結びとめ、つなぎあ
- 【三】 屯はとどまる、塞はふさ
- 【三】 がるおしまりて。
- 【三】 頭等は一等。
- 【三】 もぐり出して。
- 【三】 立つてゐる。

一堆と做る。説ふこと猶未了せず、只見る蘆葦東岸の兩箇の人四五箇の打魚的を引着し、都て手裏
 明晃晃と刀鎗を拿着して走來し、這邊の蘆葦の西岸又是兩箇の人、也四五箇の打魚的を引着し、手
 裏也明晃晃と 飛魚鈎を拿着し走來る。東西兩岸四箇の好漢、并に這の夥の人、一齊に手を動か
 し、排頭兒に擲將し來る。時を移す無くして許多の官兵を把つて都て擲死して爛泥裏に在り。東岸
 の兩箇は是晁蓋阮小五、西岸の兩箇は是阮小二阮小七、船上那箇の先生は便ち是風を祭るの公孫
 勝、五位の好漢十數箇の打魚的の莊家を引着
 し、這夥の官兵を把つて都て擲死して蘆葦蕩裏
 に在り、單單に只一箇の何觀察を刺し得て、
 細り做して粽子も也似て 丟して船艙裏に在
 り。阮小二提將して船上に上り來り、指着して罵
 りて道ふ、你這厮是濟州の一箇の百姓を詐害するの蠢蟲、我本待に你を把つて碎屍萬段にせんとす
 るも、却て你的の回り去つて那の濟州府の事を管するの賊驢に對して、俺が這の石碣村の阮氏三雄、
 東溪村の天王晁蓋、都て是 撩撥を好む的ならず、我也你的城裏に來りて糧を借らず、他我也這
 の村中に來りて死を討むるを要する休れ、倘或は 正眼兒に覷着せば、你が是の一箇の 小小の州
 尹と道ふ休れ、由蔡太師幹人を差はし來て我々を拿ふるを要すると説く休れ、便ち是蔡京親自來る

- 【四二】 飛魚鈎は不明なれど我邦
- 【四二】 のもりの類。
- 【四三】 ならびてつき立來る。
- 【四四】 ひとり。
- 【四五】 丟は俗語にいふ、抛つて
- 【四六】 手出しする。
- 【四七】 まともに會ふたらば。
- 【四八】 餘の如き小小の州尹は論
- 【四八】 するにも足らず、蔡太師の幹
- 【四八】 人の來たなども論するに足ら
- 【四八】 す。

時、我也三二十箇の透明的の窟籠を搦せんと説ふを要す、俺們你を放して回り去らしむ、再び來るを得る休れ、你的の那管の鳥官人に傳與し、他をして死を討ぬるを要する休らしめよ、這里に大路無し、我兄弟をして你を送りて路口に出去らしめん。當時阮小七一隻の小快船を把つて、何濤を載了し、直に他を送りて大路口に到り、喝して道ふ、這裏一直に去らば便ち路を尋ぬる處有らん、別的の衆人は都て殺了せり、道ひ難し、只恁地に好好你を放了し去らしめば、也你的の州尹の賊驢に笑は喫ん、且つ你的の兩箇の耳朵を請下し來りて表證と做さん。阮小七身邊に尖刀を拔起し、何觀察の兩箇の耳朵を把りて割下し來り、鮮血淋漓、刀を挿了し、胳膊を解了して放つて岸に上し去る。詩に曰く、

官兵盡く付す斷頭溝に、何濤を放さんと要て便ち休せず。耳朵を

留着して説話を聴かしめ、旋驢耳を將めて驢頭に代ふ。

何濤性命を得了り、自ら路を尋ねて濟州に回り去了す。且説く晁蓋公孫勝阮家三弟兄并に十數箇の打魚的と一發に都て五七隻の小船に駕了し、石碣湖の村泊を離了し、逕ちに李家道口に投じ來り、那裏に到り得て吳用劉唐の船隻を相尋着して合して一處と做る。吳用、官兵を拒敵する一事を問道ふ。晁蓋備細に説了す。吳用衆人大に喜び、船隻を整頓し、一同を齊了し、早地忽律朱貴の酒店裏に來到し、來りて相投す。朱貴許多の人の來りて投托し入夥するを見了し、慌忙迎接す。吳用來歴を將て實

【四九】あなをあげてくれる。
【五〇】くそ役人に云傳へ。
【五一】放さんとしてただちに放さす。
【五二】首の代りに耳をとりました。

に朱貴に説與す、聽了して大に喜び、逐一都て相見了り、請ひて廳上に入り坐定し、忙はしく酒保をして分例酒を安排し來り、衆人を管待し、隨即一張の皮鞞弓を取出し、一枝の響箭を搭上し、那の對港の蘆葦中を望着して射去る。響箭の到る處、早く見る小嘍囉有り、一隻船を搖出し來る。朱貴急に一封の書を寫了し、備細に衆豪傑入夥の姓名人數を寫し、先づ小嘍囉に付與して齎了し、寨裏に去いて報知せしめ、一面又羊を殺して衆好漢を管待す。一夜を過了し、次日早起し、朱貴一隻の大船を喚び、衆多の好漢を請ひて船上に上り、就ち同に晁蓋等の來るの船隻を帯び、一齊に山寨裏を望み來る。行了する多時、早く一處の水口に來到す。只聽得たり岸上鼓響き鑼鳴るを。晁蓋看る時、只見る七八箇の小嘍囉、四隻の哨船を划出し來り、朱貴を見了して喏を聲了し、自ら舊に依り先づ去了す。再び説く一行の人、金沙灘に來到して岸に上り、便ち老小の船隻、并びに打魚的の人を留めて此に在りて等候せしむ。又見る數十箇の小嘍囉山を下り來り、接引して關上に到る。王倫一班の頭領を領着して、關を出でて迎接す、晁蓋等慌忙禮を施す。王倫答禮して道ふ、小可王倫、久しく晁天王の大名を聞く、大名雷の耳に灌ぐが如し、今日且喜ぶ草寨に光臨せられしを。晁蓋道ふ、晁某は是箇の書史を讀まざる的人、甚だ是麓齒、今日事藏拙に在り、甘心して頭領の帳下と與に一小卒と做らん、棄てられずんば、幸甚なり。王倫道ふ、此の如く説ふことを休めよ、且請ふ小寨

【三】山寨の者、他の好漢を待
遇する定規の筵席を分例酒と
【四】拙はまづいこと、藏はか

いふなり。

に到れ、再び計議するあらん。一行從人都て兩箇の頭領に跟着して山に上り來り、大寨聚義廳上に到り得たり。王倫再三謙讓す、晁蓋一行の人皆に上る、晁蓋等七人右邊に在りて、一字兒に立下し、王倫と衆頭領と左邊下に在り一字兒に立下し、一箇箇都て禮を講じ罷り、賓主を分つて對席して、坐下す。王倫階下の衆小頭目を喚ぶ、喏を聲して已に畢る。一壁廂山寨中の鼓樂を動起し、先づ小頭目をして山下に去いて來るの從人を管待せしむ。關下別に客館有り、安歇せしむ。詩に曰く、

【五七】 立下、其下の語の使ひ方ここに分明す。こしかける也。
【五八】 片側にて。
【五九】 詩意、王倫の心小さく誠少きをいへり。
【六〇】 笛吹き太鼓たたく、音樂也。

人夥分明に是一羣、相留めて意氣便に須らく親しかるべし。如何ぞ彼を待つて賓客と爲さん、只恐る身の主人と作り難きを。

且説く、山寨裏に兩頭黃牛、十箇の羊、五箇の猪を宰了し、大吹大搦し、衆頭領酒を飲む、中間に、晁蓋胸中の事を把つて頭より尾に至る都て王倫等衆位に告訴す。王倫聽罷りて駭然了する半响、心内躊躇して聲を做し得ず、自己沈吟し、虚しく應答す。筵宴晚に至り席散す、衆頭領晁蓋等衆人を送りて關下の客館内に安歇せしむ、自ら來的人有りて伏侍す。晁蓋心中歡喜し、吳用等六人に對

して説道ふ、我々這等迷天の大罪を造下す、那裏に去いて身を安んせん、是這の王頭領此の如く錯愛するにあらすんば、我等皆已に所を失はん、此恩報するを忘る可からず。吳用只是冷笑す、晁蓋道ふ、先生何の故に只是冷笑するぞ、事有らば以て通知す可し。吳用道ふ、兄長性直なり、你王倫肯へて我々を收留すると道ふや、兄長他的の心を看す、只他的の顔色動靜規模を觀るなり。晁蓋道ふ、他の顔色を觀る怎地。吳用道ふ、兄長見すや、他、早間席上兄長と説話す、倒つて交情有り、次後兄長、許多の官兵捕盜巡檢を殺し、何濤を放し、阮氏三雄此の如く豪傑なるを説出す、他便ち些の顔色變了する有り、是口中應答し、動靜規模ありと雖も、心裏好生然りとせず、若是我々を收留するに心あらば、只就ち早上便ち坐位を議定し了せん。杜遷、宋萬、這の兩個は自ら是窟窿的人、客を待つ事、如何ぞ省り得ん、只林冲有り、那人は原是京師禁軍の教頭、大郡的人なり、諸事曉り得、今已むを得ずして第四位に坐了す、早間林冲が王倫の兄長に答應する模様を看るを見るに、他自ら便ち些の不平之氣有り、頻頻に眼を把つて這の王倫を、臆、心内に自己躊躇す、我這人を看るに倒つて顧盼の心有り、只是已むを得ざるのみ、小生略片言を放ち、他をして本寨自ら相火併せしめん。晁蓋道ふ、全く先生の妙策良謀に仗り、以て身を容る可し。當夜七人安歇了る。次早天明、只見る人の報じて林教頭相訪ふと道ふを。吳用

【六一】 早間は最初といはんが如し。
【六二】 大郡的は田舎的ならずとす。
【六三】 是は氣にくはずして看る也、睥睨とも少しく異なる。

便ち晁蓋に對し道ふ、這人來りて相探る、俺が計に中り了る。七箇人慌忙起來して迎接し、林冲を邀へ請じて客館裏面に到る。吳用向前稱謝し道ふ、夜來重く恩賜を蒙る、拜擾當らず。林冲道ふ、小可恭敬を失ふ有り、奉承の心有りと雖も、奈縁せん其位に在らず、望むらくは罪を恕るるを乞はんと。吳學究道ふ、我等是不才なりと雖も、草木たるに非ず、豈頭領錯愛之心、顧盼之意を見ざらんや、感恩淺からず。晁蓋再三謙讓して林冲に譲りて上坐せしむ。林冲那裏に肯んせん、晁蓋を推し上首に坐了せしめ、林冲便ち下首に在りて坐定す。吳用等六人一帶に坐下す。晁蓋道ふ、久しく教頭の大名を聞く、想はざりき今日會ふを得んとは。林冲道ふ、小人舊東京に在りし時、朋友と交る、禮節曾て悞有らず、然く今日能く尊顔を見ると雖も、平生の願を遂ぐるを得ず。特地に逕ちに來りて陪話す。晁蓋稱謝し道ふ、深く厚意を感ず。吳用便ち動問し道ふ、小生、日有り久しく聞く、頭領東京に在りし時、十分豪傑なりしを、知らず何に縁りて高俅と睦ます、陷害さるるを致せるを、後聞く滄州に在りて亦火に大軍草料場を燒了せらる、又他の計策と、向後知らず誰か頭領を薦めて山に上れるを。林冲道ふ、若高俅這賊の陷害の一節を説けば、但提起するも毛髮植立す、又此讐を報じ得る能はず、此に來りて身を

【六五】 御世話な相かけ相濟ます。
【六六】 十二分恭敬致しまゐらざんと思へども位地無き故致し方なしと也。
【六七】 有日久聞は、かれて前方より承知致し居る。
【六八】 原本、友下、有に作る、其後。

容るるは、皆是柴大官人舉薦して此に到るなり。吳用道ふ、柴大官人は江湖上の人の稱して小旋風柴進と爲す的に非る莫き麼。林冲道ふ、正に是此の人。晁蓋道ふ、小可多く人の柴大官人、義に仗り財を疎んじ、四方の豪傑を接納すと説ふを聞く、説ふは大周皇帝の嫡派子孫と、如何にしてか能く他に會するに勾らば一面も也好し。吳用又林冲に對して道ふ、這の柴大官人の名は寰海に聞え、聲は天下に播する的人なるに據るも、教頭若武藝超羣なるに非ずんば、他如何ぞ肯て薦めて山に上さん、是吳用の過稱に非ず、理合に王倫此の第一位を頭領に譲りて坐せしむべし、此天下の公論、也柴大官人の書信に負了せざるなり。林冲道ふ、先生の高談を承、只小可大罪を犯下し、柴大官人に投奔す、他の林冲を留めざるに非ず、誠に恐る累を他に負はすことの不便なるを、自ら願ひて山に上る。想はざりき今日去住門無し、位次の低微なるに在るに非ず、只王倫心術定まらず、語言准せず、以て相聚まり難し。吳用道ふ、王頭領の人を待ち物に接するは、一團の和氣なるに、如何ぞ心地倒つて恁窄狭なる。林冲道ふ、今日山寨天幸にして衆多の豪傑の此に到りて相扶け相助くるを得たり、錦上に花を添ふるに似、早苗の雨を得るが如し、只賢を妬み能を嫉むの心を懐く、但恐る衆豪傑の勢力相壓するを、夜來兄長の説く所の衆位官兵を殺死するの一節を見るに因りて、他便ち些の然りとせざる有り、就ち相留むるを肯んせざるの模様を懐く、此を以て衆豪傑を請うて關下に來りて安歇せ

【七〇】 ゆくも住まるも心に任せず、位地の低微を論するにばあらず。ただ王倫の心たのもしからず語言もあてにならぬため、共に處り難しと也。

しむ。吳用便ち道ふ、既に然く王頭領這般の心有り、我等他の發付を待つを要する休くして、自ら別處に投じ去らば便了せん。林冲道ふ、衆豪傑 外にせらるるの意を生ずる休れ、林冲自ら分曉あり、只衆豪傑退去の意を生ずるを恐れて、特に來りて早早説知す、今日他の如何に相待つを看、若這厮語言理有りて昨日の似ならざれば萬事論を罷めん、倘若這厮今朝 半句の語有りて參差する時は、盡く林冲の身上に在らん。晁蓋道ふ、頭領此の如く錯愛する、俺が弟兄皆厚恩を感ず。吳用便ち道ふ、頭領我が弟兄面上の爲に、倒つて頭領をして舊弟兄と顔を分たしめんや、若是容る可くば即ち容れよ、容る可からざる時は小生等登時退くことを告げん。林冲道ふ、先生差り、古人言ふ有り、惺惺は惺惺を惜み、好漢は好漢を惜むと、量るに這の一箇の 潑男女腌臢畜生、終に何の用を作さんや、衆豪傑且請ふ寛心せよ。林冲身を起し、衆人に別了して説ふ、少間して相會はんと。衆人相送りて出で來る、林冲自ら去つて山に上り來る。正に是、如何ぞ此處人を留めざる、言ふ休れ自ら人を留むる處有り。人を留む應き者人の留まるを恐れ、身は留まり難きを苦み客を留めて住まらしむ。

當日多時没くして、只見る小喽囉到來し、相請ひて説道す、今日山寨裏の頭領衆好漢を相請し、山寨の水寨の亭上に去いて筵會せんと。晁蓋道ふ、頭領に上覆す、少間便ち到らんと。小喽囉去了す。晁

【七二】 うとんぜらるる。
 【七三】 うまく話の合はずして兎角くひちがば某が所在があります、貴下等に困らせせばぬ。
 【七四】 ばかもの、きたなき奴。

蓋吳用に問ひて道ふ、先生此一會如何。吳學究笑ひ道ふ、兄長放心せよ、此一會倒つて 分有りて山寨の主と做らん、今日林教頭必然王倫を火併するの意有り、他若些の 心懶あらば、小生三寸不爛の舌に憑着して、 彼の火併せざるに由せし、兄長身邊各暗器を藏了し、只小生の手を把り來つて鬚を撚るを看て 號と爲し、兄長便ち協力すべし。晁蓋等衆人暗に喜ぶ。辰牌已後、三四次人來りて催請す。晁蓋と 衆頭領と身邊各器械を帶了し、暗藏 て身上に在り、結束し得て端正に、却て來りて席に赴かんとす。只見る宋萬親しく自ら馬に騎り、又來つて相請す。小喽囉七乗の山轎を擡過す、七箇の人都在轎子に上る、一逕南山水寨裏に投じ來り、山南に到り得て看る時、端的景物非常、直に寨後の 水亭子前に到り轎を下す。王倫、杜遷、林冲、朱貴、都て出來りて相接邀し、請うて那の水亭子上に到り、賓主を分つて坐定す。那の水亭一遭の景致を看る時、但見る、四面の水簾高く捲き、周廻の花は朱欄を壓す。満目の香風、萬朶の芙蓉綠水に鋪き、眸を迎ふる翠色、千枝の荷葉芳塘を遶る。華簷の外陰陰たる柳影。鎖牕の前細細たる松聲。江山の秀氣亭臺に満ち、豪傑一羣來りて相會す。

當下王倫と四箇の頭領杜遷、宋萬、林冲、朱貴、坐して左邊主位上に在り、晁蓋と六箇の好漢吳用、

【七五】 さうなるべき自然の分ありて。
 【七六】 ここの衆頭領は吳用以下三阮までなり、まことに衆好漢に作るべし。
 【七七】 あひづ。
 【七八】 ここの衆頭領は吳用以下三阮までなり、まことに衆好漢に作るべし。
 【七九】 子は意無し。

公孫勝、劉唐、三阮と右邊客席に坐在す。塔下の小嘍囉、輪番に盞酒を把り至る、酒數巡に至り、食兩次を供す。晁蓋と王倫と盤話す、但聚義の一事を提起すれば、王倫便ち問話を把つて支吾し開去す。吳用眼を把つて來りて林冲を看る時、只見る林冲交椅上に側坐し、眼を把つて王倫の身上を睨る。看看酒を飲んで午後に至る。王倫頭を回して小嘍囉に取り來れと叫ぶ。三四箇の人去つて多時ならず、只見る一人二箇の大盤子を捧げ、裏に五錠の大銀を放着す。王倫便ち身を起し盞を把り、晁蓋に對して說道ふ、衆豪傑の此に到り義に聚まるを蒙むるを感ず、只恨むらくは弊山小寨是、一洼の水、如何ぞ許多の眞龍を安んじ得ん、聊か些小の薄禮を備ふ、萬望す笑留して、大寨に投じて馬を歇められんことを煩はす、小可人をして親ら麾下に到りて降を納れん。

晁蓋道ふ、小子久しく聞く大山の賢を招き士を納るることを、一逕地に特に來りて投托し入夥せんとす、若是相容るる能はずんば、我等衆人自ら行いて告退せん、重く賜ふ所を蒙る白金は決して敢て領せず、敢て自ら豊富を誇るに非ざるも、小可聊か些の盤纏使用すべきあり、速に請ふ厚禮を納回したまはんことを、只此に別を告げん。王倫道ふ、何の故に推却したまふ、是弊山の衆位豪傑を納れざ

【八〇】 盤話は互に話し合ふ也。
 【八一】 仲間入の事を話し出せば王倫顧みて他を云ひ、その談をせぬ也。
 【八二】 五錠。五十兩、大銀は十兩。
 【八三】 少しばかりの一下くぼみ

だまりの水中、中中多くの龍をわき難しとは辭令をよくして逐拂ふ也。
 【八四】 そちらへ降参せんと飽まで辭を巧にして逐出す也。
 【八五】 おいとま致さん。

るに非ず、奈縁只糧少く房稀なる爲に、恐らくは日後足下を悞了し、衆位の面皮好からざらん、此に因りて敢て相留めずと。言を説ふ未だ了らず、只見る林冲雙眉剔起し、兩眼圓睜し、交椅上に坐在して大喝して道ふ、你前番我が山に上り來る時、也、推し道ふ、糧少く房稀なりと、今日晁兄と衆豪傑此の山寨に到る、你又這等の言語を發出し來る、是何の道理ぞ。吳用便ち説き道ふ、頭領怒を息めよ、自らは我等來る的不是なり、倒つて你山寨の情分を壞了す、今日王頭領禮を以て我等を發付して山を下らしめ、盤纏を送與し、又曾て熱趕將し去らず、請ふ頭領怒を息めよ、我等自ら去り休せん。林冲道ふ、這は是笑裏に刀を藏し、言清く行濁る的人、我其實今日他を放し過さず。王倫喝し道ふ、你看よ這の畜生、又醉了せず、言語を把り來つて我を傷觸す、却て是上下を反失するにあらずや。林冲大に怒りて道ふ、量るに你是箇の落弟の窮儒、胸中又文學没し、怎ぞ山寨の主と做り得ん。吳用便ち道ふ、晁兄、只我等の山に上りて相投するに因りて反つて頭領の面皮を壞了す、只今般隻を辦了して、便ち當に告退すべし。晁蓋等七人便ち身を起し、亭子を下らんと要す。王倫留め道ふ、且請ふ席終了して去けと。林冲卓子を把つて只一脚に踢て一邊に在り、身を搶起し來り、衣襟底下より一把の明晃晃たる刀を擧出し來り、措的火雜雜たり。吳用便ち手を把つて鬚鬚を將て一摸す。晁蓋、劉唐便ち亭子に上り來

【八六】 ことわりがづけいふ。
 【八七】 發付は出よと申渡す氣味なり、禮を以ての二字を冠し此語を用ひたるは、吳用の毒

舌なり、趕將去の上に熱の一字を置くも毒舌なり、無理にひどく趕出さずといひて却て語中に刺有り。林冲を激ます

りて、虚しく王倫を攔住し叫道ふ、(五)火併を要せずと。吳用一手に林冲を扯住し、便ち道(五)ふ、頭領造次すべからず。公孫勝假意に勧め道ふ、我等の爲に大義を壞了する休れ。阮小二便ち去つて杜遷を(五)幫住し、阮小五は宋萬を掣住し、阮小七は朱貴を掣住す、嚇し得て小嘍囉

也。
【八八】 行つてしまひませう。
【八九】 ひき出し來り。
【九〇】 拵はひよいと引抜くなど云ふ人あれど推量ならん。上句に明晃晃と云へば既に抜きたる也。擲に同じ、手にてとる也。火雜雜は勢の猛なる形容

なり。的は得と同じ。
【九二】 仲間のやりあひをなまざる。
【九三】 ひきとめて、頭領をこつなさるな。
【九四】 おさへとどめ。
【九五】 ぐさつと。

等、目瞪口呆。林冲王倫を拿住して罵つて道ふ、你是一箇の村野の窮儒、杜遷宋萬に虧りて這裏に到るを得たり、柴大官人這等你を資助して盤纏を賙給し、你と相交はり、我を舉薦し來る、尙且許多推却す、今日衆豪傑特に來りて相聚まる、又他を發付して山を下り去るを要す、この梁山泊は便ち是你的なるか、你這の賢を嫉み能を妬するの賊、殺さずんば你を要し何か用あらん、你也大量大才無し、也山寨の主と做り得ず。杜遷、宋萬、朱貴、本待に向前して來り勸めんとす、この幾箇に緊緊擊着され、那裏に敢て動かん。王倫那時、也路を尋ねて走らんとす、却て晁蓋劉唐兩箇に攔住さる、王倫頭勢の好からざるを見て、口裏に叫び道ふ、我が的心腹、都て那裏に在るやと。幾箇の身邊の心腹を知る的人有りとも雖も、本待に來り救はんとも要るも、林冲の這般の兇猛の頭勢を見了して誰か敢て向前せん。林冲即時に王倫を拿住して、又罵了する一頓、心窩裏に去いて只一刀、(五)脛察的

に擲倒して亭上に在り。憐む可し王倫、多年の寨主と做了し、今日死して林冲の手に在り。正に古人の言の、量大なれば福も也大、機深ければ禍も亦深し、といふに應ず。詩有り證と爲す、獨り梁山に據る志羞づべし、賢を嫉み士に傲り寛柔少し。祇寨主を將て身の有と爲し、却て羣英を把つて冠簪と作す。酒席歡ふ時殺氣生じ、杯盤響く處人頭落つ。智懷褊狹真に恨むに堪へたり、賢を留むるを肯せずして命留らず。

晁蓋王倫を殺了するを見て、各刀を掣して手に在り。林冲早く王倫の首級を把りて割下し來り、提げて手裏に在り。那の杜遷、宋萬、朱貴、都て跪下して說道ふ、願はくは哥哥に隨つて(五)鞭を執り轡に墜はん。晁蓋等慌忙三人を扶起し來る。吳用就ち(五)血泊裏に就て(五)頭(一)把の交椅を拽き過し、便ち林冲を納れて坐地せしめ、叫んで道ふ、如伏せざる者有らば、

【九五】 鞭は鎧の俗字。句は隨從せん意。
【九六】 血の海の中より。
【九七】 第一位の椅子。
【九八】 ただ今。
【九九】 數句無しは數句にあらずの意。

王倫を將て例と爲さん、今日林教頭を扶けて山寨の主と爲さん。林冲大に叫んで道ふ、先生差へり、我今日只衆豪傑の義氣を重しと爲すが爲に、(五)上頭這の不仁の賊を火併し了せり、實に此位を謀るを要するに心無し、今日吳兄却て此第一位を譲りて林冲に與へて坐せしむ、豈天下の英雄の恥笑を惹かざらんや、若相逼らんと欲すれば、寧ろ死あらんのみ、弟片言有り、知らず衆位肯て我に依らんや、衆人道ふ、頭領の言ふ所、誰か敢て依らざらん、願はくは其言を聞かん。林冲(五)言數句無く、

話一席ならず、分教有り、斷金亭上多少斷金の人を招き、聚義廳前幾番聚義の會を開く、正に是天に替りて道を行へば人將に至らんとす、義に仗り財を疎んずれば漢便ち來る。畢竟林冲吳用に對して甚の言語を説出し來るや。且つ下回の分解を聽け。

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 林冲, 王倫, and 晁蓋）

第二十回

梁山泊に義士晁蓋を尊み、鄆城縣に月夜劉唐走る。

話說す、林冲王倫を殺了し、手に尖刀を拿つて衆人を指着して説き道ふ、林冲禁軍に係ると雖も、配に遭ひて此に到る、今日衆豪傑の此に至りて相聚まる、争奈王倫心胸狹隘にして賢を嫉み能を妬み、推故して納れざるが爲に、此に因りて這廝を火併了す、林冲此位を圖らんと要するに非ず、我が胸襟膽氣に據着、焉ぞ敢て官軍を拒敵し、君側の元凶首惡を剪除せん、今晁兄有り義に仗り財を疎んじ、智勇足備す、方今天下人其名を聞き、伏せざる有る無し、我今日義氣を重しと爲し、他を立てて山寨の主と爲さん、好きや麼や。衆人道ふ、頭領これを言ふ極めて當る。晁蓋道ふ、不可なり、古より 強兵も主を壓せず、晁蓋強殺すとも、只是箇の遠くより來り新に到る的人、安んぞ敢て便ち來りて土を占めんや。林冲手を把つて向前し、晁蓋を將ゐて推して交椅の上に在き、叫んで道ふ、今日事已に 到頭す、請ふ推却する勿れ、若從はざる者有らば王倫を將て例と爲さんと、再三再四晁蓋を扶けて坐了せしめ、林冲喝し道ふ、衆人就ち亭前に於て參拜了す。一面小嘍囉を使て大寨裏に去いて筵席を擺下し、一面人を叫て王倫の屍首を擡過了し、一面又人を着て山前山後に去いて

【一】 強兵は強賓なり、音近きままの通用なり、古諺にして強き賓も主人を壓するといふことは無しとなり。
【二】 ここに至る。

衆多の小頭目を喚びて都て大寨裏に來りて聚義せしむ。林冲等一行人、晁蓋を請うて驕馬上に上りし、都て大寨裏に投じ來り、聚義廳前に到待て、馬を下り、都て廳に來る。衆人晁天王を扶けて正中の第一位の交椅上に去て坐定せしめ、中間一爐の香を焚起し來り、林冲向前して道ふ、小可林冲は只是箇の蠹齒の匹夫、只些の鎗棒を會するのみ、學無く才無く智無く術無し、今日山寨天幸にして衆豪傑の相聚まるを得、大義既に明らかに、往日の 苟且に比すべきに非ず、學究先生此に在り、便ち請うて軍師と做し、兵權を執り掌り、將校を調用したまへ、須らく第二位に坐すべし。吳用答道ふ、吳某は村中の學究、胸次又經綸濟世の才無し、只些の孫吳の兵法を讀むと雖も、未だ曾て半粒の微功有らず、怎で敢て上を占めん。林冲道ふ、事已に到頭、必ずしも謙讓せざれ。吳用只得

【三】 苟且ばかりそめ、事に散漫なること。

たり第二位に坐するを。林冲道ふ、公孫先生請ふ第三位に坐せよ。晁蓋道ふ、却て使ひ得ず、若是這等推讓の時、晁蓋必ず位を退く須し。林冲道ふ、晁兄差へり、公孫先生、名江湖に聞え、善く能く兵を用ひ、鬼神不測之機、呼風喚雨の法有り、誰か能く及び得ん。公孫勝道ふ、些小の法有りと雖も、亦濟世の才無し、如何ぞ便ち敢て上を占めん、還つて是頭領請ふ坐せよ。林冲道ふ、只今番敵に克ち勝を制す、便ち見得たり先生の妙法を、正に是鼎三足を分つ、一を缺けば不可なり、先生必ずしも推却せざれ。公孫勝只得第三位に坐了す。林冲再び讓らんと要る時、晁蓋吳用公孫勝、都て肯せず、三人俱に道ふ、適頭領に鼎足三分を説かるるを蒙る、此を以て敢て命に違はず、

我三人上を占む、頭領再び人に讓らんと要る時は、晁蓋等只得たり告退するを。三人林冲を扶住し、只第四位に坐するを得しむ。晁蓋道ふ、今番須らく宋、杜二頭領を請ひ來り坐せしむべし。那の杜遷宋萬、王倫を殺了するを見、尋思し道ふ、自身の本事低微、如何ぞ他門に近づきのん、若かず箇の人情を做さんと。苦苦地に請うて劉唐を第五位に坐了し、阮小二を第六位に、阮小五を第七位に、阮小七を第八位に坐せしむ、杜遷第九位に坐了し、宋萬第十位に坐了し、朱貴第十一位に坐了す。梁山泊此より是十一位的好漢坐定し、山前山後、共に七八百人有り、都て廳前に來りて參拜了了し、分立して兩下に在り。晁蓋道ふ、你等衆人此に在り、今日林教頭我を扶けて山寨の主と做し、吳學究軍師と做り、公孫先生同に兵權を掌り、林教頭等共に山寨を管す、汝等衆人、各舊職に依り、山前山後の事務を管領し、寨柵灘頭を守備し、失有らし

【四】 しきりに。 【五】 舊新。

むる休れ、各人務めて力を竭し心を同じうし共に大義に聚まるを要す。再び兩邊の房屋を收拾せしめ、阮家の老小を安頓了了し、便ち生辰綱を打劫して得たる的金珠寶貝、并に自家莊上に過活せる的金銀財帛を取出し、當廳に就て衆小頭目并に衆多の小嘍囉に賞賜し、當下牛を推し馬を牽し、天地神明を祭祀し、重新聚義の衆頭領を慶賀し、酒を飲みて半夜に至り方に散す。次日又筵宴を辦じ慶會し、一連に數日の筵席を喫了し、晁蓋と吳用等衆頭領と計議し、倉廩を整點し、寨柵を修理し、軍器鎗刀弓箭衣甲頭盔を打造し、官軍を迎敵するを準備し、大小船隻を安排し、人兵水手に船に

上り斬殺するを教演し、好く隄備を做さしむ。話下に在らず。此より梁山泊十一位の頭領義に聚まり、眞に乃ち交情渾べて股肱に似て、義氣骨肉に同じき如し。詩有り證と爲す。古人の交誼黄金を斷つ、心若同じき時誼も亦深し。水滸請ふ看よ忠義の士、死生能く守る歳寒の

心

此に因り林冲晁蓋の事を作す寛洪にして、義に仗り財を疎んじ、各家の老小を安頓して山に在るを見、驀然として思念す、妻子京師に在り、存亡未だ保せずと、遂に心腹を將て備細に晁蓋に訴與して道ふ、小人山に上るよりの後、妻子を搬取して山に上り來らしめんことを

欲要、王倫の心術定まらず、以て過活し難きを見るに因りて、一向蹉跎として過了し、東京を流落してより死活を知らず。晁蓋道ふ、賢弟既に寶眷の

【六】 當寫下了、恐らくは當下寫下の誤ならん、寫下了は不可無ければ或は、寫上に下字を脱する歟。

【七】 死して半年。

京に在る有らば、如何ぞ去いて取來り完聚せざる、你快く書を寫し、便ち人をして山を下り去り、星夜に山に取上せ來らしめば多少是好からん。林冲 當に一封書を寫下し了し、兩箇の自身邊の心腹の小喽囉をして山を下り去了せしむ、兩箇月に過ぎずして小喽囉寨に還り說道ふ、直に東京城内殿帥府前に至り、張教頭の家尋到り、説ふを聞けば、娘子は高太尉に親事を威逼され、自ら縊れて身死す、已に故して半載なり、張教頭も亦憂疑の爲に半月の前、患に染みて身故す、止女使錦兒を剩し得たり、已に丈夫を招贅して家に在り過活すと、隣里を訪問するも、亦是此の

如く説く、打聽し得て眞實なり、回り來つて頭領に報與す。林冲説ふを見て、潸然涙下る。此より心中の掛念を杜絶す。晁蓋説ふを見て悵然嗟歎す。山寨中此より話無し、毎日只是人兵を操練し、官軍に抵敵するを準備す。忽ち一日衆頭領正に聚義廳上に在りて事務を商議す、只見る小喽囉山に上り來りて說道ふ、濟州府軍官を差撥し、帶領する約を二千の人馬有り、大小船四五百隻に乗駕し、現に石碣村湖蕩裏に在りて屯住す、特に來りて報知すと。晁蓋大に驚き、便ち軍師吳用を請ひて商議して道ふ、官軍將に至らんとす、如何して迎敵せん。吳用笑ひ道ふ、兄長の掛心を須ひず、吳某自ら措置有り、古より道ふ、水來れば土掩ひ、兵到れば將迎ふと、隨卽阮氏三雄を喚び、耳に附いて低言して道ふ、此の如く此の如くせよと。又林冲劉唐を喚びて計を受けしめて道ふ、你兩個便ち這般にし這般にせよ、再び杜遷、宋萬を叫び、也分付し了す。正に是、

西迎ふ項羽三千の陣、今日先づ施す第一の功。

且説く、濟州府尹、團練使黃安并に本府の捕盜官一員を點差し、一千餘人を帶領し、本處の船隻を拘集し、石碣村の湖蕩に就いて調撥し、船隻を分開して兩路と作し、來つて泊子を取らんとす。且説く、團練使黃安、人馬を帶領し、船に上り、旗を搖かし納喊し、金沙灘に殺奔し來る、看看漸く灘頭に近く、只聽得たり水面上鳴嗚咽咽吹將起し來る。黃安道ふ、這は是畫角の聲ならずや。且船を把り來つて分つて兩路と作し、那の蘆花蕩中の灣に去いて住して看る時、只見る水面上遠遠地に三隻の

船來る。那の船を看る時、每隻船上に只五箇人有り、四箇人雙櫓を搖着し、船頭上に一箇人を立着す、頭には絳紅巾を帯び、都て一様に身には紅羅の繡襖を穿ち、手裏には各留客住を拿着す、三隻の船上の人都て一般の打扮なり、内に於て人の認得るものあり、便ち黄安に對して說道ふ、這三隻の船上三箇人、一箇は是阮小二、一箇は是阮小五、一箇は是阮小七なり。黄安道ふ、你衆人我が與に一齊に併力して向前し、這の三箇人を拿れと。兩邊に四五十隻の船有り、一齊に喊を發着し、殺透し前み去る。那の三隻の船唸哨了する一聲、一齊に便ち回る。黄團練手内の鎗を把つて撻搭し動かし、向前し來り叫び道ふ、只顧這賊を殺せ、我自から重賞有らん。那の三隻の船、前面に走る、背後の官軍、船上に箭を把つて射將し去る。那の三隻の船裏去り、各と一片の青狐皮を拿起し來りて、那の箭矢を遮る。後面の船隻只顧趕ひ、趕うて二三里の水港を過ぎず、黄安背後の一隻の小船、飛ぶも也似て划來り報じ道ふ、且趕ふを要せず、我々の那の一條に殺入し去る。的の船隻は都て他に水裏に殺下し去られ、船を把つて都て奪ひ去られたると。黄安問道ふ、(一〇)怎的して、那厮の手に着しせりや。小船上の人答へ道ふ、我々正に船を行る時、只見る遠遠地に兩隻の船來る、每船上各五箇の人有り、我々力を併せて殺去し他へ趕ふ、趕ふこと三四里の水面を過ぎず、四下裏の小港より七八隻の小船を鑽出し來る、船上の弩箭、飛蝗の似く一般に射將し來る、我々急に船を把つて回す時、窄狹の港

【八】 留客住、前に出づ。

【九】 いでたち。

【一〇】 どうしてあいつの手にかかりしや。

口に來到す、只見る岸上に約を二三十人あり、兩頭より一條の大筏索を牽き、横截して水面上に在り、却て向前せんと待て、索を看る時、又他の岸上より灰瓶石子を雨點の如く一般に打將し來る。衆官軍只得船隻を棄了し、水に下り命を逃る、我々人逃得て出來り、早路邊に到り看る時、那の岸上の人馬皆見えす、馬也他に牽去られたりし、馬を看るの軍人は都て殺死されて水裏に在り、我々は蘆花蕩邊に這隻の小船兒を得、逕ちに來りて團練に報與す。黄安説ふことを聽得て、叫苦し迭ばす、便ち白旗を把りて招動し、衆船をして去つて趕ふを要せず、且一發に回來せしむ。那の衆船纜に撥し得て頭を轉じ、未だ曾て行動せざるに、只見る背後の那の三隻船、又十數隻の船を引着し、都て只是這の三五箇の人、紅旗を把つて搖着し、口裏に胡哨を吹着し、飛ぶも也似て趕ひ來る。黄安却て待に船を把つて擺開して敵を迎へんとする時、只聽得たり蘆葦叢中砲響くを。黄安看る時、四下裏都て是紅旗擺び滿ち、手脚を慌了す。後面趕來る的の船上に叫道ふ、黄安首級を留下して回去れ。黄安船を把つて力を儘し蘆葦岸邊を搖過せしむ、却て兩邊の小港裏より四五十隻の小船を鑽出し來る、船上弩箭雨點の如く射將し來る。黄安、箭林裏より路を奪ふ時、只三四隻の小船を剩し得了る。黄安便ち快船内に跳過し、頭を回して看る時、只見る後面的の人、一箇都て撲樋的に水裏に跳下し去る。船と和に拖去らるる有的有り、大半都て殺死さる。黄安小快船に駕着し、正に走るの間、只

【一】 竹をたたきて太き繩に編ひたる索。

【二】 箭の亂射の中より。

【三】 ほとんと水に飛込む。

見る蘆花蕩邊一隻の船上劉唐を立着す、(一四) 一撓鉤に黃安的の船を搭住し、(一五) 托地に跳將過し來り、只一把に腰を擱へて提住し、喝し道ふ、(一六) 掙扎を要せずと。別的の軍人能く水を識る者は水裏に箭に射死され、敢て水に下らざる的は船裏に就て都て活捉せられたる。黃安劉唐に扯いて岸邊に到られ岸に上らず。遠遠地に晁蓋公孫勝、山邊に馬に騎着し、刀を挺着し、五六十人三二十四の馬を引き、齊しく來りて一行人を接應し、生擒活捉し得る一二百人、船隻を奪ひ得て、數を盡して都て收めて山南水寨裏に在りて安頓し了る、大小頭領、一齊に都て山寨に到る。晁蓋馬を下り、來つて聚義廳上に到り坐定す、衆頭領各戎裝軍器を去了し、團圍として坐下す。那の黃安を捉つて縛めて將軍柱上に在り。金銀段疋を取過して、小喽囉を賞し、點檢するに共に六百餘匹の好馬を奪得たり、這は林冲的の功勞、東港は是杜遷、宋萬的の功勞、西港は是阮氏三雄的の功勞、黃安を捉へ得たるは是劉唐的の功勞、衆頭領大に喜び、牛を殺し馬を宰し、山寨裏に筵會す。自ら醞する的好酒、水泊裏より出づる的新鮮の蓮藕并に鮮魚、山南の樹上に自ら時新的の桃杏梅李枇杷山棗柿栗の類有り、自ら養ふ的の雞猪鵝鴨等の品物、必ずしも細説せず、衆頭領只顧慶賞す、新に山寨に到りて全勝を獲るを得、小可に同じきに非ず。詩有り證と爲す。

笑ふに堪へたり王倫妄に自ら矜る、庸才大任豈能く勝へんや。一たび火併して新主に歸してより、

【一四】 棒のさきこ、齧形の鐵を付し、船其他を曳きよするやうに造りたるもの。かき棒。
【一五】 つと。
【一六】 じたばたするな。

會 見る梁山の事業新なるを。

正に酒を飲む間、只見る小喽囉報じ道ふ、山下の朱頭領、人をして寨に到らしむと。晁蓋喚來らしめ、甚事有りやと問ふ。小喽囉道ふ、朱頭領探聽し得たり、(一七) 一起の客商、數十人あり、一處に結聯し、今晚必ず早路より經過す、特に來つて報知す。晁蓋道ふ、正に金帛の使用すべき没し、誰か人を領し去つて走一遭せん。三阮道ふ、我が弟兄們去かん。晁蓋道ふ、好兄弟、小心在意し、速に去き早く來れ。三阮便ち廳を下り去り、衣裳を換了し、腰刀を跨了、朴刀、樵叉、留客住を拿了、一百餘人を點起し、廳に上り來り、頭領に別れ、便ち山を下り、金沙灘より船を把つて載過、朱貴酒店裏に去了す。晁蓋三阮の擔負し下さざるを恐れ、又劉唐をして一百餘人を點起せしめ、領了して山を下り去つて接應せしむ。又分付して道ふ、只善く金帛財物を取る可し、切に客商の性命を傷害すべからず。劉唐去了す。晁蓋三更に到りて回報を見ず。又杜遷、宋萬をして五十餘人を引いて山を下り接應せしむ。晁蓋と吳用公孫勝林冲と酒を飲んで天明に至る、只見る小喽囉喜を報じ道ふ、三阮頭領二十餘輛の車子の金銀財物、并に四五十匹の驢騾頭口を得了すと。晁蓋又問道ふ、曾て人を殺さずや。小喽囉答へ道ふ、那の許多の客人、我們的來り得て、頭勢の猛なるを見了り、都て車子、頭口、行李を撤下して、逃命し去了す、竝に曾て他の一箇を傷害せずと。晁蓋說ふを見て大に喜ぶ、我等初めて山寨に到る、人を傷害すべからずと。一錠の白銀を取

【一七】 ひとむれ。

り、小嘍囉を賞了し、酒果を將了し、山を下り來り、直に金沙灘上に接到せしむ。衆頭領の盡く車輻を把つて岸に扛上し來るを見、再び船を撐し去つて頭口馬匹を載せしむ。衆頭領大に喜び、蓋を把り已に畢り、人をして去いて朱貴を請ひて山に上り來らしめて筵宴す。晁蓋等衆頭領都て上つて山寨聚義廳上に到り、(二八) 篋箕掌、栲栳圈に坐定す。小嘍囉をして許多の財物を扛擡過して廳上に在かしめ、二包包打開し、綵帛衣服を將て堆みて一邊に在き、行貨等の物は堆みて一邊に在き、金銀寶貝は堆みて正面に在く。衆頭領許多の財物を打劫し得たるを看了して、心中歡喜し、便ち掌庫的小頭目をして毎様に一半を取りて收貯して庫に在き、支用を聽候せしめ、這の一半を分つて兩分と做し、廳上十一位の頭領、一分を均分し、山上山下の衆人均しく一分を分ち、這の新に拿到するの軍健を把つて臉上(二九) 字號を刺了し、(三〇) 壯浪的を選びて分撥して各寨に去いて馬を喂ひ柴を砍らしめ、軟弱的を各處に車を看、草を切らしむ。黃安は鎖されて後寨監房内に在り。晁蓋道ふ、我等今日初めて山寨に到り、當初は只災を逃れ難を避けて投托し、王倫帳下に一小頭目と爲ることを指望す、多く感ず林教頭賢弟我を推讓して尊と爲す、想はざりき連りに兩場の喜事を得了す、第一は官軍に贏得、許多の人馬船隻を收得し得て、黃安を捉了し、二には乃ち又若干の財物金銀を得了る、此是皆衆弟兄の才能に托るにあらすや。衆頭領道ふ、皆大哥哥的の福蔭に托得て、此を以て (三一) 采を得たり。晁蓋再吳用と道ふ、俺們弟兄七人の性命皆宋押司、朱都頭兩箇に出づ、古人道 (二八) 箕の形、ざるの形に坐る。邦語に車座にならぶと云

ふ、恩を知つて報せざるは人たるに非る也、今日富貴安樂、何よりして來る、早晚些の金銀を將て人をして親ら鄆城縣に到り走一遭せしむべし、此は是第一件の要緊の事務なり、再白勝の陥つて濟州大牢裏に在る有り、我門必ず去いて他を救ひ出し來らんと要須し。吳用道ふ、兄長必ずしも憂心せざれ、小生自ら 副劃有り。宋押司は是箇の仁義の人、(三二) 緊地に我門の酬謝を望まず、然も此の如しと雖も、禮は缺く可からず、早晩山寨の慶安きを待ちて、必ず一箇の兄弟を用つて自ら去らしめん、白勝の事、(三三) 生人を慕し去らしめて、那裏に錢を使ひ、上を買ひ下に囑み、他を (三四) 鬆寬にせん、便ち好く身を脱せん、我等且糧を屯へ船を造り、軍器を製辦し、寨柵城垣を安排し、房屋を添造し、衣袍鎧甲を整頓し、刀鎗弓箭を打造し、官軍を迎敵するを防備するを商量すべし。晁蓋道ふ、既に然く此の如きは全く軍師の妙策指教に仗る。吳用當下に衆頭領を調撥し、分派し去りて辨せしむ。話下に在らず。且梁山泊晁蓋山に上りてより好生興旺なるを説かず。却て説く、濟州府の太守、黃安の手下の逃回るの軍人の備に梁山泊の官軍を殺死し黃安を生擒するの一事を説くを見、又梁山泊の好漢の十分英雄了得して、人の他に近傍し得る無く、以て收捕し難く、抑且水路認め難く、港汊多雜にして、此を以て勝を取る能はず

- 【一九】 所屬の隊の文字じるし。
- 【二〇】 年わかく強きもの。
- 【二一】 勝目を得たり、好運を得たり。
- 【二二】 副字音義知る可らず、恐らくは誤なり。金本據に作る。擲畫はばかりごと、手段。
- 【二三】 けつして。たしかに。
- 【二四】 生人は彼方の知らぬ人、慕はつき進みゆく。
- 【二五】 ゆるやか。

と説ふ。府尹聽了り、只苦を叫得たり。太師府幹辦に向つて説道ふ、何濤先に許多の人馬を折了し、獨自一箇性命を逃れ得て回來り、已に兩箇の耳朶を割了せられ、自ら家に回りにて將息し、今に至るも痊ゆる能はず、去るの五百人は一箇の回り來る無し。此に因りて又團練使黃安并びに本府の捕盜官を差し、軍兵を帶領して前去追捉せしむるも亦皆失陷し、黃安已に活捉山に上され、官軍を殺死する其數を知らず、又勝を取る能はず、怎生にして是好からん。太守肚裏正に鬼胎を懷着して、箇の道理する處没し。只見る 承局來り報じて説ふ、東門の接官亭上に新官有りて到來す、飛報此に到ると。太守慌忙し馬に上り、東門外の接官亭上に來到す。望み見れば塵土起る處、新官已に亭子前に到りて馬を下る。府尹接して亭子に上り、相見已る、那の新官中書省の更替文書を取出し來り、府尹に度與す。太守看罷り、隨即新官と和に州衙裏に到り、牌印、一應の府庫錢糧等の項を交割し、筵席を安排し、新官を管待す。舊太守備に梁山泊の賊盜浩大にして官軍を殺死するの一節を説く。説罷れば新官面土の色の如く、心中思付して道ふ、蔡太師這件の 勾當を將て我を擡擧す、却て是 此等の地面、這般の府分、又強兵猛將没し、如何ぞ這の夥の強人を收捕し得ん、倘或は這厮們城裏に來りて糧を借らんとする時、却て怎生奈何 舊官太守、次日夜裝行李を收拾了

- 【二六】 養生。
- 【二七】 承局、前に見ゆ、小役人、同朋の如し。
- 【二八】 官牌官印を引わたす。
- 【二九】 つとめ、こと。
- 【三〇】 かかるところ、かかる府。

じ、自ら東京に回りにて罪を聽く。話下にあらす。且説く、新官宗府尹到任の後、一員の新しい調來して濟州を鎮守するの軍官を請將し來り、當下商議して軍を招き馬を買ひ草を集め糧を屯し、悍勇の民夫、智謀の賢士を招募し、梁山泊の好漢を收捕するを準備し、一面は中書省に申呈し、行牌を轉じ、附近の州郡に力を併せて剿捕するを仰ぎ、一面は自ら文書を所屬州縣に行下し、收剿を知會せしめ、及び屬縣に仰せて令をして本境を守禦せしむ。這箇は都て話下に在らず。且説く本州の孔目、人を差し、一紙の公文を齎らし、所屬の鄆城縣に行下し、本境を守禦し、梁山泊の賊人を防備せしむ。鄆城縣の知縣、公文を看了し、宋江をして 案を疊成し、各鄉村に行下し、一體に守備せしむ。宋江公文を見了り、心内に尋思して道ふ、晁蓋等衆人、想はざりき這般の大事を做下し、大罪を犯すし、生辰綱を劫了し、公を做す的を殺了し、何觀察を傷了し、又許多の官軍人馬を損害了し、又黃安を把つて活捉して山に上す、此の如きの罪、是九族を滅するの勾當なり、是人に逼迫せられて事已むを得るに非ずと雖も、法度上に於て却て饒し得ず、倘疎失有らば之を如何。自家一箇心中納悶し、貼書後司張文遠に分付し、此文書を將て立どころに文案を成し、各郷 各保に行下せしめ、自ら文卷を理會す。宋江却て歩に信せて縣を走出し來る。走る三二十歩に過ぎず、只聽得たり背後に人有りて、(一)聲押司と叫ぶ。宋江頭を轉

- 【三一】 原本牌は牌の誤、中書省より命令の牌を附近諸州に回付し。
- 【三二】 人民に布告する文をつくり。
- 【三三】 かき役屬僚。
- 【三四】 保は郷より一段小まし。

回し來りて看る時、却て是媒を做す的王婆、一箇の婆子を引着し、却て他の與に說道ふ、你縁有りて好事を做す的、押司來るなり。宋江身を轉じ來りて問ひ道ふ、甚麼の話說有りや。王婆 攔住し、閻婆を指着して宋江に對し說道ふ、押司知らずや、這の一家兒東京より來る、是這裏の人家ならず、嫡親三口兒、夫主の閻公、箇の女兒婆惜有り、他那の閻公は 平昔是箇の好く唱ふ的人、小より他の那の女兒婆惜を教へ得て也諸般の 要令を唱ふを會す、年方に十八歳、頗る 些の顔色有り、三口兒山東に來り、一箇の官人に 投進して着せず、流落して此の郟城縣に在り、想はず 這裏の人の風流宴樂を喜ばず、此に因りて過活する能はず、這縣後の一箇僻淨の巷内に在りて權に住す。昨日他的の 家公時疫を害するに因りて死す、這閻婆 錢の津送する無く、道理を做す處没し、 老身を央及びみて媒を做さしむ、我道ふ這般の時節、那裏に這等 恰好なる有らん、又借換する處没し、正に這裏に在りて、 走頭に路没きの、只見る押司這裏打從過ぐ、此を以て老身這の閻婆が與に起來る、望むらくは押司他を憐見し 則箇べし、一具の 棺材を作成したまはんことを。宗江道ふ、原來恁地ならば你

- 【三】 ひきとどめ。
- 【三】 一家三人。
- 【三】 ふだんから。
- 【三】 要は戲なり、令は歌なり。我邦の端歌といはんが如し。
- 【三】 容貌もまんざらで無し。
- 【四〇】 一箇の官人の許に行かんとして事顛顛し。
- 【四二】 ここの人。
- 【四二】 主人即閻老、時疫をわづらひ。
- 【四三】 葬送する錢無し。
- 【四四】 わたくしをたのみ。
- 【四五】 丁度よき話は無し。
- 【四六】 あるくに路なく、行詰まり、困苦すること。
- 【四七】 則箇、數々前に出づ、何何して下されといふが如し。
- 【四八】 葬式の棺桶をお出し下さ

兩箇我に跟き來れ、巷口の酒店裏に去き、筆硯を借り、箇の 帖子を寫し你に與へん、縣東の陳三郎が家に去きて(一)具の棺材を取れ。宋江又問道ふ、你 結果の使用有りや。閻婆答へ道ふ、實に押司を 瞞せずして説はん、棺材尙無し、那を使用を討ねん。宋江道ふ、我再び你に銀子十兩を與へて使用錢と做さしめん。閻婆道ふ、便ち是 重生的の父母、再長的の爺娘、驢と作り馬と作りて押司に報答せん。宋江道ふ、此の如く説ふを要する休れ。隨即一錠の銀子を取り出し、閻婆に遞與し、自ら 下處に回りに去す。且説く、這の婆子、帖子を將了し、逕に縣東街の陳三郎の家に來りて一具の棺材を取了し、家に回りに發送了當す、兀自五六兩の銀子を餘剩下、娘兒兩個把來つて 盤纏とす。話下に在らず。忽ち一朝那の閻婆來つて宋江に謝するに因つて、他の下處に一箇の婦人家の面有る没きを見て、回りに來りて 間壁の王婆に問ひ道ふ、宋押司の下處、一箇の婦人の面を見ず、他曾て 娘子有りや無きや。王婆道ふ、只聞く宋押司の家裏は宋家村に在りて住すと、曾て他に娘子有りと説ふを見ず、這の縣裏に在りて押司と做る、只是 客居、常常他の棺材藥餌を散施し、極めて肯て人の貧苦を濟ふを見る、 敢て怕る是未だ娘子有らざるならん。閻婆道ふ、我が

- れと也。
- 【四九】 手紙。
- 【五〇】 取片付の費用。
- 【五一】 實を申せば棺さへ買へず費用などもさらに無し。
- 【五二】 再生の父母同様、ありがたいことと感謝する語なり。
- 【五三】 下處、下宿也。
- 【五四】 盤纏、使用金。
- 【五五】 となりの王婆。
- 【五六】 おくさま。
- 【五七】 かりすまぬ也。
- 【五八】 敢て、おほかた。

この女兒長じ得て好模様なり、又曲兒を唱ふを會し、諸般の【五九】要笑を省得、小兒より東京に在る時、只【六〇】行院人家に去いて申す、那の一箇の行院か他を愛せざらん、幾箇の【六一】上行首あり、我に問うて過房せんとする幾次、我肯せず、只我が兩口兒、人の老を養ふ無きに因つて、此に因つて過房して他に與へず、想はざりき今來倒つて他を苦了す、我前日去いて宋押司に謝す、他の下處娘子没きを

見る、此に因つて你を央む、我が與に宋押司に對して説け、他若人を討むるを要する時、我情願して婆惜を把つて他に與へん、我前日你的【六二】作成を得て、宋押司の救済に虧了、他に報答す可き無し、他に與へて箇の親眷と做し來往せん。王婆這話を聽了り、次日來りて宋江に見え、備細に這件の事を説了す、宋江初時肯せず、

怎ぞ這の婆子の【六三】山を撮合するの嘴の擲撥するに當らんや、宋江依允了り、就ち縣西巷内に在て一所の樓房を討め了り、些の【六四】家火什物を置辦し、閻婆惜娘兒兩箇を安頓了りして那裏に在て居住せしむ。半月の間没くして、閻婆惜を打扮し得て、満頭の珠翠、遍體の綾羅。正に是、【六五】花容 煥娜、玉質娉婷。髻は一片の烏雲を横たへ、眉は半彎の新月を掃ふ。【六六】金蓮窄窄として、

【五九】 なぐさみ、藝ごと。
【六〇】 行院は遊女屋、藝者屋の類。串前に出づ、いりこむ。
【六一】 行院の主、いたがしら。
【六二】 養女にせんとする。
【六三】 とりなし。
【六四】 撮合山三字にて、男女をとりもつことをいふ熟語なり。山をくつつけてしまふほりの竹の子の如き故いふ。
【六五】 所帯道具をととのへ。
【六六】 たなやか、しなやか。
【六七】 足ほそく、支那は足の細を尊ぶ。蓮花をふみし故事。指のほそくきれいなる。

湘裙より微しく露はる、情に勝へず。玉笋織織、翠袖半ば籠む無限の意。星眼渾て漆を點せる如く、酥胸眞に肪を截れるに似たり。【六八】金屋の美人、御苑を離れ、藥珠の仙子、塵寰に下る。宋江又幾日を過ぐ、婆子を連ねて也若干の頭面衣服有り、端的に婆惜を養ひ得て衣豊に食足る。初時宋江夜夜婆惜と一處に歌臥す、向後漸漸に來り得て慢る。却て是何の爲ぞ、原來宋江は是箇の好漢、只鎗棒を使ふを學ぶを愛し、女色上に於て十分要緊とせず。この閻婆惜水も也似たる【七〇】後生、況んや兼十八九歳、正に妙齡の際に在り、此に因り宋江那の【七一】婆娘の意に中らず、一日宋江【七二】不合に後司貼書張文遠を帯びて閻婆惜の家【七三】に來りて酒を喫す。この張文遠は却て是宋江的【七四】の同房の押司、那厮小張三と喚做す、生れ得て眉清く目秀で、齒白く唇紅く、平昔只【七五】三瓦兩舎に去るを愛し、飄蓬浮蕩、學び得て一身風流俊俏なり、更に兼竹を品し絲を調するも會せざる無し。この婆惜は是箇の酒色の娼妓、張三を一見して心裏便ち喜び、倒つて意有りて他を【七六】看上す。那の張三這の婆惜の意有るを見て目を以て情を送り、宋江の起身して淨手するを等ち、倒つて言語を把り來つて張三を【七七】嘲惹す。【七八】常言に道ふ、風來らすんば樹動かす、船揺かすんば水渾らすと。那の張三も亦是酒色の徒なり、這事如何ぞ曉り得ざら

【六八】 宮中の美人宮外に出來り、天上の仙女俗界に下れる如し。
【六九】 婆子まで髪道具衣服ができたり。
【七〇】 わかももの。
【七一】 婆娘は婆惜也。
【七二】 不合、前に出づ。
【七三】 あそびどころ。
【七四】 眼をつける。
【七五】 張三をからかひよせる。
【七六】 此數句金本に無し。

ん、この婆娘の眉来り眼去りて十分情有るを見るに因りて記して心裏に在り、向後宋江在らざる時、この張三便ち那裏に去き、假意見に只來りて宋江を尋ぬるを做す。那の婆娘留住して茶を喫せしめ、言來り語去つて、此事を成了す。誰か想はん那の婆娘那の張三和兩箇搭識し上了してより、打し得て火塊一般に熱す、亦且この張三、又是箇の此事を弄するに慣れたる、豈聞かずや古人言ふ有り、一將のずんば二帯びすと、只宋江の

【七】うはべ。

【八】密通したる也。

【九】豈聞かずや以下數句金本に無し。

【一〇】口があければ後もつづかず。

【一一】千萬そんな事をなさずば宜しきに。

【一二】張三を意中の人となす。

【一三】風流は茶で語るによく、酒は色の媒、張三を連れ來り

て酒席を共にしたるより悪い事になりたりと也。

【一四】張三と通じてより少しも宋江を心におかず。

【一五】言語を以て突かかり、全くかまひつけず。

【一六】半月か十日に一度來る位。

【一七】始終來る。

【一八】評判が宋江の耳にも入りたり。

無し、宋江但若來る時は、只言語を把つて他を傷つけ、全く他の些箇を撈攬せず。この宋江は箇の好漢、女色を以て念と爲さず、此に因りて半月十日に去き走得て一遭するのみ。那の張三とこの婆娘と膠の如く漆の如く、夜に去り明に來る、街坊上の人も也都て知了す、却て些の風聲有りて吹いて宋江耳朶裏に在り。宋江半信不信

にして、自ら肚裏に尋思し道ふ、又是我が父母の匹配せる的の妻室にあらず、他若我を戀ふに心無くんば、我來由没く氣を惹いて甚麼を做さん、我只門に上らずば便了せんと。此より幾箇月有りて去かず。閻婆累りに人をして來り請はしむ、宋江只事故に推して門に上り去らず。正に是、花娘意有り流水に隨ふ、義士心無し落花を戀ふに。婆は錢財を愛し娘は、俏を愛す、一般の行貨

兩家の茶。

【一九】いばれなく腹立つも愚なることなり。行きさへせれば宜からん。

【二〇】事故にかこつけて。

【二一】俏はいきな男なり。行貨は品物、雜貨と云はんが如し。

【二二】むかふの茶房。

【二三】范陽笠兒、前に出づ。

【二四】うはぎ。

【二五】股引脚絆、八ツ目のわらぢ。

【二六】汗みどろに、いきせはしく。臉をよこにして。

【二七】うさんなり。

【二八】知つたやうな。

鞋、腰裏には一口の腰刀を跨着し、一箇の大包を背着し、走り得て汗雨通流し、氣急喘促し、臉を把つて別轉着して那の縣裏を見る。宋江這箇の大漢を見了るに走り得て蹣跚あり。慌忙身を起して茶房を趕出し來り、那漢に跟着して走る。約そ三二十歩を走了す、那漢頭を回過し來り宋江を看了し、却て認得せず。宋江這人を見了り、畧些の面熟有り、是那裏にか曾て厮會し來るにあらずる莫きや、心中一時思量し起さず。那漢宋江を見、看了する一回、也些の認得する有り、脚を立住し

了し、睛を定めて那の宋江を看、又敢て問はず。宋江尋思し道ふ、這箇の人、好だ作怪なり、却て怎地か只願我を看ると。宋江も亦敢て他に問はず。只見那漢路邊の一箇の篋頭店舖裏に去いて問道ふ、大哥前面の那箇の押司は是誰ぞ。篋頭待詔應へ道ふ、(101)這位は宋押司なり。那漢朴刀を提着し、走いて面前に到り、箇の大喙を唱へて說道す、押司、小弟を認め得る麼。宋江道ふ、足下(102)些の面善有り。那漢道ふ、一步を借るべし說話せん。宋江便ち那漢と一條の僻淨の小巷に入る。那漢道ふ、這箇の酒店裏、說話に好からんと。兩箇上つて酒樓に到り、箇の僻淨閣兒裏を揀んで坐下す。那漢朴刀を倚せ、包裹を解下し、撇して卓子底下に在き、那漢(103)撲と身を翻して便ち拜す。宋江慌忙答禮して道ふ、敢てせず拜問せん足下の高姓を。那人道ふ、大恩人如何ぞ小弟を忘れ了る。宋江道ふ、兄长是誰ぞ、眞箇に些の面熟有り、小人失忘し了る。那漢道ふ、小弟は便是晁保正莊上に曾て尊顔を拜識し、恩を蒙りて性命を救はれし時の赤髮鬼劉唐便ち是なり。宋江聽了りて大に驚き說道ふ、賢弟、你好大膽、早是做公的看見する没きも、險些兒事を惹出し來らん。劉唐道ふ、大恩を感承し、死を懼怕せず、特地に來りて酬謝す。宋江道ふ、晁保正弟兄們近日如何、兄弟、誰か你をして來らしむる。劉唐道ふ、晁頭領哥哥再三大恩人を拜上す、性命を救はるるを

【九九】 あやしい。
 【一〇〇】 かみゆひどころ。
 【一〇一】 あのかたは。
 【一〇二】 御面を存じ居るやうでは

【一〇三】 さみしき小巷。
 【一〇四】 はつと。
 【一〇五】 御面を存じ居るやうでは

蒙るを得、見今梁山泊の主(105)都頭領と做了し、吳學究軍師と做了し、公孫勝同じく兵權を掌り、林冲一力維持し、王倫を火併し了し、山寨裏原杜遷、宋萬、朱貴有り、俺が弟兄七箇と、共に是十一箇の頭領、見今山寨裏七八百人を聚集し得、糧食其數を計らず、只想弟兄長の感恩報答す可き無し、特に劉唐を使て一封の書并に黄金一百兩を齎らし、押司并に朱雷二都頭に相謝せしむ。劉唐便ち包裹を打開し、書を取り出し來りて宋江に遞與す。宋江看罷り、便ち(106)褶子の前襟を拽起し、招文袋を摸出し、(107)包兒を打開する時、劉唐金子を取り出し、卓上に放在す。宋江那の封書を把つて就ち(108)一條の金子を取了し、這書と和に包了して招文袋内に挿在し、衣襟に放下し、便ち道ふ、賢弟此の金子を將つて舊に依り包了せよ。隨即便ち量酒的を喚びて酒を打し來らしめ、大塊に一盤の肉を切らしめ、些の菜蔬菓子の類を鋪下し、量酒人をして酒を篩いで劉唐に與へ喫せしむ。看看天色晚了る、劉唐酒を喫了し、卓上の金子包を把り打開して取出し來らんと要す。宋江慌忙攔住して道ふ、賢弟你我が説ふを聽け、你們七箇弟兄初めて山寨に到り、正に金銀の使用を要せん、宋江家中頗る些の(109)過活有り、且つ你的山寨裏に放在し、宋江の(110)盤纏を缺少する時を等つて却て兄弟宋清をして來り取らしめん、今日は宋江見外するに非

【一〇五】 總頭領。
 【一〇六】 褶子は疊み重ねたる者の義、衣の前襟かくの如き故かく云へるなり。招文袋は紙入袋の如きもの、書類など入るる袋。

【一〇七】 包兒は締くくり口。
 【一〇八】 多きうちに一條金だけ取りし也。
 【一〇九】 すぎはひ、生活費。
 【一一〇】 費用の足らぬ時。

す、内に於て已に一條を受了せり、朱全那人、也些の家私有り、他に與ふるを用ひず、我自ら他與人情を説知すれば便了す、(二二)雷横這人又我が保正に報與せるを知らず、況んや兼這人賭を貪る、倘或は些を將て出し去りて賭する時、他便ち事を惹出し來らん、穩便なるべからず、便ち金子は切に他に與ふ可からず、賢弟我敢て你を留めて相請ひて家中に去きて住まらしめず、倘或は人有りて認め得るは是(二三)要處ならず、今夜月色必然明朗ならん、你便ち山寨に回り去る可し、此に在りて(二四)停閣する莫れ、宋江再三意を衆頭領に申す、(二五)前來して慶賀する能はず、切に恕罪を乞ふ。劉唐道ふ、哥哥大恩、報答す可き無し、特に小弟をして些の人情を送り來り、押司に與へ微しく孝順の心を表せしむ、保正哥哥今頭領と做り、學究軍師たり、號令舊日に比せず、小弟怎んぞ敢て將回り去らん、山寨中に到らば必然責を受けん。宋江道ふ、既に是號令嚴明ならば、我便ち一封の回書を寫して你に與へ將去らしめば便了ならん。劉唐苦苦に宋江に相央みて收受せしむ。宋江那裏に肯て接せん。隨即一幅の紙を取り來り、酒家の筆硯を借りて、備細に一封の回書を寫了し、劉唐に與へて包内に收在せしむ。劉唐は是箇の直性的の人、宋江の此の如く推却するを見て、是肯て受けざらんと想ひ、便ち金子を將て前に依りて包了す。看看天色晚來る。劉唐道ふ、既に然く兄長回書有り了すれば小弟連夜に便ち去らん。宋江道ふ、賢弟相留むるに

【二二】雷横の事、金本に無し。
【二三】しようだんごとでない、大變であるから。

【二四】まゐりて御よろこび致し兼ねぬ。
【二五】とどまる。

及ばず、(二六)心を以て相照らせ。劉唐又四拜を下了す。宋江量酒人をして來らしめて道ふ、此位の官人有り、白銀一兩を留下して此に在り、我明日却て自ら來り算せん。劉唐包裹を背上し、朴刀を拿り、宋江に跟着して樓を下り來り、酒樓を離了し、出でて巷口に到る、天色昏黄、是八月半の天氣、月輪上り來る。宋江劉唐の手を携住し、分付して道ふ、賢弟(二七)保重せよ、再び來るべからず、此間に公を做す的多し、是要處ならず、我更に遠く送らず、只此に相別れん。劉唐月色の明朗なるを見、脚步を拽開し、西路を望みて便ち走り、連夜に梁山泊に回り來る。再び説く、宋江劉唐と別了し、自ら慢慢と行き下處に回り來る、一頭走り、一頭肚裏に尋思し道ふ、早く是做公的の看見する没し、争些兒一場の大事を惹出し來ると、一頭に想ふ、那の晁蓋倒つて去いて(二八)草に落了し、直に此の如く(二九)大弄すと。兩箇の(三〇)灣を轉じ過ぎず、只聽得たり背後に人有り、叫ぶ一聲、押司、那裏に去來し、(三一)好兩日面を見せざる。宋江頭を回して看る時、正に是閻婆、這番に因り分教有り、宋江小膽翻つて大膽と爲り、善心變じて惡心となるにあらずや。畢竟宋江怎地に閻婆を發付する。且下回の分解を聽け。

【二六】引留むべきを留めざれども、吾が心をば君が心にて知れ。
【二七】くれかかり。
【二八】大事をとれ。

【二八】落了草、賊となり。
【二九】えらくやり出す。
【三〇】まがりかど。
【三一】久しく。

第二十一回

虔婆酔うて唐半兒を打ち、宋江怒つて閻婆惜を殺す。

話說す、宋江劉唐に別れ、月色の街に満つるに乘着し、歩に信せて自ら下處に回り來る。却て好的

閻婆に遇着す、上前し來り叫び道ふ、押司、二

多日人をして相請はしむ、好、貴人面を見難

し、便ち是小賤人些の言語高低ありて押司に

傷觸するも、也老身の薄面を看得せよ、自ら

他を教訓して押司の與に陪話せしめん、今晚

老身縁有り、押司を見るを得たり、同に走一遭

し去け。宋江道ふ、我今日縣裏の事務忙はしく、

擺撥し開かず、改日却て來らん。閻婆道ふ、

望つ、胡亂に他を温顧せば便了せん、直に恁地に下得するや。宋江道ふ、端的に些箇忙なり、

明日准ず來らん。閻婆道ふ、我今晚你と去くを要すと。便ち宋江の衣袖を押へて扯住し了し、發話

し道ふ、是誰か你を挑撥せるならん、我娘兒兩箇の下半世の過活は、都て押司に靠着す、(三三)外

- 【一】 多日、いく日も。
- 【二】 好は、深義なし。
- 【三】 貴人難見面は俗諺なり。
- 【四】 小賤人は婆惜を指す、言語失禮ありともわたくしの面に免じ下され。
- 【五】 おわび致せせん。
- 【六】 片づけきれぬ。
- 【七】 それはいけません。
- 【八】 ともかく他を御目かけ下さらば宜からん。
- 【九】 そんなに打捨すとも。
- 【一〇】 ちといそがしい。
- 【一一】 誰か何かいひておこらせたるならん。
- 【一二】 たより居る。
- 【一三】 人のいふよいな是非は。

人の説くの間是非は都て他を聽くを要せず、押司自ら箇の張主を做せ、我が女兒但差錯有

らば、都て老身上に在り、押司胡亂に去つて走一遭せよ。宋江道ふ、你纏するを要せざれ、

我的の事務、分撥し開かず、這里に在り。閻婆道ふ、押司便ち些の公事を悞るも、知縣相公便ち你を

責罰するに到り得ず、這回錯過すれば後次逢ひ難し、押司只得老身と去いて走一遭せよ、家裏に到り

て自ら告訴する有らん。宋江是箇の快性的の人、那の婆子に纏せられ過へず、便ち道ふ、你手を

放了せよ、我去かば便了ならん。閻婆道ふ、押

司跑了し去るを要せざれ、老人家趕ひ上ら

ず。宋江道ふ、直恁地這等にせんと、兩箇厮跟

着て門前に來到す。正に是、

酒人を酔はさず人自ら酔ふ、花人を迷はさず

人自ら迷ふ。直饒今日能く悔ゆるを知るも、

何ぞ當初に去つて爲す莫からざる。

- 【一四】 張主、主張に同じ。主となつて下され。
- 【一五】 わるいこと、まらがひ、あらば私が引受ける、つまり然様いふことはさせぬ。
- 【一六】 胡亂はうるんなれども、かかる處は、邦語のまあどう
- 【一七】 か、といふに當る。
- 【一八】 うるさくするな、用事がまだ片づかずに居る。
- 【一九】 まを上げる。
- 【二〇】 おひつかず。
- 【二一】 乖はいやに利口なる也。
- 【二二】 しつかりくついで。

宋江脚を立住し了す。閻婆手を把つて一攔し、說道ふ、押司來つて這裏に到る、終に入去り了せざるを成さず。宋江進んで裏面の凳子上に到り坐了す。那の婆子は乖的、古より道ふ、老虔婆、如何ぞ他の手を出得んと、只宋江の走去するを恐れ、便ち擊して身邊に在りて坐了し、叫道ふ、我兒、

你的心愛的の三郎這裏に在りと。那の閣婆惜、牀上に 倒れし、(一)蓋の孤燈に對着し、正に尋思す可き没き處に在りて、只這の小張三の來るを待つ、(二)娘の你的の心愛的の三郎這裏に在りと叫道するを聽得て、那の婆娘只道ふ、是張三郎なりと、慌忙起來し、手を把つて 雲髻を掠一掠し、口裏に喃喃的に罵り道ふ、這の 短命、等得て我苦めり、(三)老娘先づ兩箇の 耳刮子を打し着せんと、

飛ぶも也似て樓を跑下し來り、(四)櫛子の眼裏就り張する時、堂前の琉璃燈、却て明亮に是宋江なるを照見し、那の婆娘復身を翻し轉じ又樓に上り去り、前に依りて牀上に倒れ在す。閣婆女兒の脚步の樓を下り來り了するを聽得、又再び樓に上り去了するを聽得、婆子又叫び道ふ、我兒、你的の三郎這裏に在り、怎地倒つて走了し去るや。那の婆惜牀上に在りて 應へ道ふ、

- 【三】 よこになり。
- 【四】 娘は母、婆娘はむすめ。
- 【五】 髪をかき。
- 【六】 罵辭にして反つて親愛の意を含める也。邦語のいのちとりめ、などいばんが如し。
- 【七】 老娘は自らいふ。
- 【八】 耳刮子を打すは耳を強くひく也。支那婦人の男子ないぢめる常套なり。
- 【九】 かうしのすき間より見る時。
- 【一〇】 婆惜の言、常態ならずひれくれ居るを看取すべし。自から解すべし。
- 【一一】 わけもなくやかましい。
- 【一二】 ぢれうらみて。
- 【一三】 ひぞり言を受くるも是非なし。

ふ、這屋裏多遠にして、他來るを會せず、他又躊躇ならず、如何ぞ自ら上り來らず、直我が來つて他を迎接するを等つか、了當なく絮絮聒聒地なるや。閣婆道ふ、這の賤人、眞箇に望ちて押司の來るを見ず、(一)氣苦し了して、恁地に説ふ、也好押司をして他の 兩句兒を受けしめん。婆子突ひ道ふ、

押司我你と樓に上り去らん。宋江那の婆娘の這幾句を説ふを聽了し、心裏自ら 五分の不自在有り。這婆子に一扯され、勉強して只得樓に上り去る。原來是一間六椽の樓屋、前半間に一副の春臺卓凳を安き、後半間に臥房を鋪着し、(一)貼裏に一張の三面稜花的の牀を安く。兩邊は都て是欄干、上に一頂の紅羅の幔帳を掛着し、側首に箇の衣架を置き、手巾を搭着す、這邊に箇の洗手盆を放着す、一張の金漆の卓子上に一箇の錫燈臺を置く。(二)邊廂に兩箇の杌子。正面の壁上一幅の仕女(の畫)を掛け、床に對して四把一字に交椅を排着す。宋江樓上に來到す、閣婆便ち房裏に拖入れ去る。宋江便ち杌子上に向て牀邊に朝着し坐了す、閣婆牀上就り女兒を拖起し來り説き道ふ、押司這裏に在り、我兒、你只是性氣好からず、言語を把り來つて他を傷觸す、押司を惱まし得て門に上らざらしめ、間時は恰も家裏に在りて思量す、我如今不容易に他を請じ來る、你却て起來して 句話兒を陪せず、顛倒して性を使ふや。婆惜手を把つて 據開し、那の婆子に説ふ、你甚麼を做して這般に 鳥亂するや、我又曾て 歹事を做した了せず、他自ら門に上らず、我をして怎地陪話せしめん。宋江聽了りて也聲を做さず、婆子便ち一把の交椅を推過して、宋江の肩下に在き、他の女兒を推して過來せしめ、説道ふ、你且三郎と坐一坐せよ、陪話せずんば便ち罷む、焦燥を要せず、你兩箇多時見

- 【一】 おもしろくない。
- 【二】 貼裏に。臥房の内、おくの方について也。
- 【三】 わき也。杌子こしかけ也。
- 【四】 発の小にして輕きもの。
- 【五】 おわびもせず、あべこべに我まます也。
- 【六】 おしのけるやうにする。
- 【七】 つまらぬ騒ぎをするや。
- 【八】 わるい事。

你の心愛的の三郎這裏に在りと。那の閣婆惜、牀上に 倒れし、(一)蓋の孤燈に對着し、正に尋思す可き没き處に在りて、只這の小張三の來るを待つ、(二)娘の你的の心愛的の三郎這裏に在りと叫道するを聽得て、那の婆娘只道ふ、是張三郎なりと、慌忙起來し、手を把つて 雲髻を掠一掠し、口裏に喃喃的に罵り道ふ、這の 短命、等得て我苦めり、(三)老娘先づ兩箇の 耳刮子を打し着せんと、

す、也一句の有情的話兒を説け。那の婆娘、那裏に肯て過來せん、便ち宋江の對面に去いて坐了す。宋江頭を低了して聲を做さず、婆子女兒を見る時、也臉を別轉了る。閻婆道ふ、酒没く漿没くば甚麼の道場を做さん、老身一瓶兒の好酒の這裏に在る有り、些の菓品を買ひ來り、押司と陪話せん、我兒、你押司に相陪して坐地せよ、怕羞を要せざれ、我便ち來らん。宋江自ら尋思し道ふ、我這の婆子に釘住し了喫て、脱身し得ず、他の樓を下り去るを等つて、我後に隨ひ也走了せん。那の婆子宋江の走らんと要る的意思を瞧見し、房門を出得て去り、門上却て 屈戌あり、便ち房門を把つて拽上し、屈戌を將て搭了す。宋江暗に付り道ふ、那の 虔婆倒つて先づ我を算了すと。且説く、閻婆樓を下り來り、先づ竈前に去いて、箇の燈を點起し、竈裏見成に一鍋の脚湯を燒着せり、再び些の 柴頭を轉上し、些の碎銀子を拿了し、巷口に出でて去いて、些の時新の菓品鮮魚嫩雞肥鮮の類を買得、歸りて家中に到り、都て盤子を把つて盛了し、酒を取つて傾けて盆裏に在き、半鏝子を呑み、鍋裏に在きて盪熱了り、傾けて酒壺裏に在き、數盆の菜蔬を收拾了し、三隻の酒盞、三隻の筋、一桶盤に托し樓に上り來り、春臺上に放在し、房門を開了し、搬將入來し、擺して卓子上に在き、宋江を見る時、只頭を低着し、女兒を見る時、也 別處に朝着す。閻婆道ふ、我兒、起來して盞酒を把れ。婆惜道ふ、你們自ら喫せよ、我は

- 【四〇】 俗諺なり、酒なく漿なくては、法事もならぬ。
- 【四一】 かががれ。
- 【四二】 やりて婆といふが如し。
- 【四三】 まきをそへ。
- 【四四】 柄杓半分。
- 【四五】 よそをむいてゐる。

煩に耐へず。婆子道ふ、我兒、爺娘手裏小兒より你的性兒に慣了す、別人面上には使ひ得ざるべし。婆惜道ふ、盞を把らすんば便ち怎地、終に劍を飛ばして來りて我頭を取了するを成さじ。那の婆子倒つて笑起し來り、說道ふ、又是 我的不是了す、押司は是箇の風流の人物、你と一般の見識ならず、你酒を把らすも便ち罷まん、且臉を回過し來りて盞酒兒を喫せよ。婆惜只頭を回過し來らず。那の婆子自ら酒を把り、來りて宋江に勸む。宋江勉強して一盞を喫了す。婆子笑ひ道ふ、押司責めらるるを要する莫れ、問話は都て打疊し起し、明日慢慢に告訴せん、外人押司の這裏に在るを見て、多少乾熱するもの、怯氣せず、胡言亂語、放屁辣臊するも、押司都て聽くを要せざれ、只願酒を喫せよ、三盞を篩ぎ卓子上に在き、說道ふ、我兒、小孩兒的の性を使ふを要せざれ、胡亂に一盞の酒を喫せよ。婆惜道ふ、只願我を纏するを得る没れ、我飽了し、喫し得ず。閻婆道ふ、我兒、你也你的三郎に陪侍す、盞酒を喫するも使得ん。婆惜一頭聽了し、一面肚裏に尋思す、我只心張三身上に在り、兀誰か煩に耐へて這厮に相伴せん、若他を把つて灌ぎ得て酔了せしむるにあらば、他必ず來つて我に纏らんと、婆惜只得勉強して酒を拿起し來り、半盞を喫了す。婆子笑道ふ、我兒只是焦燥す、且懷を開いて兩盞兒を喫して睡れ、押司も也幾杯を滿飲せよ。宋江他に勸められ過さず、三

- 【四六】 酒をのまよとて殺すこと は出來まい。
- 【四七】 わたしがわるかつた。
- 【四八】 問話は積んでおいていぢらすに、明日ゆるりとお話し

- 致さん。
- 【四九】 岡燒するものあるも何でもなし、何彼と屁の如きことをいふともおききなざるな。

五杯を連飲了す、婆子也連連幾杯を喫了し、再び樓を下りて去いて酒を盪す。那の婆子女兒の酒を喫せざるを見て、心中悦ばず、纔に女兒の心を回して酒を喫するを見て、歡喜して道ふ、若是今夜他を兜め得て住めば、那の人惱恨都て忘了せん、且又他と幾時を纏し、却て再び商量せん、婆子一頭尋思し、一面自ら窺前に在て三大鐘の酒を喫了し、些の痒麻の上來する有るを覺道し、却て又一碗を篩ぎ了りて喫し、大半鏝を鏝了し、傾けて注子裏に在き、樓に爬上し來る。見る那の宋江は頭を低着して聲を做さず、女兒もまた臉を別轉着て、裙子を弄す。この婆子哈哈地に笑つて道ふ、

你兩箇又是泥塑的にあらず、甚麼と做て都て聲を做さざる、押司、你是男子漢たるべからずや、只得些の溫柔を装ひ、些の風話兒を説ひて要せよ。宋江正に道理を做す處なく、口裏只聲を做さず、肚裏好生進退し得ず。閻婆惜自ら想ひ道ふ、你來りて我一に間常時の似く來りて你に話を陪し、你に相伴して要笑するを指望するも、我如今却て要せじと。那の婆子は許多の酒を喫了し、口裏只管七を夾み八を帯びて嘈し、正に那裏に在りて、張家の長、李家の短、白を説ひ、綠を道ふ。詩有り證と爲す、

只要す孤老の門を出でざるを、花言巧語精魂を弄す。幾多の聰慧他の陥るるに遭ふ、死後應に須らく舌根を抜かるべし。

- 【五〇】 酔ひ來るをおぼえ。
- 【五一】 酒つき。
- 【五二】 ははと。
- 【五三】 泥人形。
- 【五四】 戲話をいひてたはむれ
- 【五五】 我をかまはず。
- 【五六】 何のかのとしやべる。
- 【五七】 下らぬ世間話をうるさくしやべるなり。

却て郟城縣の一箇の糟醃を賣る的の唐二哥といふ有り、唐牛兒と叫做す。如常街上に在りて、只是幫間す、常常宋江の他を齎助するを得、但些の公事有れば、去いて宋江を告み、也幾貫の錢を落得して使ひ、宋江他を用ひんと要る時は、死命向前す。這一日の晩、正に賭錢して輸了し、道理を做す處没し、却て縣前に去き宋江を尋ね、下處に奔到するも尋ね見えす。街坊都て道ふ、唐二哥、你誰を尋ねて這般に忙しき。唐牛兒道ふ、我喉急なり、(五二) 孤老を尋ねんと要、一地裏他を見ず。衆人道ふ、你的の孤老は是誰ぞ。唐牛兒道ふ、便ち縣裏の宋押司なり。衆人道ふ、我方纔他と閻婆と兩箇過去し、一路走着するを見る。唐牛兒道ふ、(五三) 是了、這の閻婆惜賊賤蟲、他自ら張三と兩箇打し得て火塊也似て熱し、只宋押司一箇を瞞着す、他敢て也些の風聲を知り、好幾時去らず了す、今晚必然那の老咬蟲に假意見に纏了し去らるならん、我正に錢の使ふ没し、喉急了す、胡亂に那裏に去きて幾貫の錢を尋ねて使ひ、就ち兩碗の酒を幫して喫せんと、一逕に奔つて閻婆門前に到る、裏面の燈明らかにして門却て關せざるを見て入つて胡梯の邊に到り、聽得たり閻婆の樓上に在りて呵呵地に笑ふを。唐牛兒脚を捏し手を捏し、樓上に上り到り、板壁の縫裏より

- 【五八】 かすづけ賣り。
- 【五九】 まうけて。
- 【六〇】 いのちがけにすすむ。
- 【六一】 たんな、と云はんが如し。
- 【六二】 どこにも。
- 【六三】 さうか。
- 【六四】 くそば。
- 【六五】 捏はにぎるといはんが如し、脚手をそつとさせ。
- 【六六】 いたのすきま。

張する時、宋江と婆惜と兩箇都て頭を低着し、那の婆子、横頭卓子邊に坐し、口裏七十三、八十四と只顧に嗜ぐ。唐牛兒、閃將入來し、閻婆と宋江婆惜とを看着し、三箇の喙を唱了し、立つて邊頭に在り。宋江尋思し道ふ、這厮來り最も好しと、(六五) 喙を把りて下を望み一努す。唐牛兒是箇の乖的の人、便ち科を瞧、宋江を看着して便ち說道ふ、小人何の處か尋ね過らざらん、原來却て這裏に在りて酒を喫して要す、好喫し得て安穩なり。宋江道ふ、是縣裏に甚廢の要緊の事有るにあらざる莫きや。唐牛兒道ふ、押司、你怎地忘れたる、便ち早間の那件の公事、知縣相公廳上に在りて發作し、(六六) 四五替の公人を着て下處に來り押司を尋ねしむ、一地裏又尋ぬる處没し、相公焦燥して一片と做る、押司便ち身を動かすべし。宋江道ふ、恁地に要緊ならば、只得去らんと、便ち身を起し樓を下らんと要す。那の婆子に攔住せ喫れ、道ふ、押司這の科分を使ふを要せず、這の唐牛兒、(六七) 捻泛し過來す、你這の精賊、也。老娘を瞞かんとするは、正に是魯般手裏に大斧を調するなり、這の早晚知縣自ら衙より回り去り、夫人と酒を喫し樂を取る、甚廢の事務有りて發作する有らん、你這般の道兒は只好し魍魎を瞞くに、老娘手裏に説くも過去らす。唐牛兒便ち道ふ、眞箇に是知縣相公の緊等的の勾當なり、我

- 【六五】 のぞく時。
- 【六六】 ひよいと入り。
- 【六七】 嘴を失らし突出すやうにして意を悟らしむる也。
- 【六八】 わかりのばやい男。
- 【六九】 科はしうち、しぐさ。
- 【七〇】 四五たびいれかはり。
- 【七一】 そんなお芝居をなさるのはいけません。
- 【七二】 ばつをあはせる。
- 【七三】 油断ならぬどろぼう。
- 【七四】 此處の老娘は閻婆自ら道ふなり、すべて女の己を誇りいふ時、老娘といふな

却つて説を説くを會せず。閻婆道ふ、你的娘狗の尻を放つ、老娘の一雙眼は却て是琉璃葫蘆兒と一般、却纔押司の嘴を努し過來して你をして發科せしむるを見る、你倒つて押司を攬撥して我が屋裏に來らしめず、顛倒して他を打抹し去る、常言に道ふ、人を殺すは恕すべし、情理は容し難しと、這の婆子身を跳起し來り、便ち那の唐牛兒を把つて劈頸子に只一又す、浪浪踰踰、直に房裏より樓を又下され來る。唐牛兒道ふ、你甚廢と做て便ち我を又する。婆子喝し道ふ、你曉得すや、人の買賣衣服を破るは父母妻子を殺すが如し、你高声を做さば便ち你這の賊乞丐を打たん。唐牛兒鑽將過來し道ふ、你打て。這の婆子酒興に乗着し、又五指を開いて、那の唐牛兒臉上に去いて兩掌を連打し、直ちに籠子外に擲出し去り、婆子便ち籠子を扯きて門背後に撒放し、却て兩扇門を把つて關上し、栓を拏つて栓了し、口裏只顧罵る。那の唐牛兒這の兩掌を喫し、立つて門前に在り大に叫び道ふ、賊老咬蟲、慌するを要せず、

- 【七五】 魯般は古の名ある大工。諺也。釋迦に説法といふが如し。
- 【七六】 そんな仕方はずまらぬおはげをだますに足りるのみ、わたしたごまかすことばならぬ。
- 【七七】 娘狗の尻を放つ、何を下らぬこといふ。
- 【七八】 びいどろの瓢箪と同じ、我邦にて、おれの眼は水晶だといふに同じ。
- 【七九】 芝居をしだす。
- 【八〇】 すすめて。
- 【八一】 つれて行く。
- 【八二】 其の料簡がにくい。
- 【八三】 劈は劈頭劈面などいふ時の劈に同じ、頸子を眞向にいきなり一又するなり。又は字形の如く突くなり。頸は耳の付根、くびのところなり。
- 【八四】 諺なり、人の商賈世渡りの邪魔するは父母妻子を殺すが如し、大敵なり。
- 【八五】 おきかへり。
- 【八六】 つき出し。
- 【八七】 しまりをしてしまふ。

我宋押司の面皮を看すんば、(五) 你が這の屋裏をして粉砕せしめん、(六) 你 雙日着せずんば單日に着せしめん、(七) 我你を結果し了せずば姓唐ならずと、胸を拍着し大罵し了去る。婆子再び樓上に到り、宋江を看して道ふ、押司事没し、那の乞丐を(八) 保して甚魔を做さん、(九) 那厮(一〇) 一地裏に去いて酒を搯し喫むのみ、只是(一一) 是を搬し非を搬す、這等街に倒れ巷に臥すの(一二) 横死賊、也來つて門に上り戸に上り人を欺負す。宋江は箇の眞實の人の、這婆子に一篇(一三) 眞病を道着られ、到つて身を抽き得ず。婆子道ふ、押司心裏に責めらるるを要せず、老身只(一四) 恁地に知重し得了す、我兒と押司と只這杯を喫せよ、我猜着す、你兩箇多時見ず、(一五) 以定早く睡るを要す、收拾し了し罷まん。婆子又宋江に勸めて兩杯を喫せしめ、杯盤を收拾して樓を下り來り、自ら竈下に去き下り去る。宋江樓上に在り、自ら肚裏に尋思し説ふ、這婆子の女兒張三と兩箇事有り、我心裏半信不信、眼裏會て眞實を見ず、待に去來んと要れば、只我を(一六) 村と道はん、況や且夜深し、我只得權に睡一睡して、且這の婆娘の怎地今夜我が與にする情分如何を看んと。只見る那の婆子又樓に上り來り説道ふ、夜深し、我押司兩口兒をして早く睡らしめん。

- 【九〇】 丁の日にやつつけすば半の日にやつつけん。你をやつつけずば男でない。
- 【九一】 とりあつて。
- 【九二】 どこでもあるいて酒をおしかけのみするのみ。搯は搯突の搯、深義なし。
- 【九三】 ただあちこちの是非をいひちらす。
- 【九四】 のたれ死野郎。
- 【九五】 眞病とは牛兒を借りて此處を去らんとしたることなり。
- 【九六】 何事も知つて居ります。
- 【九七】 一定也。
- 【九八】 村、やば、あなかくさいと云はんが如し。

那の婆娘應じ道ふ、你的事に干らす、你自ら去いて睡れ。婆子笑つて樓を下り來り、口裏に道ふ、押司(一七) 安置、今夜多歡し、明日(一八) 慢慢地に起きよ。婆子樓を下り來り、竈上を收拾し了し、脚手を洗了し、燈を吹滅し、自ら去つて睡了す。(一九) 却て説く、宋江坐して杌子上に在り、只那の婆娘の先時の(二〇) 似先、先づ來りて(二一) 假倚陪話するを指望し、胡亂に又將就する幾時、誰か想はん婆娘の先時の道ふ、我只張三を思量す、他に攪さ喫する、却て眼の中の釘の似く一般なり、那厮は倒つて直我が一に(二二) 先前時の似く來り(二三) 至氣するを指望せんも、老娘如今却(二四) 要するを要せず、只船を撐して岸に就くと説ふを見る、幾か會て岸を撐して船に就くことあらんや、你來つて我を保せざらば、老娘倒つて(二五) 落得せんと。看官聽說せよ、原來是色最も人を怕れしむ、若是他心有りて你を戀ふ時は、身上に便ち刀劒水火有るも、也他を欄め住へず、他も也怕れず、若是他你を戀ふに心無き時は、你便ち身は金銀堆裏に坐在するも、他また你を保せざらん。常言に道ふ、(二六) 佳人意有れば村夫も俏、紅粉心無ければ浪子も村と。宋公明は是箇の勇烈の大丈夫、女色の爲にする的の手段は却て會せず、這の閻婆惜は、那の張三に(二七) 小意見に百依百隨し、輕憐重惜し、俏を賣り奸を迎

- 【九九】 おやすみなさい。
- 【一〇〇】 ゆるりと。
- 【一〇一】 此以下數十句金本に無し。
- 【一〇二】 よりそひ物語りし。
- 【一〇三】 至氣の二字解し難し、或は誤ならん。意を以て解するに、假倚陪話するをいふならん。
- 【一〇四】 まうける。
- 【一〇五】 心次第にて野暮もいき、いきも野暮ならんとなり。
- 【一〇六】 やさしく心こまかに、大切にされ、氣に入るやうにのみされて心引亂されてしまつたり。

へて、這の婆娘の心を引亂さる、如何ぞ肯て宋江を戀はん、當夜兩箇燈下に在りて坐着し、面を對して都て聲を做さず、各自肚裏に躊躇し、却て泥の乾くを等つて廟に撥入せんとするに似たり。看看天色夜深く、廳間に月上る。但見る、

銀河耿耿、玉漏迢迢。廳を穿つて斜月寒光映じ、戸を透して涼風夜氣を吹く。譙樓の禁鼓、一更未だ盡さず一更催し、別院の寒砧、千搗將に残せんとし干搗起る。晝簷の間、叮嚀として

旅客の孤懷を敲碎し、銀臺上、閃爍たる清燈
閨人の長歎を偏照し、淫を貪るの妓女は心火
の如く、義に仗るの英雄は氣虹の似し。

當下宋江は杌子上に坐在し、那の婆娘を睨る時、復地に(一)口氣を歎す、約莫也是二更の天氣なり。那の婆娘衣裳を脱せず、便ち牀に上り去り、自ら繡枕に倚り、身を

紐過して、裏壁に朝して自ら睡す。宋江看了し、尋思し道ふ、奈す可き這の賤人、全く我を些箇だも保せず、他自ら睡す、我今日這の婆子に言來り語去り、幾杯の酒を央了、夜深に打熬し得ず、只得睡了し罷まんと、頭上の巾幘を把つて除下し、卓子上に放在し、上蓋衣裳を把りて、衣架上に搭在し、腰裏より鸞帶を解下す。上に一把の解衣

【一〇七】泥塑偶像のまだ乾上らぬ
出来かかりの如し。
【一〇八】時計すむ。
【一〇九】ふうりん。
【一一〇】ふつとなり、復の字、音
を取る、義を取らず、重復の
氣として、しきりに訓するは
いかか。

【一一】れぢむけ。
【一二】むかひ。
【一三】こらへられぬ。
【一四】清以前の時、男子も巾幘
を用ひて髪を纏めし也。
【一五】うはぎの衣裳。
【一六】かけおく。

刀と招文袋と有り、却て掛けて牀邊の欄杆子上に在き、絲鞋淨襪を脱去し、便ち牀に上りて那の婆娘の脚後に去りて半箇の更次を睡す。聽得たり婆惜の脚後に在りて冷笑するを。宋江心裏氣悶す、如何ぞ睡り得て着せん。古より言ふ、歡娛には夜の短きを嫌ひ、寂寞には更の長きを恨むと。看看三更より半夜に交び、酒却て醒了す、五更に捱到して、宋江起來し、面桶裏に冷水に臉を洗了し、便ち上蓋衣裳を穿了し、巾幘を帶了し、口裏に罵り道ふ、你這の賊賤人、好生無禮なり。婆惜也曾て睡着せず、宋江の罵るを聽得る時、身を紐過し回して道ふ、你這の臉を羞ぢすや。宋江那の(一)口氣を怒り、便ち樓を下り來る。閻婆脚步の響を聽得たり、便ち牀上に在りて說道ふ、押司且睡歇せよ、天明を等ちて去れ、來由没く五更に起きて甚麼を做さん。宋江也應へず、只願來りて門を開く。婆子又道ふ、押司出去る時、我が與に門を拽上せよ。宋江門を出得來り、就ち拽上了す。忿れる那の(一)口氣出す處没く、直に下處に遶回し來らんと要、却て縣前より過ぎ、一碗の燈明を見る。看る時却て是湯藥を賣る的王公、縣前に來到して早市を趕ふ。那の老兒是宋江の來るを見、慌忙に道ふ、押司如何ぞ今日出來り得て早き。宋江道ふ、便ち昨夜來酒醉し、更鼓を錯聽す。王公道ふ、押司必然酒に傷らる、且一盞の醒酒二陳湯を請せん。宋江道ふ、最も好し、就ち瓮上

【一〇七】半時ばかり。
【一〇八】まろこらへ。
【一〇九】早朝の商買をする。
【一一〇】時の太鼓をまらがへきき

【一一】宿醉するならん。
【一二】酒をさます藥をさしあげ
ん。此老人商買なればなり。

に坐了す。那の老子濃濃地に一盞の二陳湯を奉じ、宋江に 遞與して喫せしむ。宋江喫了し、驀然と想起し道ふ、(二三) 時常他的の湯薬を喫し、曾て我が錢を還すを要めず、我舊時曾て他に一具の棺材を許し、曾て他に與へ得ず、想起すれば昨日那の屍蓋の送り來る的金子有り、他の一條を受けて、招文袋裏に在り、何ぞ就ち那の老兒に與へて棺材錢と做し、他をして歡喜せしめざると。宋江便ち道ふ、王公、我日前に曾て你に一具の棺木の錢を許す、一向曾て把得て你に與へず、今日我些の金子の這裏に在る有り、把つて你に與へん、你便ち陳三郎の家に將去つて、一具の棺材を買了し、家裏に放在すべし、你が (二三) 百年歸壽の時、我却て再び你が與に些の送終の資を與ふべし。王公道ふ、恩主時常 (二三) 老漢を觀る、又終身の (二三) 壽具を與へらるるを蒙る、老子今世報答する能はず、後世驢と做り馬と做りて押司に報答せん。宋江道ふ、此の如く説ふを休めよと。便ち (二三) 背子の前襟を掲起し、去つて那の招文袋を取らんとする時、一驚を喫して道ふ、苦也、昨夜正に忘れて那の賤人的の牀頭の欄干子上に在り、我一時 (二三) 氣起し來り、只願走了し、曾て繫得て腰裏に在らず、這幾兩の金子は甚麼に直り得ん、須ち屍蓋の寄來する的那の一封書有り、這金を包着せり、我本酒樓上劉唐の前に在りて燒毀了せんと欲したるも、他回りに去りて説ふ時、只我他を把り來りて念と爲さ

【二三】わたす。
【二四】いつも。
【二五】死んだ時は。
【二六】目を老人にかけて下さる。

【二七】非送道具を壽具といふ。
【二八】袖無し、チョッキの如きもの。

ずと道はん、正に將に下處に到り來りて燒かんと要したりき、却て這の閻婆に我を纏將し去られ、昨晚燈下に就いて燒かんと要る時、賤人の眼裏に露在せんことを恐怖し、此に因りて曾て燒得ず、今早走得て慌ただしく、期せずして忘了せり、我常時這の婆娘の些の曲本を看るを見る、頗る幾字を識る、若是他に拏了れば、倒て是 (二三) 利害なりと。便ち身を起して道ふ、阿公怪む休れ、是我が謊を説くにあらず、只道へり金子招文袋裏に在りと、想はざりき出來り得て忙はしく、忘了して家に在り、我去いて取來りて你に與へん。王公道ふ、去いて取るを要する休れ、明日慢慢的に老漢に與ふるも遅からず。宋江道ふ、阿公、你知道せず、我還一件の物事有り、一處と做して放着せり、此を以て去りて取るを要すと。宋江慌慌急急に、閻婆の家裏に遶回し來る。正に是、

【二九】はらたてて。
【三〇】厄介、危険なり。
【三一】愛は仇となり、恩は禍の種子となる。

【三二】あいつのつらつき我がおとなしくなりて機嫌取るを欲してゐたが。

且説く、這の閻婆惜宋江の門を出て去了するを聽得、爬將起來し、口裏自言自語し道ふ、那厮老娘を擗了し、一夜睡り着せず、(二三) 那厮含臉只老娘の氣を陪し情を下すを指望す、我你を信せず、老娘張三と過し得て好きより、誰か煩に耐へて你を保せん、你門に上り來らずば倒つて好しと、口裏に説着

や醉恩の是禍胎なるを。

合に是英雄事有り來るべし、天篋中の財を遺失せしむ (二三) 己に知る着愛の皆冤對なるを、豈料らん

し、一頭に被を鋪き、(二三)上截の襖兒を脱下し、下面の裙子を解了し、胸前を袒開し、下截の襖衣を脱下す。牀の面前の燈、却て明亮に、牀頭の欄干子の上に(一)條の紫羅の鸞帶を拖下するを照見す。見了りて笑ひ道ふ、黒三那斯、(二)嚙を乞し盡さず、鸞帶を忘れ了りて這裏に在り、老娘且捉了て把來つて張三に與へて繫けしめん。便ち手を用て去りて一提し、招文袋と刀子とを提起し來る、只覺ゆ袋裏些の重き有るを。便ち手把つて抽開し、卓子上を望んで只一抖す、正に那の(一)包の金子と書とを抖ひ出し來る。この婆娘拏起し來り看る時、燈下に照見す、是黃黃的一條の金子なるを。婆惜笑ひ道ふ、天我と張三とをして物事を買ひ喫せしむ。この幾日我張三の瘦了するを見、我也正に些の東西を買ひて他と、(三)將息せんと要、金子を將て放下し、却て那の紙書把つて展開し來りて燈下に看る時、上面に晁蓋并に許多の事務を寫着す。婆惜道ふ、好呀、我只道ふ、(四)吊桶落ちて井裏に在りと、原來也井の落ちて吊桶裏に在る有り、我正に張三と兩箇、夫妻と做らんことを要す、單單只你這斯多かりしに、今日也、(五)撞して我が手裏に在り、原來你と梁山泊の賊と通同往來し、一百兩の金子を送りて你に與ふ、且慌するを要せず、老娘慢慢地に你を、(六)消遣せんと。就ち這の封書把つて原に依りて金子を包了し、還招文袋裏に挿在し、怕れず你的、(七)五聖をして來り攝了し去るを、樓上に在りて自言自語す。只聽得たり樓下

【二三】 上半分うはぎ。
 【三四】 乞は吃、喫、同じ。嚙は字書に見えず。意を以て測るに吃囉不盡はやりつけられて堪へず也。
 【三五】 養生。
 【三六】 つるべが井戸に落ちてゐたと思ふたら井戸が吊桶に落

呀地に門響く。婆子問道ふ、是誰ぞ。宋江道ふ、是我。婆子道ふ、我早しと説へり哩、押司却て信せず去るを要す、原來早了、又回り來る、且再、(二)姐姐と睡一睡し、天明に到りて去れ。宋江也回話せず、一逕に樓に遶上し來る。那の婆娘聽得たり是宋江の回り來るを、慌忙に鸞帶刀子招文袋把つて一發に捲いて一塊と做し、藏して被裏に在き、(三)緊緊地に牀の裏壁に寄り、只齣齣を做して假睡し着す。宋江房裏に(四)撞到し、逕ちに牀頭欄干上に去いて取らんとする時却て見えず。宋江心内自ら慌て、只得を搖かして道ふ、你我、(五)日前的の面を見て、我に招文袋を還せ。那の婆惜假睡着して只應せず。宋江又搖かし道ふ、你急燥を要せず、我自ら明日你の與に陪話せん。婆惜道ふ、老娘正に睡る哩、是誰か我を攪す。宋江道ふ、你是我なるを情知して、假に甚麼を做す。婆惜身を紐轉し道ふ、黒三、你甚麼を説く。宋江道ふ、你我に招文袋を還了せよ。婆惜道ふ、你、(六)那裏に在りて我が手裏に交付

ちてゐた。那斯の死命はおれが制するやうになつた。
 【三七】 でくばして、你は我が手裏のものとなつたり。
 【三八】 你をうまく處理してやらん。
 【三九】 五聖何何をさすを知らず、道家の神神なるべし。或は曰く五通なりと。五通は明より起るに似たり。ここに五聖といふは猶古きものなれば五通にあらず、其神考ふべきなしとは夷堅志にも云へり。
 【四〇】 其神神をよくして取らせむとしても中與ふまじといふ也。
 【四一】 呀地、がと門の開く音。故かくいふ。
 【四二】 姐姐我むすめ宋江の妾なる故かくいふ。
 【四三】 ひつしと臥牀のおくの方にくつつき。
 【四四】 つと進み來り。
 【四五】 昨夜のはらちを忍び。
 【四六】 前かた悪くせざりし我が面にめんじて。
 【四七】 どこでわたした。

して却つて來つて我に問ふぞ。宋江道ふ、忘れ了りて你的脚後の小欄干上に在く、這裏又人の來る沒し、只是你收得せるならん。婆惜道ふ、咄、你鬼を見來らずや。宋江道ふ、(一四)夜來は是我不是了、明日你と陪話せん、你只我に還し了し罷めよ、(一五)要を作すを要する休れ。婆惜道ふ、誰か你と要を作す、我曾て收得せず。宋江道ふ、你先時曾て衣裳を脱して睡らず、如今被子を蓋着して睡る、以定是起來して被を鋪く時拿了るならん。只見る婆惜柳眉、(一六)踢つて豎て、星眼圓に睜り、說道ふ、老娘拿ることとは是拿了す、只是你に還さず、你(一七)官府的人を使ひ、便ち我を拿り去つて賊と做して斷せよ。宋江道ふ、我曾て你を冤して賊と做さざるべし。婆惜道ふ、知る可し老娘は是賊にあらざるを。宋江這の話を見て、心裏越慌て、便ち說道ふ、我曾て你娘兒兩箇を(一八)互く看承せざるべし、我に還し罷れ、我去つて事を幹すを要す。婆惜道ふ、間常也只老娘と張三と事有るを嗔る、他些の你に如かざる處有るも、也一刀の罪犯に該らず、你(一九)打劫賊と通同するに強似らず。宋江道ふ、好姐姐、叫ぶを要せず、隣舍も聽得ん、是要處にあらす。婆惜道ふ、你(二〇)外人の聽得るを怕る、你做し得ざる莫からん、這封書は老娘牢牢地に收着す、若し你を饒さん

- 【一四】おはげにあつたでは無いか、邦語の、狐にでもばかされたではないかといふに同じ。
- 【一五】強盜。
- 【一六】人の聽くを恐るるは何か爲したことがあるからであらう。
- 【一七】役所の人。
- 【一八】少く取扱ふまじ。
- 【一九】強盜。
- 【二〇】踢堅は急に豎つ也。

と要る時は、只我が(二一)三件の事に依らば便ち罷し。宋江道ふ、三件の事を説く休れ、便ち是三十件の事も、也你に依らん。婆惜道ふ、只怕る依り得ざらんことを。宋江道ふ、行ふべきは即ち行はん、敢て那の三件の事を問はん。婆惜道ふ、第一件は、你今日より便ち原我を典するの文書を將來りて我に還せ、再び一紙の我が張三に改嫁するに任從して竝に敢て來つて争執せずといふの文書を寫せ。宋江道ふ、這箇は依り得。第二件、我が頭上に帶ぶるの、我が身上に穿つ、家裏に使用するの、都て是你的辦するのなりと雖も、也一紙の文書を委して、你的日後來り討むるを許さず。宋江道ふ、這箇也依り得。閻婆惜又道ふ、只怕る你第三件の依り得ざらんを。宋江道ふ、我已に兩件都て你に依る、何に縁りて這件依り得ざらん。婆惜道ふ、那の梁山泊晁蓋より你に送與するのの一百兩の金子、快く把來つて我に與へよ、我便ち你に這の一場の(二二)天字第一號の官司を饒さん、你に這の招文袋裏の(二三)款狀を還さん。宋江道ふ、那の兩件到つて都て依り得、這の一百兩の金子は、果然送來つて我に與ふ、我肯て他的を受けず、前に依りて他を教て把了して回りに去らしむ、若端的に有る時、雙手便ち你に送與せん。婆惜道ふ、知る可し、常言に道ふ、公人の錢を見る、

- 【二一】我が三箇條の言ふこときかばゆるさん。
- 【二二】天字第一號は其中の第一番なり。甲の第一と云ふに同じ。官司は訴訟事裁判事と云はんが如し。
- 【二三】款狀は箇條書、裁判くさく云ひたる也。

蠅子の血を見るが如しと、他人をして金子を送りて你に與へしむ、你豈 推了して轉去する有らんや、這話却て放屁に似たり、公人と做るは、那箇の猫兒か腥を嗅せざらん、閻羅王面前放ち回す的の鬼没かるべし、你誰を瞞せんと待る、便ち這の一百兩の金子を把つて我に 與ふるは、甚麼に直り得ん、你是 賊贓なるを怕る時は、快く鎔過して我に與へよ。宋江道ふ、你也知るべし我は是老實的人、謊を説ふを會せず、你若信せずば、我に三日を限れ、我 家私を將て一百兩の金子に變賣して你に與へん、你我に招文袋を還せ。婆惜冷笑して道ふ、你這の黒三、倒つて乖なり、我を把つて一に小孩兒の似く(一)般に捉弄す、我便ち先づ你に招文袋の這封書を還了して、三日を歇きて却て你に問うて金子を討むる

【一五】 ことわりて。
【一六】 一百兩與ふるは何でもないではないか。
【一七】 刻印等ありて贓物の跡明らかなるを怕るるならば。
【一八】 家財。

【一九】 葬式済みて後葬式歌うたふ男の賃錢を討むるが如くならん。
【二〇】 どのやうにひどい。
【二一】 一度も還さぬといふことをおまけに云つてやらう。

は、正に是 棺材材出了して挽歌郎の錢を討むるならん、我が這裏に一手に錢を交さば一手に貨を交さん、你快く把來りて兩相交割さん。宋江道ふ、果然會て這の金子有らず。婆惜道ふ、明朝公廳上に到るも、你也曾て這の金子有らずと説ふや。宋江公廳の兩字を聽了し、怒氣直に起り、那裏に按納し得て住せん、眼を睜着して道ふ、你還すや還さざるや。那の婦人道ふ、你 恁地に狠なるも、我便ち你に還し送ばず。宋江道ふ、你真箇に還さざるや。婆惜道ふ、還さず、再到に你に 一百箇の

還さざるを饒くせん、若還すを要する時、(二) 鄆城縣に在りて你に還さん。宋江便ち來つて那の婆惜の蓋ふ的の被を扯く。婦人身邊却て這件の物有り、倒て被を顧みず、兩手只緊緊地に胸前を抱住す。宋江被を扯開し來り、却て這の鸞帶の頭の正に那の婦人の胸前に在るを見て拖下し來る。宋江道ふ、原來却て這裏に在り、(三) 一做さずんば二休せずと、兩手便ち來り奪はんとす。那の婆娘那裏に肯て放たん。宋江林邊に在りて (四) 捨命的に奪はんとす。倒つて那の(一)把の壓衣刀子を拽出して席上に在り、宋江便ち (五) 搶つて手裏に在り、那の婆娘宋江の刀を搶つて手に在るを見て、黒三郎人を殺すと叫ぶ。只這の一聲、宋江の這箇の念頭を提起し來る、那の一肚皮の氣、正に出す處沒し、婆惜が却て第二聲を叫ばんとする時、宋江の左手早く那の婆娘を按住し、右手却て早く刀落ちて、那の婆惜の (六) 額子上に去いて只一勒す、鮮血飛出し、那の婦人兀自吼哩。宋江他の死せざるを恐れ、再び復一刀す。那の(一)額の頭、恰恰行行として落ちて枕頭上に在り。但見る、手到處青春命を喪ひ、刀落つる時紅粉身を亡ぼす。七魄悠悠、已に 森羅殿上に赴き、三魂渺渺、應に枉死城中に歸するなるべし。緊しく星眸を閉ぢ、直挺挺として屍・席上に横たはり、半ば檀

【二二】 出る處へ出て還さう。
【二三】 やりかけたことだと。
【二四】 命かぎり。
【二五】 満身の方がぎり。
【二六】 急に取る。
【二七】 額は元來額なれども、北

人俗語には喉也。勒はとりしむる也。ここにはおさへきる。
【二八】 森羅殿、俗稱なり、地獄の裁判廳。

口を開き、濕津津として頭は枕邊に落つ。從來の美興一時に休す、此日嬌容戀ふに堪ふるや否や。宋江一時怒起り、閻婆惜を殺了し、招文袋を取過し、那の封書を抽出し來り、就ち殘燈下に就て燒了し、鸞帶を繫上し、樓を走下し來る。那の婆子下面に在りて睡る、他の兩口兒の論口するを聴き、倒て也意裏に着在せず、只女兒の一聲、黑三郎人を殺すと叫ぶを聽得、正に怎地を知らず慌忙跳起し來り、衣裳を穿了し、樓に逃上し來る。却て好し宋江と箇の胸厮撞を打す。閻婆問道ふ、你兩口兒、甚麼の闇を做す。宋江道ふ、你的女兒忒だ無禮なり、我に殺され了す。婆子笑ひ道ふ、却て是甚の話ぞ、(一七) 便ち押司生的て眼も兇に、又酒性も好からず、専ら人を殺すを要す、

押司 笑を老身に取る休れ。宋江道ふ、你信せざる時、房裏に去いて看よ、我真箇に殺了せり。婆子道ふ、我信せず。房門を推開して看る時、只見る血泊裏に屍首を挺着す。婆子道ふ、苦也、却て是怎地にして好からん。宋江道ふ、我は是烈漢なり、一世また走らず、你的怎地せんと要るに隨せん。婆子道ふ、この賤人果して是好からず、押司錯殺せず、只是老身人の養贍する無し。宋江道ふ、這箇は妨げず、既には你此の如く説く時、你却て憂心を用ひず、我頗る家計有り、只你をして衣笠に食足らしめば便了せん、快活に半世を過さしめん。閻婆道ふ、恁地の時却て是好し、深く押司に謝す、我

【一七】 婆子の言は皆反對をいへるなり、戲談と思へる故、おのれも戯れてかくいへり。
【一八】 老人をおからかひなさるな。

が女兒死して牀上に在り、(一七) 怎地して斷送せん。宋江道ふ、這箇容易なり、我陳三郎の家に去き、一具の棺材を買ひて你に與へ、(一八) 伴作行人入殮する時、我自ら他に分付し來り、我再び十兩の銀子を取りて你的與に結果せん。婆子謝し道ふ、押司、只好し天の未だ明けざる時を趁ひて、(一九) 具の棺材を討め盛了し、鄰舍街坊都て影を見るを要せず。宋江道ふ、也好、你紙筆を取り來れ、我箇の票子を寫し、你的與に去きて取らしめん。閻婆道ふ、票子也事を濟さず、須ち是押司自ら去きて取らば、便ち肯て早早發し來らん。宋江道ふ、也説き得て是なりと。兩箇樓を下り來る。婆子房裏に去きて鎖鑰を拿了し、出て門前に到り、門を把つて鎖了し、(二〇) 鑰匙を帶了す。宋江と閻婆と、兩箇縣前を投して來る。此時天色尙早くして未だ明ならず、縣門却て纔に開く。那の婆子約莫縣門の左側に到るとき、宋江を把つて一把結住し、發喊し叫び道ふ、人を殺すの賊這裏に在る有りと。嚇し得て宋江慌てて一團と做り、連忙に口を掩住して道ふ、叫ぶを要せずと。那裏に掩ひ得て住せん、縣前に幾箇の公を做す的有り、(二一) 走將し擺來す。看る時は宋江なるを認得、便ち勸め道ふ、婆子嘴を閉ぢよ、押司是這般的人ならず、事有らば只好説するを消得よ。閻婆道ふ、他正に是首なり、我がために捉住せよ、同に縣裏に到らん。原來宋江人と爲り最も好し、上下愛敬す、滿縣の

【一七】 如何にして取りおきせん。
【一八】 檢死役人。
【一九】 始末つけん。

【二〇】 かきつけ。
【二一】 かき類。
【二二】 走りよりあつまり來る。
【二三】 人ころし也。

人一箇の他に譲らざる没し、此に因り公を做す的も都て肯て手を下して他を拿らず、又信せず這の婆子の説ふことを。詩有り證と爲す。

好人難有れば皆怜惜し、奸惡災無きも盡く詫憎す。見るべし生平自ら檢すべきを、時に臨みて情義始めて憑るに堪へん。

正に那裏に在りて箇の解救する無し。却て好し唐牛兒一盤子に洗淨的糟蓋を托し、縣前に來りて

趨趣す。正に這の婆子の宋江を 結扭して那

裏に在りて冤屈を叫ぶを見る。唐牛兒是閻婆の

一把宋江を結扭するを見て、昨夜のの一肚子

の鳥氣を想起し來り、便ち盤子を把つて藥を賣

的の老王の凳子上に放在し、鑽將過來して

喝し道ふ、老賊蟲、你甚麼と做て押司を結扭し住するや。婆子道ふ、唐二、你來りて人を打奪し去ら

され、你的償命を要すと。唐牛兒大に怒り、那裏に他の説ふを聽かん、婆子の手を把つて一拆に拆開

し了し、事由を問はず、又五指を開いて閻婆の臉上去只一掌。箇の滿天星を打す。那の婆子 昏

撒し了し、只得手を放つ。宋江脱するを得て、閻裏に往いて一直に走了す。婆子便ち一把し去つて

唐牛兒を結扭し住め、叫び道ふ、宋押司我的の女兒を殺し了す、你却て打奪し去了せしむと。唐牛兒

【一八六】あるさまはる。あきなひ

する也。

【一八七】つかまへて。

【一八八】とび出し。

【一九〇】びしやびしやとたたくな

り。

【一九一】目がくらみ。

【一九二】人こみ。

【一九三】起し。

慌てて道ふ、我那裏に得て知らんや。閻婆叫び道ふ、上下我が替に人を殺すの賊を捉一捉せば則

箇、不る時你們を帶累すべしと。衆の公を做す的只宋江の面皮に礙へられて肯て手を動かさず、唐牛

兒を拿る時、須ち 二箇 擔閣せず、衆人向前し、一箇は婆子を帶住し、三四

箇は唐牛兒を拿住し、他を把つて横に拖き倒に拽き、直に鄆城縣裏に推進

し來る。正に是禍福門無く、惟人自ら召く、麻を披て火を救ふ、焰を惹き身を焼く。畢竟唐牛兒閻婆

に結住せられ、怎地に身を脱する、且つ下回の分解を聽け。

【一九三】みなさま。

【一九四】しあん、ぐづぐづ。

第二十二回

閻婆大に郟城縣を闢がし、朱全義宋公明を釋す

話說、當時衆の做公的、唐牛兒を拿住し、縣裏に解進し來る。知縣殺人的の事有るを聽得て慌忙に出來りて廳に陞る。衆の做公的這の唐牛兒を把りて簇擁して廳前に在り。知縣看る時、只見一箇の婆子跪いて左邊に在り、一箇の漢子跪いて右邊に在り。知縣問道ふ、甚麼の殺人公事ぞ。婆子告道ふ、老身姓は閻、箇の女兒有り、婆惜と喚做す、宋押司に典與して、外宅と做る、昨夜晩間我が女兒と宋江と一處に酒を喫す、這箇の唐牛兒一逕に來り聞き尋ね、叫罵して門を出で、鄰里盡く知る、今早宋江出去り、走了一遭して回りに來り、我が女兒を把つて殺了す、老身結扭して縣前に到る、這の唐二又宋江を把つて打奪し了去る、相公に告ぐ、主と做れ。知縣道ふ、你這厮、怎ぞ敢て兇身を打奪し了せるや。唐牛兒告道ふ、小人前後の因依を知らず、只昨夜去いて宋江を尋ね、碗酒を搗して喫するに因り、這の閻婆に小人を又して出し來らる、今早小人自ら出來りて糟薑を賣る、閻の宋押司に結扭して縣前に在るに遇見す、小人見了して、不合に去いて他を勸む、他便ち走了す、却て他の女兒を殺死するの緣由を知らず。知縣喝道す、胡說、宋江は是箇の君子誠實的人、如何

【一】 外妾。
【二】 つかまへ放さずして。

【三】 做主は私の爲に此事を取扱けと也。

ぞ肯て造次に人を殺さん、這の人命の事、必然你的の身上に在らん、左右那裏に在る。便ち當廳の公吏を喚ぶ。當下轉上せる押司張文遠來り。閻婆宋江の他の女兒を殺了するを告ぐと説ふを見る、正に是我的の表子なり。隨即各人の口詞を取り了り、就ち閻婆の替に、狀子を寫了し、一字案を疊了し、便ち當地方の伴作行人并に坊廂の里正鄰佑一千人等を喚び、閻婆の家に來到し、門を開了し、屍首を取りて登場に檢驗し了するに、身邊に行兇の刀子一把を放着す、當日再三看驗し得るに、是生前項上を刀に勒死せるに係る、衆人登場、了當し、屍首は棺木を把つて盛了、寺院裏に寄放し、一千人を將て帶びて縣裏に到る。知縣却て宋江と最も好し、他を出脱せしめんと要るに心有り、只唐牛兒を把り來りて再三推問す。唐牛兒供して道ふ、小人竝に前後を知らず。知縣道ふ、你這厮、如何ぞ隔夜に他の家に去いて尋問せる、一定你干涉有らん。唐牛兒告げ道ふ、小人一時撞去して碗酒を搗して喫せんとせるのみ。知縣道ふ、胡說、這厮を打て、左右兩邊の虎狼一般の公人、這の唐牛兒を把つて一索に綱翻了し、打つて三五十に到る、前後語言一般なり。知縣明らかに他の情を知らざるを知り、一心宋江を救ふを要す、只他を把り來つて勘問し、且一面の枷を取り來つて釘了せしめ、禁めて牢裏に在く。張文遠廳に上り來り稟して道ふ、然く此の如しと雖も見に刀子有り、是宋江的の

【四】 張文遠の通じたる女なれば我的表子といふ。表子は娘
【五】 訴狀。
【六】 検査し濟まし。
【七】 口供していふ。

歴衣刀なり、必ず去いて宋江を拿へ來りて對問すべし、便ち下落有らん。知縣他に三回五次來り稟され、遮掩し住へず、只得たり人を差し宋江の下處に去いて捉拿するを。宋江已に自ら逃し去り了し、只幾家の鄰人を拿得來つて回話す、兇身宋江在逃して去向を知らずと。張文遠又稟し道ふ、犯人宋江逃去る、他の父親宋太公并に兄弟宋清、見に宋家村に在りて居住す、以て勾進して官に到り、
 袁限比捕し、宋江を跟尋して官に到り理問すべし。知縣本行移を肯てせず、只臆腫と唐牛兒の身上に做在し、日後慢慢地に他を出さんとす。怎ぞ當らん這の張文遠の文案を立主し、閻婆を唆使して廳に上りて只管來告するに。知縣阻當し住へざるを情知し、只得(一)紙の公文を押し、三兩箇の公を做す的を差し、宋家莊に去いて宋太公并に兄弟宋清を勾進せしむ。公人公文を領りし、宋家村の宋太公莊上に來到す。太公出來り、迎接して草廳上に至り、坐定まる、公人文を將出し、太公に遞與して看了せしむ。宋太公道ふ、上下請ふ坐せよ、老漢の告稟を容せ、老漢祖代より農を務め、此の田園を守りて過活す、不孝の子宋江小より忤逆にして、自分の生理を肯せず、去つて吏と做るを要し、百般他を説くも従はず、此に因りて老漢數年前本縣官長の處に他の忤逆を告了し、他の籍を出し了し、老漢戸内の人數に在らず、他自ら縣裏に在りて住居し、老漢は孩兒宋

- 【八】 わけのわかるころ。おちつくところ。
- 【九】 めし取り。
- 【一〇】 日限をなして捕へ、捕に就くまで親兄弟を捕へおく。
- 【一一】 捕縛命令を諸方に出すこと。
- 【一二】 親のいふ事をきかず、本来の生活をせず。
- 【一三】 戸籍を除き。

清と此の荒村に在りて些の田畝を守りて過活す、他と老漢と、水米交り無く、竝に干渉無し、老漢也他の事を做出し來り連累せらるるの便ならざるを恐れ、此に因りて前官手裏に在て告了し、執憑の文帖、此に在りて存照す、老漢取來りて上下をして看せしめん。衆公人都て是宋江と好きの、明らかにかに知道す、這箇は是預め先づ門路を開的、苦死して肯て冤家と做らざるなきを。衆人回説し道ふ、太公既に執憑有らば、把將し來れ、我們看ん、抄して縣裏に去いて回話せん。太公隨即些の雞鷲を宰殺して置酒し、衆人を管待了し、十數兩の銀子を賣發了し、執憑の公文を取出し、衆人をして抄了せしむ。衆公人宋太公に相辭了し、自ら縣に回りに去り、知縣的に話を回し、説道ふ、宋太公三年前に宋江的の籍を出了し、執憑の文書を告了す、見に抄白の此に在る有り、以て勾捉し難し。知縣又是宋江を出脱するを要するのなり、便ち道ふ、既に執憑の公文あり、他又別に親族無し、只一千貫の賞錢を出し、諸處に行移し、海捕捉拿せしむべし、便了せん。那の張三又閻婆を挑唆し、廳上に去いて頭を披し髪を散じ來り告げしめて道ふ、宋江實に是宋清隠藏して家に在き、官に出でしめず、相公如何ぞ老身の與に主と做り、去いて宋江を拿らしめざる。知縣喝し道ふ、他父親已に三年前より他の忤逆を告

- 【一四】 生計世帯全く別。
- 【一五】 父子無干渉の段を、前官に御届致し置き、證據になる書付をここに持居る。
- 【一六】 預め路を設けて何事ありても影響無きやうなし置きたることを知る。
- 【一七】 あたへる也。
- 【一八】 うつしがき。
- 【一九】 拘引。
- 【二〇】 頭髮ふりみだし。

了して官に在り、他の籍を出し了し、見に執憑の公文有りて存照す、如何ぞ他の父親兄弟を奪得來りて比捕せん。閻婆告道ふ、相公、誰か知道せざらん、他孝義黒三郎と叫做さる、この執憑は假のならば、只是相公主と做らば則箇。知縣道ふ、胡說、前官手裏より押する印信公文、如何ぞ是假の事ならん。閻婆廳下に在りて屈を叫び苦を叫び、哽哽咽咽地【三】價に哭し、相公に告げ道ふ、人命大なること天の如し、若肯て老身の與に主と做らざる時、只得【三三】州裏に去いて告狀せん、只是我が女兒死し得て甚だ苦。那の張三又廳に上り來つて他の替に稟し道ふ、相公他の與に行移して人を拿らざる時、這の閻婆【三三】上司に去いて告狀せば、倒て是利害ならん、倘或は來りて提問する時小吏去つて回話し難し。知縣理有るを情知し、只得たり一紙の公文を【三四】押了するを、便ち朱全雷橫二都頭を差し、當廳に發落せしめ、你等多人を帶び、宋家村宋【三五】大戸莊上に去いて犯人宋江を搜捉し來れ。詩有り證と爲す、關せず心事の總て他に由るに、路上何人か折花を怨みん。花の如き婆惜の死を惜むが爲に、【三六】他家は惡冤家と做る。

【三】 價はほどといふが如し。
 【三三】 州は縣を管轄する也、知縣は知州府尹より下也、非違あれば州の責むるところなる。州廳は上司也。
 【三三】 上司に訴へなば事面倒ならん、上司より取調べられれば答辯しがたからん。
 【三四】 わたす。

【三五】 大戸、宮戸といはんが如し。
 【三六】 借はいきにして色つばき也。冤家は仇人なれども、戀の相手をも冤家といふ。邦語にて憎らしい人といふはかはゆき人なるが如し。借冤家は即ち張三なり。惡冤家は眞の仇敵。

朱雷の二都頭公文を領了し、便ち來りて土兵四十餘人を點起し、逕に宋家莊上に遶り來る。宋太公知るを得て、慌忙出來りて迎接す。朱全雷橫二人說道ふ、太公怪む休れ。我們【三七】上司より差遣せらる、蓋し己に由せず、你的の兒子押司、見は何處に在る。宋太公道ふ、兩位の都頭上に在り、我がこの逆子宋江、他と老漢と竝に干渉無し、前官手裏已に他を告開し、見に他を告開了し、見に告ぐるの執憑此に在り、已に宋江と三年多【三八】各戸另籍す、老漢と同一家過活せず、亦會て莊上に回りに來らず。朱全道ふ、然も此の如しと雖も、我們【三九】書に憑り客を請じ、帖を奉じ人を勾す、你莊上に在らずと説ふ、你我們的【四〇】搜一搜し看るを等て、好し去いて話を回さん。便ち土兵三四十人を叫て莊院を圍了せしめ、我自ら前門を把定せん、雷都頭你先づ入り去つて搜せ。雷橫便ち裏面に入進し、莊前莊後搜する一遍、出來りて朱全に對し說道ふ、端的に莊裏に在らず。朱全道ふ、我只是放心し下さず、雷都頭、你衆弟兄と門を把了せよ、我【四一】親自に細細地に搜すこと一遍せん。宋太公道ふ、老漢は是法度を識る的人、如何ぞ敢て藏して莊裏に在かん。朱全道ふ、這箇は是人命的の公事なり、你却て我們を嗔怪し得ざれ。太公道ふ、都頭尊便にせよ、自ら細細地に去つて搜せ。朱全道ふ、雷都頭、你太公を監着して這裏に在り、他をして走動せしむる休れ。朱全自ら莊裏に進

【三七】 上役即知縣。
 【三八】 戸をめぐりめぐりにし籍を別にす。
 【三九】 知縣の命令により人を拘引する也。
 【四〇】 さがし。
 【四一】 自分に。

み、朴刀を把つて倚せて壁邊に在き、門を把つて來り捨てし。走つて佛堂内に入り去り。供牀を把つて拖着て一邊に在き、那の(一)片の地板を掲げ起し來る、板の底下に(一)條の索頭有り、索子の頭を將て只一拽す、銅鈴一聲響き、宋江地窖子裏より鑽將出來す、朱全を見了し、那の一驚を喫す。朱全道ふ、公明哥哥怪む休れ、小弟今來りて你を捉ふ、間當時你最も好し、有る的事、都て相瞞せず、一日酒中に兄長曾て説道す、我家佛座の底下に箇の地窖子あり、上面に三世佛を放看す、佛堂内に(一)片の地板有り蓋着す、上面に供牀を設着す、你些の緊急の事有らば這裏に來りて躲避すべしと。小弟那時聽說し、記して心裏に在り、今日本縣の知縣我と雷横と兩箇を差して來る時、生人の眼目を瞞かんと要るを奈何ともする没し、相公も也兄長を觀るの心有り、只是張三と這

【三】 持佛堂の供物机。

に同じ、敷板也。

【三】 茶の湯家のちいたといふ

【三四】 あな。

の婆子と廳上に在りて發言發語して道ふ、本縣主と做らざる時、定めて州裏に在いて告狀するを要すと。此上に因り、又我兩箇を差はし來つて你的莊上を捜さしむ、我只怕る雷横の執着して人を周弁するを會せざるを、倘或は兄長を見了らば、箇の圓活を做す處没し、此に因りて小弟他を賺して莊前に在り、一逕に自ら來りて兄長と説話す、此地好しと雖も、也是身を安んずるの處にあらず、倘或は人有りて知得來りて這裏に捜着せば、之を如奈何。宋江道ふ、我也自ら這般に尋思す、若是賢兄此の如く周全せずんば、宋江定めて縲紲の厄に遭はん。朱全道ふ、此の如く説ふ休れ、兄長却て何處

に投じ去るが好からん。宋江道ふ、小可尋思するに、三箇の安身の處有り、一は是滄州橫海郡小旋風柴進の莊上、二は乃是青州清風寨小李廣花榮の處、三には是白虎山孔太公の莊上、他兩箇の孩兒有り、長男は毛頭星孔明と叫做し、次子は獨火星孔亮と叫做す、多く曾て縣裏に來りて相會す、那の三處這裏に在りて躊躇し未だ定まらず、知らず何處に投じ去るの好きかを。朱全道ふ、兄長以て作急に尋思す可し、行ふべきを即ち行ふ當し、今晚使ら身を動かす可し、切に遅延して自ら悞る勿れ。宋江道ふ、上下官司の事、全く兄長の維持を望む、金帛の使用は只顧來り取れ。朱全道ふ、這事は放心せよ、都て我が身上に在り、兄長只顧去路を安排せよ。宋江朱全に謝了し、再び地窖子に入り去る。朱全舊に依り、地板を把りて蓋上し、還供牀を將て壓了し、門を開きて朴刀を拿り出來り説道す、真箇に莊裏に在る没し。叫び道ふ、雷都頭、我們只宋太公を拿りて去る如何。雷横宋太公を拿りて去らんと要と説ふを見て尋思す、朱全那人、宋江と最も好し、他怎地顛倒して宋太公を拿るを要する、這話は以定是反説ならん、他若し再び提起せば、我人情を做すを落得せんと。朱全雷横士兵を叫び罷せ、都て草堂上に入り來る。宋太公慌忙置酒し、衆人を管待す。朱全道ふ、酒食を安排せんとする休れ、且つ太公と四郎とを請うて同に本縣裏に到り走一遭せしめん。雷横道ふ、四郎如何ぞ見えざる。宋太公道ふ、老漢他を使て近村に去いて些の農器を打らしめ、莊裏に在らず、宋江那厮、三年已前より這の逆子を把つて戸を告出したし、見に一紙の執憑公文有り此に在りて存照す。朱全道ふ、如何ぞ

説得し過ぎん、我兩個知縣の台旨を奉着し、你父子二人を拿らしむ、自ら縣裏に去いて回話せよ。雷横道ふ、宋都頭、你我が説を聴け、宋押司他罪過を犯す、其中必ず縁故有り、也未だ便ち死罪に該らす、既に然く太公已に執憑公文有れば、是印信官文書に係る、又是假ならざるの、我宋押司日前交往の面を見て、權に且他の些箇を擔負し、只執憑を抄了して回話すれば便了せん。宋全尋思して道ふ、我自ら反説し、他の疑はざるを要すと。宋全道ふ、既に然く兄弟這般に説了せば、我來由没く甚變の人に惡まるるを做さんと。宋太公謝了し道ふ、深く二位の都頭の相觀るを感ずと、隨即酒食を排下し、衆人を犒賞し、二十兩の銀子を將出し、兩位の都頭に送與す。宋全雷横堅執して受けず、把來つて衆人四十箇の士兵に散與し分了せしめ、一張執憑の公文を抄了し、

宋太公に相別れ了り、宋家村を離れ了り、宋雷二位の都頭自ら一行人を引了し、縣に回りに去了す。縣裏の知縣正に陞廳するに値ふ、宋全雷横の回來するを見、便ち縁由を問ふ。兩箇稟し道ふ、莊前莊後四圍の村坊、搜り遍了する二次、其實這箇の人没し、宋太公臥病し牀に在り、動止する能はず、早晚危きに臨まん、宋清は已に前月より外に出でて未だ回らず、此に因り只執憑を把りて抄白して此に在り。知縣道ふ、既に然く此の如きかと、一面本府に申呈し、一面一紙の海捕の文書を動了す。話下に在らず。縣裏に那の一等の宋江と好きの相交の人有り、都て宋江の替に張三の處に去いて説開す。那の張三もまた衆人の面皮に耐へ過さず、況や且婆娘已に死了し、張

【三五】 いひなだめはこす。

三も又平常亦宋江の好處を受く、此に因りて只得罷む。宋全自ら些の錢物を轉め、把りて閻婆に與へて州裏に去いて告狀するを要せざらしむ。この婆子また些の錢物を得了りて奈何ともする没し、只得依允了る。宋全又若干の銀兩を將て、人をして州裏に上り去つて使用せしめ、文書駁將し下來するを要せざらしむ、又知縣の一方主張するを得たり、一千貫の賞錢を出し、行移して一箇の海捕の文書を開了し、只唐牛兒を把つて問ひて箇の五百里外に刺配し、干連する的人は、盡數保放し家に寧んせしむ。這は後話。詩有り證と爲す、

一身狼狽 烟花の爲なり、地窖身を藏すも亦拿る可し。別に臨み叮嚀す好く趨避せよと。髯公端に 朱家に愧ぢず。

且説く、宋江他は是箇の莊農の家、如何ぞ這の地窖子有るや。原來故宋の時、官と爲るは容易、吏と爲るは最も難し、甚と爲的官と爲るは容易なる、皆那時の朝廷奸臣道に當り、讒佞權を専らにし、親に非ずば用ひず、財にあらざれば取らざるに因る、甚の爲に吏と爲るは最も難き、那時押司と爲る的は、但罪責を犯すに、輕きは則ち遠惡軍州に刺配され、重きは則ち家産を抄扎し、殘生の性命を

【三六】 宋江に好く處せられてゐた。
 【三七】 縣よりの申呈書を不當と看する時は州よりは駁回し再調べしむる事あり、然様の事無きやうにしたる也。
 【三八】 わざと凶狀持を逃したる。
 【三九】 烟花は、色事色里。
 【四〇】 朱は古の大俠なり、宋全と其姓同じき故、かく詩に作れり。
 【四一】 家産没收、生命を取らる。

結果了了さる。此を以て預め先づ這般の去處を按排下し身を躲す、又父母を連累するを恐れ、爹娘をして忤逆を告了し、籍冊を出了せしめ、各戸另居し、執憑の公文を給して存照し、相來往せず、却て家私の屋裏に在るを做す、宋の時多く、這般に算する有る。且説く、宋江地窖子より出來り、父親兄弟と商議す、今番是朱全の相覲るにあらずんば、官司を喫すべし、此恩は報を忘る可からず、如今我と兄弟兩箇と且去つて難を逃れん、天憐見すべく、若寛恩大赦に遇はば、那時回り來りて父子相見えん、父親人をして暗暗地に此の金銀を送り去つて朱全に與へ、他を央みて上下に使用し、及び閻婆に些少を資助し、他の上司に去いて告擾するを免れ得ん。太公道ふ、這事你的憂心を用ひず、你自ら兄弟宋清と路に在つて小心せよ、若彼處に到了せば、那裏より箇の托するを得る的人をして(一)封の信を寄せ來れ。當晩弟兄兩箇、包裹を控束し、四更の時分に到り、起來洗漱し罷り、早飯を喫了し、兩箇打扮して身を動かす。宋江白范陽の氈笠兒を戴着し、上に白段子の衫を穿ち、一條の梅紅縦線の縲を繫け、下面には脚絆、多耳の麻鞋、宋清は伴當の打扮を做し、包裹を背了、都て草廳前に出でて父親を拜辭了る。宋太公三人涙を灑ぎ住らす。太公分付し道ふ、你兩箇前程萬里なり、煩惱を得るを休めよ。宋江宋清、却て大小莊客に分付し、小心家を看れ、早晚

- 【四二】 這樣にしたものがあつた。
- 【四三】 拘引されるところであつた。
- 【四四】 梅紅色の縦いと縲。
- 【四五】 きやはんと邦語にいふは此字の音なり。多耳麻鞋は乳の多きわらぢ。
- 【四六】 ともびと。
- 【四七】 途中何事もないうやうに。

勲に太公に伏侍し、飲食缺る有らしむる休れと。弟兄兩箇各一口の腰刀を跨了、都て一條の朴刀を拿了、逕ちに宋家村を出離了り、兩箇路を取り程に登る。正に秋末冬初の天氣に遇着す。但見る、柄柄 菱荷枯れ、葉葉梧桐墜つ。蛩は吟す腐草の中、鷹は落つ平沙の地。細雨楓林濕ひ、霜重くして天氣寒し。是路行の人にあらずんば、怎で諳んせん秋の滋味。話說す宋江弟兄兩箇、數程を行了り、路上に在りて思量し道ふ、我們却つて投遼する兀誰のか是ならん。宋清答道ふ、我只聞く江湖上の人滄州横海郡の柴大官人の名字を傳説す、説ふ他は是太周の皇帝の嫡派の子孫と只曾て拜識せざるも、何ぞ只去いて他に投遼せざる、人都説ふ義に仗り財を疎んじ、專一に天下の好漢に組織し、遭配的人を救助す、是箇の見世的の孟嘗君なりと、我兩箇只他に投遼し去らん。宋江道ふ、我也心裏に是這般に思想す、他我と常常書信來往すと雖も、縁分上無く、曾て會ふを得ず。兩箇商量了し、逕に滄州路上を望み來る。途中免れ得ず山に登り水を涉り府を過ぎ州を衝くを、但凡客商路に在れば早晚安歇す、兩件の事有り、癩碗に喫し、死人牀に睡るを免れ得ず。且問話を把つて提過し、只正話を説かん。宋江弟兄兩箇、則ち一日ならずして滄州の界分に來到し、人に問ひ道ふ、柴大官人の莊は何處に在ると、地名を問了し、一逕に莊前に投じ來り、便ち莊客に問ふ、柴大官人莊上に在りや不。莊客答道ふ、大官人東莊上に在りて租米を收む、

- 【四八】 蓮もかれ。
- 【四九】 かつたいの食つた碗にて食ひ人の死んだ牀に睡るを免れぬ。旅のあはれ也。

莊上に在らず。宋江便ち問ふ、此間より東莊に到る多少の路有りや。莊客道ふ、四十餘里有り。宋江道ふ、何處從り。落路し去る。莊客道ふ、敢て動問せず二位の官人の高姓は。宋江道ふ、我は是

鄆城縣の宋江的便ち是なり。莊客道ふ、是及時雨宋押司ならざる莫き麼。宋江道ふ、便ち是なり。莊客道ふ、大官人時常大名を説き、只相會する能はざるを怨恨す、既には宋押司なる時、小人引去らんと。莊客慌忙して便ち宋江宋清を領了し、逕に東莊に投じ來る、三箇の時辰没くして、早く東莊に來

到す。宋江看る時、端的に好一所の莊院、十分齊整なり。但見る、前に 濶港を迎へ、後は高峯に靠る。數千株の槐柳林を成し、三五處の廳堂客を待つ。屋角を轉じて牛羊地に滿ち、打麥場には鷺鴨羣を成す。

飲饌豪華にして那の孟嘗の食客に賽過し、田園主管、他の程鄭の家僮を數へず。正に是家に餘糧有りて鶏犬飽き、戸に 差役無くして子孫閑

なり。當下莊客便ち道ふ、二位の官人、且此の亭子上に在りて坐一坐せよ、待て小人去つて大官人に通報し、出來りて相接せしめん。宋江道ふ、好し。自ら宋清と山亭上に在り、朴刀を倚せ、腰刀を解し、包裹を歇了し、坐して亭子上に在り。那の莊客入去り、多時ならずして只見る那の(一)座の中間の莊門大に開け、柴大官人三五箇の伴當を引着し、慌忙跑將し出來し、亭子上に宋江と相見る。柴大官人

【五〇】 路にかかり。
【五一】 ひろば。
【五二】 人夫にささるること。

宋江を見了り、拜して地下に在り、口に稱して道ふ、端的に柴進を 想殺す、天幸に今日甚の風か吹得て此に到る、大に平生渴仰の念を慰む、多幸多幸。宋江也拜して地下に在り、答道ふ、宋江疎頑の小吏、今日特に來りて相投す。柴進宋江を扶起し來り、口裏說道ふ、昨夜燈花報じ、今朝喜鵲噪ぐ、想はざりき却て是貴兄來らんとはと、滿臉 笑を堆下し來る。宋江柴進の接し得て意重きを見て心裏甚だ喜び、便ち兄弟宋清を喚び、也來つて相見せしむ。柴進伴當を喝叫し、宋押司の行李を收拾了せしめ、後堂西軒下に在て歇處せしめ、柴進宋江の手を携住し、入つて裏面正廳上に到り、賓主を分つて坐定まる。柴進道ふ、敢て動問せず、聞知す兄長鄆城縣に在りて

【五三】 思ひこがれて居りたり。
【五四】 燈花は燈心に丁子頭の出
來る事、喜鵲、かささぎのな
くこと、共に吉兆なり。
【五五】 十悪は本佛家の説なれどもここにはただ大悪事といふのみ也。

當すと、如何ぞ暇を得て荒村僻處に來到せる。宋江答へ道ふ、久しく大官人の大名を聞き、雷の耳に灌ぐが如し、然く節次に華翰を收得すと雖も、只恨む賤役間無くして相會する能勾はざるを、今日宋江不才にして一件の 出豁没き事を做出し來り、弟兄二人尋思するに安身の處無し、大官人の義に仗り財を疎んずるを想起し、特に來りて投進す。柴進聽罷り笑ひ道ふ、兄長放心せよ、遮莫 十惡の大罪を做下するも、既に弊莊に到る、但憂心を用ひざれ、是柴進の誇口するにあらず、任他捕盜の官軍も敢て正眼兒に小莊を覷着す。宋江便ち閻婆惜を殺す事を把つて一一告訴了す一遍。柴進

笑將起來し、說道ふ、兄長放心せよ、便ち 朝廷的の命官を殺し、府庫的の財物を劫了するも、柴進也敢て藏して莊裏に在りと、説罷りて便ち宋江弟兄兩箇を請ひて洗浴せしめ、隨即兩套の衣服巾幘絲鞋淨襪を將出し、宋江弟兄兩箇をして出浴的舊衣裳に換了せしむ。兩箇浴に洗了し、都て新衣服を穿つ。莊客自ら宋江弟兄的の舊衣裳を把つて歇宿の處に送在す。柴進宋江を邀へ、後堂深處に去つて已に酒食を安排下し了し、便ち宋江を請ひて正面に坐地せしむ、柴進對席す、宋清は宋江在上する有り側首に坐了す。三人坐定まり、十數箇の 近上の莊客あり、并に幾箇の主客あり、(三) 輪替着し盞を把りて伏侍し飲を勸む。柴進再三宋江弟兄に勸む、寛懷幾杯を飲めと。宋江稱謝已ます、酒半酣に至り、三人各曾中朝夕相愛の念を訴ふ、看看天色晚了し、燈燭を點起す、宋江辭し道ふ、酒止まんと。柴進那裏に肯て放さん、直に喫して初更左側に到る。宋江身を起し、去つて 淨手す、柴進一箇の莊客を喚んで、碗燈籠を提げ、宋江を引領し、東廊盡頭の處に去いて淨手せしむ。便ち道ふ我且杯酒を驟けん、(四) 大寬轉して前面廊下に穿出し來り、(五) 俄延せば是着せんと、却て轉じて東廊前面に到る、宋江已に八分の酒有り、(六) 脚步起りし、只顧踏去る、那の廊下一箇の大漢有り、瘡疾を害ひ、那の寒冷に當り住へざるに因り、(七) 歛の火を把つて那裏に在て向ふ。宋江臉

【六三】 淨手、前に出づ。
 【六四】 ぐるりとまはつて。
 【六五】 しばらくせばよからん。
 【六六】 あしもと固からず。
 【六七】 歛字字書に見えず、掀は侍的の。
 【六八】 かかり番に。

を仰着して只顧に踏將し去る、正に 蹴みて火斂の柄上に在り、那の火斂裏の炭火を把つて都て掀げて那の漢の臉上に在り。那漢一驚を喫了し、一身の汗を驚出し來る。那漢 氣將起來し、宋江を把つて 劈曾揪住し、大喝し道ふ、你是 甚麼の鳥人ぞ、敢て來つて我を消遣する。宋江也一驚を喫し、正に 分説し得ず、那の箇の燈籠を提げたる的の莊客、慌忙して叫んで道ふ、無禮を得ざれ、這位は大官人最も 相待つ的の客官なり。那漢道ふ、客官、客官、我初め來る時、也是客官なり、也曾て相待つ的厚し、如今却て莊客の 搬口を聽き、便ち我を疎慢し了す、正に是 人に千日の好無し、花に百日の紅無しと、却て待に宋江を打たんと要す。那の莊客燈籠を掀了、便ち向前して來り勸む、正に勸め開かず、只見る兩三碗の燈籠飛ぶも也似て來る。柴大官人親に趕到り説ふ、我押司に接し着せず、如何ぞ却て這裏に在つて 鬧する。那の莊客便ち火斂を蹴了的の事を把つて説く一遍す。柴進笑つて道ふ、你這位の 奢遮的の押司を認得ざるや。那漢道ふ、(八) 奢遮、奢遮、他敢て鄆城の宋押司に比

手を擧ぐる也、火を移すに用ふる我邦の十能といふが如く、(九) いひわけ。
 【七三】 大事の御客なり。
 【七四】 つげぐち。
 【七五】 俗諺なり。
 【七六】 けんくわ、さわぐ。
 【七七】 えらい押司、前に出づ。
 【七八】 えらいえらいというて宋押司に比べては大したちがひならんと反語的に比し得ざる少些兒といへるなり。

し得ざることを少些見ならん。柴進大に笑つて道ふ、大漢、你宋押司を認めるや不。那漢道ふ、我曾て認め得ずと雖も、江湖上久しく聞く他は是箇の及時雨の宋公明、且又義に仗り財を疎んじ、危を扶け困を濟ふ、是箇の天下に名を聞く的好漢なり。柴進問道ふ、如何にして他は是天下名を聞く的好漢なるを見的たる。那漢道ふ、却纔説了せず、他は便ち是真の大丈夫、頭有り、尾有り、始有り、終有り、我如今只病の好き時を等ちて便ち去いて他に投進せん。柴進道ふ、你他を見るを要するや。

那漢道ふ、我知るべし他を見んと要するを

哩。柴進道ふ、大漢、遠ければ便ち十萬八千里、近くは便ち只面前に在り。柴進便ち道ふ、

此位は便ち是及時雨宋公明なり。那漢道ふ、眞箇なりや也不是なりや。宋江道ふ、小可は便ち

是宋江。那漢睛を定めて看了看し、頭を納して便ち拜し、說道ふ、我是夢裏にあらざる麼、兄長と

相見んとは。宋江道ふ、何の故に此の如く錯愛する。那漢道ふ、却纔は甚だは無禮、萬望罪を恕

されよ、眼有りて泰山を識らずと、跪いて地下に在り、那裏に肯て起來らん。宋江慌忙扶住して道ふ、

足下高姓大名は。柴進那漢を指着して、他の姓名竝に甚の諱字を説出す。分教有り、山中の猛虎も、

見る時魄散じ魂離れ、林下の強人も、撞着して心驚き膽裂く。正に是説開すれば星月も光彩無く、道

【七】 哩字俗のおき字として、

焉矣等の字の如く讀ますして可なり。

【八】 俗諺。

【九】 頭をさげて也、納は收納の納にあらず、押捺の捺の字

の代りと心得べし。下に捺しつけるやうにする也。

【一〇】 さまでならぬものを御愛し下さるの意味にて、錯の字謙遜的にいふ習なり。

破すれば江山水倒まに流る。畢竟柴大官人、説出す那漢還は何人ぞ。且つ下回の分解を聴け。

第二十三回

横海郡に柴進賓を留め、景陽岡に武松虎を打つ

話說す、宋江一杯の酒を躑るに因り、去つて淨手し了り、廊下を轉出し來り、火鉢の柄を蹴了し、那漢の焦燥を引得て、跳將起來し、就ち宋江を打たんと欲要す。柴進趕將出來し、偶宋押司と叫起し、此に因つて姓名を露はし來る。那漢是宋江なるを聽得、跪いて地下に在り、那裏に肯て起さん、說道す、小人眼有りて泰山を識らず、一時見長を冒瀆す、望むらくは恕罪を乞はん。宋江那漢を扶起し問道ふ、足下是誰ぞ高姓大名は。柴進指着して道ふ、這人は是清河縣の人氏、姓は武、名は松、排行第二、今此間に在る一年なり。宋江道ふ、江湖上多く武二郎の名字を説ふを聞く、期せず今日却て這裏に在りて相會せんとは、多幸多幸。柴進道ふ、偶然豪傑相聚まる、實に是得難し、就ち請ふ同一席と做り説話せん。宋江大に喜び、武松的の手を携住し、一同後堂席上に到り、便ち宋清を喚びて武松と相見せしむ。柴進便ち武松を邀へて坐地せしめ、宋江連忙に他に譲る一回、上面に在りて坐せしむ。武松那裏に肯て坐せん、謙了する半晌、武松第三位に坐了す。柴進再び杯盤を整へしめ、來つて三人に痛飲を勸む。宋江燈下に在り、那の武松を看る時、果然是一条の好漢なり。但見る、身軀凜凜、相貌堂堂。一雙の眼光は寒星を射り、兩鬢の眉は渾べて漆を刷するが如し。胸脯横潤、

萬夫敵し難きの威風あり、語話軒昂、千丈凌雲の志氣を吐く。心雄膽大、天を撼かす獅子の雲端より下るが如く、骨健にして筋強、地を搖かす貔貅の座上に臨むが如し。同じきが如し天上の降魔の主、眞に是人間の太歳神。

當下宋江、武松の這の(一)表の人物を看了し、心中甚だ喜び、便ち武松に問ひて道ふ、二郎何に因つて此に在る。武松答道ふ、小弟清河縣に在り、酒後酔了するに因つて本處の(二)機密と相争ふ、一時間怒り起り、只一拳にして那厮を打得て昏沈す、小弟只道ふ、他死了すと。此に因りて一逕地に逃來り、大官人の處に投進し、災を躲け難を避く、

- 【一】 刑事係、探偵。
- 【二】 おこりのふるひ。

【三】 錢をつかはせる。

今已に一年有餘、後來打聽し得たり、那厮却て曾て死せず、救ひ得て活了すと、今正に郷に回りに去つて哥哥を尋ねんと欲す、想はざりき瘡疾に染患し、勾く身を動かし回去る能はず、却纔正に(三)寒冷を發し、那の廊下に在りて火に向ふ、見長に斂柄を蹴了され、那の一驚を喫了し、一身の冷汗を驚出す、覺え得たり這病の好了するを。宋江聽了りて大に喜ぶ、當夜飲んで三更に至り、酒罷む。宋江就て武松を留めて西軒下に在り、一處に安歇するを做す。次日起來す、柴進席面を安排し、羊を殺し猪を宰し、宋江を管待す、話下に在らず。數日を過了し、宋江些の銀兩を將出し來り、武松が與に衣裳を做さんとす。柴進知道し、那裏に肯て他の壞錢を要せん、自ら一箱の段疋紬絹を取出し、門下自ら針工有り、便ち三人の體に稱ふ衣裳を做ら

しむ。説話するの柴進何に因つて武松を喜ばざる。原來武松初め來りて柴進に投進する時、也一般に接納管待す、次後莊上に在りて、但酒を喫醉し了す、性氣剛にして、莊客些の顧管し到らざる處有れば、他便ち拳を下して他們を打つを要す、此に因りて滿莊裏の莊客一箇の他を好しと道ふ没く、衆人只是他を嫌ふ、都て柴進面前に去いて他の許多の不是の處を告訴す、柴進然く他を趕はずと雖も、只是他を相待し得て慢る、却て宋江他を帶挈して一處に酒を飲み相陪す、武松の前病都て發せず、宋江に相伴ひて住了する十數日、武松郷を思ひ、清河縣に回りにて哥哥を看望するを要す。柴進宋江兩箇都て他を留め再び住むる幾時、武松道ふ、小弟的哥哥、多時信息を通せず、此に因つて去つて他を望まんと要す。宋江道ふ、實に是二郎去かんと要るならば、敢て苦留せず、如若間を得る時、再來相會する幾時せよ。武松相謝し了す。宋江柴進些の金銀を取出し武松に送與す。武松謝し道ふ、實に是多多大官人を相擾し了す、武松包裹を縛了し、哨棒を捨て了し、行かんと要す。柴進又酒食を治し路を送る。武松一領の、新納の紅袖襖を穿了し、箇の白范陽の氈笠兒を戴着し、包裹を背上し、桿棒を提げ、相辭し了りて便ち行く。宋江道ふ、賢弟少らく等一等せよ。回りにて自己房内に到り、些の銀兩を取了し、趕ひ出でて莊門前に到り來り、説道ふ、我兄弟を送ること一程せん。宋江と兄弟宋清と兩箇武松を送る、他の柴大官人を辭了するを待ち、宋江也道ふ、大官人、暫く別れ了りて

【四】説話的はさてといふほどの意なり。

【五】新につくりたる紅袖のわたいれ。

便ち來らん。三箇柴進の東莊を離了して五七里の路を行了る。武松別を作して道ふ、尊兄遠了す、請ふ回れ、柴大官人必然專望せん。宋江道ふ、何ぞ再び幾歩を送るを妨げん。路上些の閑話を説き、覺えず又三二里を過了。武松宋江を挽住して説道ふ、尊兄必ずしも遠く送らざれ、常言に道ふ、君を送る千里なるも終に一別すべしと。宋江指着し道ふ、我が再び行く幾歩なるを容れよ、兀那官道上に箇の小酒店あり、我三鍾を喫了りて別を作さん。三箇酒店裏に來到し、宋江上首に坐了し、武松哨棒を倚せ、下席に坐了す、宋清横領に坐定す、便ち酒保をして酒を打し來らしめ、且些の盤饌菓品菜蔬の類を買ひ、都て搬來して擺して卓子上に在く。三箇人幾杯を飲了す、看看紅日西に平らかなり。武松便ち道ふ、天色將に晚れんとす、哥哥武二を棄てざる時、此に就て武二の四拜を受けよ、拜して義兄と爲さん。宋江大に喜ぶ。武松頭を納して拜了四拜す。宋江宋清をして身邊より一錠十兩の銀子取出し、武松に送與す、武松那里に肯て受けん、説道ふ、哥哥客中自ら盤費用ひん。宋江道ふ、賢弟必ずしも多慮せざれ、你若し推却せば、我便ち你を認めて兄弟と做さじ。武松只得拜受し了り、縹袋裏に收放す。宋江些の碎銀子を取り、酒錢を還了す。武松哨棒を拿了し、三箇酒店前に出來りて別を作す。武松涙を墮し、拜辭し了りて自ら去る。宋江宋清と立つて酒店門前に在り、武松を望みて見えず、方纔に身を轉じ回來す。行く五里路頭に到らず、只見柴大官人馬に騎着し、背後に兩匹の空馬を索着し來り接す。宋江望見し了り

【六】朋卷。

て大に喜び、一同馬に上り、莊上に回り來り、馬を下り、請うて後堂に入りて飲酒す。宋江弟兄兩箇此より只柴大官人莊上に在り。話兩頭に分る。只説く、武松宋江と分別してよりの後、當晩客店に投じて歇了し、次日早起し來りて火を打し、飯を喫了し、房錢を還了し、包裹を拴束し、哨棒を提了し、便ち走りて路に上る。尋思して道ふ、江湖上只及時雨宋公明を説ふを聞く、果然虚しからず、這般の弟兄を結識し得たる、也枉げずと。武松路上に在りて幾日を行たり、陽穀縣の地に來到す、此は縣治を去る還遠く、當日晌午の時分、走得て肚中饑渴す、望見するに前面一箇の酒店あり、一面の招旗を挑着して門前に在り、上頭に五箇の字を寫着して道ふ、三碗岡を過ぎすと。武松入つて裏面に到りて坐下し、哨棒を把つて倚了、叫び道ふ、主人家、快く酒を把りて來りて喫せしめよ。只見る店主主人三隻の碗、一雙の筋、一碟の熟菜を把つて武松の面前に放在し、滿滿一碗の酒を篩ぎ來る。武松碗を拿起し、一飲して盡し、叫道ふ、這酒好牛氣力有り、主人家、肚を飽かす的有らば些を買ひて酒を喫せん。酒家道ふ、只熟牛肉有り。武松道ふ、好的、二三斤を切り來り喫せしめよ。酒店家裏面に去き、二斤の熟牛肉を切出し、一大盤子と做し將來りて武松の面前に放在し、隨即再び一碗の酒を篩ぐ。武松喫了し道ふ、好酒なりと。又一碗を篩下す。恰も好し三碗の酒を喫了す、再び也來り篩がす。武松卓子を敲着し、叫び道ふ、主人家怎的來り酒を篩がざる。酒家道ふ、客官肉を要せば便ち添へ來らん。武松道ふ、我

- 【七】 用心棒。
- 【八】 また、徒爾ならず。
- 【九】 かんげんの旗。

也酒を要す、也再び些の肉を切り來れ。酒家道ふ、肉は便ち切來りて客官に添與して喫せしめん、酒は却て添了せざらん。武松道ふ、却て又 作怪なりと。便ち主人家に問ひ道ふ、你如何ぞ肯て酒を賣りて我に與へて喫せしめざる。酒家道ふ、客官你我が門前の招旗の上面を見るべし、明明に寫し道ふ、三碗岡を過ぎすと。武松道ふ、怎地三碗岡を過ぎすと喚做す。酒家道ふ、俺家的の酒は是 村酒なりと雖も、却て 老酒的の滋味に比す、但凡そ客人我が店中に來りて三碗を喫了する是便ち酔了し、前面的の山岡を過ぎ得て去らず、此に因つて三碗岡を過ぎすと喚做す、若是 過往の客人此に到り、只三碗を喫して更に再び問はず。武松笑ひ道ふ、原來恁地ならば、我却て三碗を喫了して、如何ぞ酔はざる。酒家道ふ、我が這の酒は透瓶香と喚做し、又出門倒と喚做す、初め口に入る時は、醇醞にして喫するに好し、少刻にして便ち倒る。武松道ふ、胡説を要する休れ、沒地に你に 錢を還さざらんや、再び三碗を篩ぎ來りて我に喫せしめよ。酒家武松の全然 動かざるを見て又三碗を篩ぐ。武松喫し道ふ、端的に好酒なり、主人家、我一碗を喫せば你に一碗の錢を還さん、只顧篩ぎ來れ。酒家道ふ、客官只管飲むを要する休れ、這酒端的に人を酔倒するを要す、藥の醫する沒し。武松道ふ、胡鳥説を得る休れ、便

- 【一〇】 をかしい。
- 【一一】 あな酒。
- 【一二】 老酒は古酒の義なり、轉じて有名の佳酒。
- 【一三】 たび人。
- 【一四】 錢をやらぬことは無いから。
- 【一五】 酔はぬ。
- 【一六】 なに、くそ下らぬことをいふな。

ち是你 蒙汗薬を使ひて裏面に在くも、我も也鼻子有り。店家他に 發話せられ過ばず、一連又三碗を篩ぎ了る。武松道ふ、肉も便ち再二斤を把り來り喫せしめよ。酒家又二斤の熟牛肉を切了し、再び三碗の酒を篩ぎ了る。武松喫し得て口滑し、只顧喫するを要し、身邊去り些の碎銀子を取出し、叫び道ふ、主人家、你來りて我が銀子を看よ、你に酒肉の錢を還して勾るや麼や。酒家看了して道ふ、餘有り、還些の 貼錢有り你に與へん。武松道ふ、你的貼錢を要せず、只酒を將來りて篩げ。酒家道ふ、客官、你酒を喫せんとする時は、(二〇) 還五六碗の酒有る哩、只怕る你的喫し的ざるを。武松道ふ、就ち五六碗多有る時、你盡數篩將來れ。酒家道ふ、你這の(二一)條の長漢、倘或は醉倒し了る時、怎んぞ你を扶得て住へん。武松答道ふ、你的扶的を要せば好漢と算せじ。酒家那裏に肯て酒を將ち來りて篩がん。武松焦躁し道ふ、我又你的を白喫せざる的、老爹の性發するを引き、通て你的の屋裏をして粉砕せしめ、你的這の 烏店子把つて倒翻轉し來らしむる休れ。酒家道ふ、這厮醉了す、(二二) 他を惹く休れと、再六碗の酒を篩了、武松に與へて喫了せしむ。前後共に十五碗を喫了し、哨棒を縛り、身を立起し來り道ふ、我却て又會て醉はずと、門前に走出し來り、笑ひ道ふ、三碗岡を過ぎすと説はず、と手に哨棒を提げて便ち走らんとす。酒家赶ひ出來りて叫び道ふ、客官那裏に

- 【一七】 しびれぐすりを入れ置く 酒だけあるが。
- 【一八】 とも我も喫知らん。
- 【一九】 物言ひされてかなはず。
- 【二〇】 つり錢。
- 【二一】 つり錢の分が五六碗分の
- 【二二】 相手にするな。
- 【二三】 酒だけあるが。
- 【二四】 おれさまの腹立をひき。
- 【二五】 くそ屋臺骨をひつくりかへす。

去く。武松立住し了し問道ふ、我を叫びて甚麼と做す、我又你的酒錢を少かず、我を喚ぶは怎地ぞ。酒家叫び道ふ、我是好意なり、你且回りて我家に來り、(二四) 官司の榜文を抄白せるを看よ。武松道ふ、甚麼の榜文ぞ。酒家道ふ、如今前面の景陽岡上に(二五) 隻の 吊睛白額の大蟲有り、晚了すれば出來りて人を傷ふ、三二十條の大漢の性命を壞了す、官司如今獵戸に 杖限して擒捉せしむ、(二六) 發落して岡子路口に多く榜文有り、往來の客人をして夥を結び隊を成し、巳午未の時辰に干て岡を過ぎしめ、其餘の寅卯申酉戌亥の六箇の時辰は岡を過ぐるを許さず、兼單身の客人は、務めて伴を等も夥を結びて而して過ぐるを要す。這の早晚正に是未の末、申の初の時分なり、我你的走くこと都て人に問はずして枉げて自家の性命を送了するを見る、如かず我が此の間に就て歇了、明日を等ちて慢慢三二十人を湊め、一齊に好し岡子を過ぐるに。武松聽了して笑つて道ふ、我は是清河縣の人氏なり、這の景陽岡上、少くも也、一二十遭を走過了了す、幾時か大蟲有りと説ふを見ん、你這般の 烏話を説き來りて我を嚇す休れ、我便ち大蟲有るも我また怕れず。酒家道ふ、我是好意你を救ふ、你信せざる時進來して官司の榜文を看よ。武松道ふ、你 烏子聲す。便ち真箇に虎有るも爺也怕れず、你我を留めて家裏に在りて歇ましめ、半夜三更に我財を謀り我が性命を害するに

- 【二四】 おかみのおふれを寫せる るといふことで。緊促するをこらん。
- 【二五】 吊睛白額前に出づ。老大
- 【二六】 くそばなし。
- 【二七】 くそばか聲。

あらざる莫きや、却て鳥大蟲を把つて我を誑嚇する。酒家道ふ、你看るや、我是一片の好心、反つて悪意と做し、倒つて你的恁地きを落得す、你我を信せざる時、請ふ【三〇】尊便に自ら行け。正に是、前車倒了る千千輛、後車過了亦然の如し。分明に指與す平川の路、却て忠言を把つて悪言に當つ。那の酒店裏の主人、頭を搖着して自ら店裏に進み去了す。この武松哨棒を提了し、大着歩して自ら景陽岡を過ぎ来る。約そ四五里の路を行き了り、來りて岡子の下に到る、一大樹の皮を刮去了して一片白く、上に兩行の字を寫すを見る。武松也頗る幾字を識る、頭を擡げ看る時、上面寫し道ふ、近ごろ景陽岡の大蟲人を傷つくるに因り、但過往の客商有らば、己午未の三箇の時辰に於て夥を結び隊を成して岡を過ぐべし、請ふ自ら憚る勿れ。武松看了して笑ひ道ふ、這は是酒家【三〇】の詭詐、那等の客人を驚嚇し、便ち那厮の家裏に去いて宿歇せしむるな

【三〇】 御隨意においでなされ。
【三一】 縣の印のある張出し。

らん、我却て甚麼鳥怕れんと、横に哨棒を拖着し、便ち岡子に上り来る。那時已に申牌の時分有り、這の(一)輪の紅日厭厭地に相傍ひて山を下る。武松酒興に乗着し、只管に岡子に走上来る。半里多路に到らず、一箇の敗落する的山神廟を見る、行いて廟前に到る、這の廟門上に一張の【三一】印信榜文を貼着せるを見る。武松脚を住了して讀む時、上面に寫し道ふ、陽穀縣示す、景陽岡上新に一隻の大蟲有りて人命を傷害する爲に、見今各郷の里正并に獵戶人等に杖限して行捕せしむれども未だ獲ず、如過往の客商人等有らば、己午未三箇の時辰に於て伴を結

び岡を過ぐ可し、其餘の時分及び單身の客人は岡を過ぐるを許さず、恐らくは性命を傷害せられん、各宜しく知悉すべし。

武松印信榜文を讀了し、方に【三二】端的に虎有るを知る。待に身を轉じて再び酒店裏に回り來らんと欲す。尋思し道ふ、我回り去る時、他に恥笑せ喚るべし是好漢ならずと、以て轉じ去り難し。【三三】存想し了る一回、說道ふ、甚麼の鳥を怕れん、且只顧上去して恁地を看ん。武松正に走く、看看酒湧き上り來る、便ち甕笠兒を把つて背ひて脊梁上に在き、哨棒を將て縮りて肋下に在き、一歩歩那の岡子に上り來り、頭を回して這の天色を看る時、漸漸【三三】地に墜下り去了す。此時正に是十月間の天氣、日短く夜長く、容易に得て晩る。武松自言自説

【三二】 ほんとい。
【三三】 かんがへる。
【三四】 むなもとをあげ。
【三五】 てらてら光る。
【三六】 ひつくりかへし。

して道ふ、那ぞ甚麼の大蟲を得ん、人自ら怕了して敢て山に上らざるのみと。武松走了する一直、酒力發作して、焦熱し起來す、一隻手に哨棒を提着し、一隻手に【三六】胸膛前を把つて袒開し、跟踉踉と、直に亂樹林を奔過し來る、一塊の【三七】光擡擡たる大靑石を見、那の哨棒を把つて倚せて一邊に在き、身體を【三八】放翻し、却て待に睡らんと要。只見一陣の狂風を發起し來る。古人四句の詩有り、單に那風を道ふ、

形無く影無く人の懐に透る、四季能く萬物を吹いて開く。樹に就て黄葉を撮將し去り、山に入り

て白雲を推出し来る。

原來但凡そ世上、雲生ずる龍に従ひ、風の生ずる虎に従ふ、那の一陣の風過ぐる處、只聽得たり、亂樹背後、撲地一聲、一隻の吊睛白額の大蟲を跳出し来る。武松見了りて阿呀と叫聲し、青石上より翻將下來し、便ち那の(一)條の哨棒を拿つて手裏に在き、青石の邊に閃在す。那箇の大蟲、又饑る又渴す。兩隻の爪を把つて地下に在り、略按一按し、身と和に上を望んで一撲し、半空裏より攔將し下來す。武松那に一驚せられ、酒都て冷汗と做りて出たす。説ふ時遅く、武松大蟲の撲し来るを見て、只一閃閃して大蟲の背後に在り。那の大蟲背後に人を看るは最も難し、便ち前爪を把つて搭して地下に在り、

- 【三七】 ひらりと立つ。
- 【三八】 地をおさへるやうに脚に力を入るるなり。
- 【三九】 とび上りて空中より飛びかかりくる也。
- 【四〇】 ひらりと身をかけし。
- 【四一】 地をおさへ。
- 【四二】 後足ではれあげる。
- 【四三】 身をかけし。
- 【四四】 ふりてひつげたく。
- 【四五】 前足、後足、尾の働也。
- 【四六】 兜は一寸とどまる也。

腰胯を把つて一掀掀將起來す。武松只一躲躲して一邊に在り。大蟲他を掀し着せざるを見て、吼ゆる一聲、却て半天裏に箇の霹靂を起すに似たり、振り得て那の山岡も也動く、這の鐵棒也似たる虎尾を把つて、倒さまに堅起し來り、只一剪す。武松却て又閃して一邊に在り。原來那の大蟲の人を拿る、只是一撲、一掀、一剪なり、三般提し着せざる時、氣性先自ら一半没し、那の大蟲又剪し着せず、再び吼ゆる一聲、一兜兜將し回り來る。武松那の大蟲の復身を翻し回り來るを見て、雙手に哨棒を輪起し、平生の氣力を盡し、只一棒半空より劈將下し來る、只聽得たり一聲の響、簌簌地として、那の樹を將て、枝を連ね葉を帯びて劈臉に打將下來す。睛を定め看る時、一棒大蟲を劈し着せず、原來打つ急了し、正に打つて枯樹上に在り、那の(一)條哨棒を把つて打つて兩截と做し、只一半を拿得て手裏に在り。那の大蟲咆哮して性發起し來り、又只一撲に撲將し來る。武松又只一跳し、却て退き了る十步遠し、那の大蟲却て好し兩隻の前爪を把つて武松の面前に搭在す。武松半截の棒を將つて一邊に丟在し、兩隻手勢に就いて大蟲の頂の花皮を把つて臍踏地に揪住し、一按按將下來す。那の隻の大蟲急に拵扎せんと要るも、武松に氣力を盡して納定せらる、那裏に肯て半點兒の鬆寬を放さん。武松隻脚を把つて大蟲面門上眼睛裏を望み只顧亂踢す。那の大蟲咆哮し起來す、身底下を把つて兩堆の黃泥を爬起し、一箇の土坑を做了す。武松那の大蟲の嘴を把つて直に黃泥坑裏に按下し去る、那の大蟲武松に奈何し得られ、些の氣力没し、武松左手を把つて緊緊地に頂花皮を揪住し、右手を偷出し來り、鐵鎚般の大

- 【三七】 ざざざつとして。
- 【三八】 ばらたち。
- 【三九】 あたまのまたら毛のところをしっかりとつかみ、おさへつけ。
- 【四〇】 おさへつけ、捺定也。
- 【四一】 ゆるみをゆるさぬ。
- 【四二】 身の下を。
- 【四三】 あな。
- 【四四】 きびしく。
- 【四五】 今迄は兩手にて捺へ居しを今片手をばつしたるを偷出と面白く云ひし也。
- 【四六】 鐵鎚の如き大きさの。

小の拳頭を提起し、平生の力を盡し、只顧に打つ、打得て五七十拳、那の大蟲眼裏、口裏、鼻子裏、

耳朶裏より都て鮮血を迸出し來る、武松平昔の神威を儘し、胸中の武藝に仗り、半歇兒にして大蟲を把つて打つて一堆と做す、却て一箇の錦布袋を攔着するに似たり。一篇の古風有り、單に景陽岡に武松虎を打つを道ふ。

景陽岡頭風正に狂ひ、萬里の陰雲月光霾し。目に觸る晚霞竹藪に掛り、人を侵す冷霧穹蒼に瀾る。忽ち聞く一聲霹靂の響、山腰飛出す獸中の王。頭を上げ踴躍して牙爪を逞しくす、麋鹿之屬皆奔忙す。精河の壯士酒未だ醒めず、岡頭獨坐して忙はしく相迎ふ。上下人を尋ねて虎饑渴す、一掀一撲何ぞ猙獰なる。虎來つて人を撲つ山の倒るるに似たり、人往いて虎を迎ふ巖の傾くが如し。臂腕落つる時飛砲墜ち、爪牙爬く處泥坑と成る。拳頭脚尖雨の如く點じ、淋漓として

【五七】 しばらくにして。
【五八】 錦の袋をおしつけたる。
【五九】 攔は撃つなり、遮る也。
【六〇】 兩手眞紅に染まる。
【六一】 飯くふほどの間も無く。

【六二】 諫字恐らくは誤なり、義をなます。金本に刺に作る、あまし得てなり。ただ氣息あるのみとなりたる也。
【六三】 ぼうきれ、棒也。

兩手猩紅染む。腥風血雨松林に滿ち、散亂する毛鬚山に墜らて奄ふ。近く看れば千鈎勢餘り有り、遠く觀れば八面威風斂まる。身は野草に横たはつて錦斑銷し、雙睛を緊閉して光閃せず。當下景陽岡上那の(一)隻の猛虎、武松に頓飯の間没くして一頓拳脚に打得られ、那の大蟲動擲し得ず、(二)諫し得て口裏兀自氣喘ぐのみ。武松手を放ち了し、松樹の邊に來り、那の打折的の棒槌を尋ね、拿つて手裏に在り、只大蟲の死せざるを怕れ、棒槌を把つて又打了する一回、那の大蟲氣都

て沒了。武松再尋思し道ふ、我就地に這の死大蟲を拖得て岡子を下り去らんと、血泊裏に就て雙手に來り提ぐる時、那裏に捉得て動かさん、原來氣力を使ひ盡し了り、手脚都て蘇軟了了す。武松再び青石に來り、坐了する半歇、尋思して道ふ、天色看看黑了了、倘或は又一隻の大蟲を跳出し來る時、却て怎地他に闘ひ得て過たん、且掙扎して岡子を下り去り、明早却て來つて理會せんと、石頭邊に就て氈笠兒を尋了し、亂樹林邊を轉過し、一步步岡子を捱下し來る。走くこと半里多路に到らず、只見る枯草叢中より兩隻の大蟲を鑽出し來る、武松道ふ、阿呀、我今番罷了すと。只見る那の兩箇の大蟲、黑影裏に於て直立起來す。武松睛を定めて看る時、却て是兩箇の人、虎皮を把つて縫ひて衣裳と做し、緊緊と

【六四】 血の海の中。
【六五】 手も脚も綿のやうになつたといふに同じ。
【六六】 今度はおしまひだ。
【六七】 やみの中で。
【六八】 緋はしめつける也。

【六九】 五本爪の如き者。
【七〇】 惣律獸猛、前に出たる早地惣律は即此の惣律、支那にて虎豹同様猛きものとなし居る也。
【七一】 七八人とられた。

身上に在り、那の兩箇人手裏に各一條の五股叉を拿着す。武松を見了して一驚を喫し道ふ、你、那人、(一)惣律の心、豹子の肝、獅子の腿を喫了し、膽却て身軀を包着するも、如何ぞ敢て獨自一箇、昏黑夜を將て、又器械没く、岡子を走過し來るや、你是人か鬼か。武松道ふ、你們嶺に上り來りて甚麼を做す。兩箇の獵戸失驚し道ふ、你兀自知らざる哩、如今景陽岡上一隻の極大の大蟲有り、昨夜出來りて人を傷く、只我門獵戸も也。七八箇を折了す、過往の客人は其數を知らず、都て這の畜

生に喫了せらる。本縣の知縣、當郷の里正と我等獵戸人和に、着落して捕捉せしむ。那の業畜勢大にして近づき難し、誰か敢て向前せん、我等他の爲に正に多少の限棒を喫了するを知らず、只他を捉へ得ず、今夜又我兩箇の捕獵に該り、十數箇の郷夫と此に在り、上上下下、高弓藥箭を放了して他を等ち、正に這裏に在りて埋伏す、却て你の大刺刺地に岡子上より走將下來するを見、我兩箇一驚を喫了す、你却て正に是甚人ぞ、曾て大蟲を見る麼。武松道ふ、我は是清河縣の人氏、姓は武、排行は第二、却纔岡子上亂樹林の邊に、正に那の大蟲に撞見し、我に一頓の拳脚に打死し了らる。兩箇の獵戸聽得て痴呆了し、說道ふ、怕らくば、這話沒からん。武松道ふ、你信せざる時、只看よ我が身上を、兀自血跡有り。兩箇道ふ、怎地打來る。武松那の大蟲を打つ、的の本事を把つて、再説く一遍す。獵戸聽了り、又驚き又喜び、那の十箇の郷夫を叫擺び來る。只見る這の十箇の郷夫、都鋼叉、毛氈、踏弩、刀、鎗を拏着し、隨即擺まり來る。武松問道ふ、他們衆人、如何ぞ你兩箇に隨着して山に上らざる。獵戸便ち道ふ、便ち是那の畜生利害、他們如何を敢て上來せん。一夥十數箇人、都て面前に在り、兩箇の獵戸武松大蟲を打殺する、的の事を把つて衆人に説向す、衆人肯て信せず。武松道ふ、你衆人信せざる時、

- 【七二】 申渡し。
- 【七三】 業畜生といふに同じ。
- 【七四】 期限におくれて罰を受け
- 【七五】 高弓藥箭は獸觸るれば機發し弓力にて毒箭の出づるや
- 【七六】 踏弩は足ふみかけて弦をひく大強力の弩也。
- 【七七】 うしたる強なり。
- 【七八】 大手をふり平氣で。
- 【七九】 うそでせう。

我你と去いて看ば便了せん。衆人身邊に都て、火刀火石有り、隨即火を發出し來り、五七箇の火把を點起し、衆人都て武松に跟着し、一同再び岡子上り來り、那の大蟲の一堆兒と做りて死して那裏に在るを見す。衆人見了りて大に喜び、先づ一箇をして去いて本縣里正并に、該管上戸に報知せしむ。這裏の五七箇の郷夫、自ら大蟲を把つて縛了し、岡子を擡下し來り、嶺下に到り得、早く七八十人有り、都て、關將し來り、先づ死大蟲を把つて擡げて前面に在り、一乘の兜轎を將て武松を擡了し、逕ちに本處の一箇の上戸の家に投じ來る。那の上戸の里正、都て莊前に在りて迎接す。這の大蟲を把つて扛きて草廳上に到る。却て本郷の上戸、本郷の獵戸三二十人、都て來りて武松を相探す。衆人間道ふ、壯士高姓大名、貴郷は何の處ぞ。武松道ふ、小人は是此間の鄰郡清河縣の人氏、姓は武、名は松、排行第二なり、滄州より郷に回りに因り、昨晚岡子の那邊の酒店に在りて喫し得て大醉し、岡子上り來り、正に這の畜生に撞見すと、那の虎を打つ、的の身分拳脚を把つて細説し了る一遍す。衆上戸道ふ、眞に乃ち英雄好漢と、衆獵戸、先づ野味を打して將來し、武松の與に杯を把らしむ。武松大蟲を打ちて困乏するに因り、睡らんと要。大戸便ち莊客をして客房を打併せしめ、且武松をして歇息せしむ。天明に到り、上戸先づ人をして縣裏に去いて報知

- 【八二】 火うち鎌、火うち石。
- 【八三】 該管上戸は其村にてのよき家。
- 【八四】 さわぎ立ち。
- 【八五】 かご、上蓋無きならん。
- 【八六】 原文戸上に上字を脱す。
- 【八七】 身のあつかひ手足のけたらき。
- 【八八】 野獸肉。

せしめ、一面に(一)具の虎牀を合し、安排端正にして縣裏に迎送し去る。天明に武松起來し、洗漱罷る、衆多の上戸、一控の羊を牽き、一擔の酒を挑ひ、都て廳前に在りて伺候す。武松衣裳を穿了し、巾幘を整頓し、出でて前面に到り、衆人と相見す。衆上戸蓋を把り說道ふ、這箇の畜生の被に正に知らず多少人の性命を害了するを、獵戸を連累して、幾頓の限棒を喫了す、今日幸に壯士の來到するを得、這箇の大害を除了す、第一郷中の人民福有り、第二に客侶の通行、實に壯士之賜に出づ。武松謝し道ふ、小子の能に非ず、衆長上の福蔭に托頼す。衆人都來りて賀を作し、一早晨の酒食を喫了す。大蟲を擡出して虎牀上に放在す。衆郷村の上戸、都て段疋花紅を把り來りて武松に掛與す。武松行李包裹有り、莊上に寄在し、一齊に都莊門を出来る、早く陽穀縣の知縣相公有り、人をして武松を來接せしむ、都て相見し了り、四箇の莊客をして(二)乘の涼轎を將て來りて武松を擡かしめ、那の大蟲を把つて扛きて前面に在り、花紅段疋を掛着し、迎へて陽穀縣裏に到り來る。那の陽穀縣の人民、一箇の壯士景陽岡上の大蟲を打死し了すと説ふを聽得て、迎へ喝し了り來り、皆出來りて看、那の縣治を(三)開動し了す。武松轎上に在りて看る時、只見る肩を亞ぎ背を疊み、(四)開闢穰穰、街に屯し巷を塞ぎ、都て來りて見て大蟲を迎へ、縣前衙門口に到る。知縣已に廳上に在り、専ら等

【八五】人の榮譽をあらはす爲に紅色の絹帛を其肩上にかくる也。我邦の古のかづけ物の如し。

【八六】涼轎は輿といはんが如し。上蓋無き也。

【八七】町の大騒ぎとなつた。

【八八】押合ひ押合ひ。

つ。武松轎を下了し、大蟲を扛着し、都て廳前に到り、放つて甬道上に在り。知縣武松の這般の模様を看了し、又這箇の老大錦毛の大蟲を見了し、心中自ら付り道ふ、是這箇の漢ならずんば、怎地這箇の猛虎を打的んと。便ち武松をして廳に上り來らしむ。武松廳前に去いて啞を聲了す。知縣問道ふ、你那の打虎的の壯士、你却て怎生に這箇の大蟲を打了るを説け。武松廳前に就て虎を打つての本事を將て説了する一遍す。廳上廳下の衆多人等都て驚得て呆了す。知縣廳上に就て幾杯の酒を賜ひ、上戸の轉むる賞賜錢一千貫を將出して武松に給與す。武松稟し道ふ、小人相公的福蔭に托頼して、偶然僥倖に這箇の大蟲を打死す、小人の能に非ず、如何ぞ敢て賞賜を受けん、小人聞知す這の衆獵戸、這箇の大蟲に因りて相公の責罰を受了すと、何ぞ這の一貫を把つて給散し衆人に與へ去つて用ひしめざる。知縣道ふ、既に是此の如くば、壯士に任從せん。武松就ち這の賞錢を把つて廳上に在き、衆人獵戸に散與す。知縣他の忠厚仁徳を見て他を擡擧するに心有り、便ち道ふ、你原是清河縣の人民なりと雖も、我が這の陽穀縣と只咫尺に在り、我今日就ち你を參して本縣に在りて箇の都頭と做らしめんとす、如何。武松跪き謝して道ふ、若恩相の擡擧を蒙らば、小人身を終るまで賜を受けん。知縣隨即押司を喚び、文案を立了し、當日便ち武松を參して歩兵都頭に做し了す。衆上戸都て來りて武松の與に賀を作し慶喜す、連連三五日の酒を喫す。武松自ら心中に想道す、我本清河縣に回り去りて哥哥を看んと要す、

【八九】役所の入口通路の石だたみ。

誰か想はん倒つて來りて陽穀縣の都頭と做了せんとは。此より主官に愛せられ、郷里に名聞ゆ。又三二日を過了し、那一日武松縣門に走出し來りて開翫す。只聽得たり背後の一箇人、武都頭と叫聲し、你今日發跡し、如何ぞ我を看覷し則箇せざる。武松頭を回顧し來り看了して、阿呀と叫聲し、你如何ぞ却て這裏に在る。是武松這箇の

【九〇】立身。
【九一】我を見て下さらぬ。

第二十四回

王婆 賄を貪りて風情を説き、鄆哥忿らざらんや茶肆を鬧がす

話說す、當日武都頭身を回轉し來り、那人を看見し、身を撲翻して便ち拜す、原來是別人ならず、正に是武松的の嫡親哥哥武大郎なり。武松拜罷り說道ふ、一年有餘哥哥を見ず、如何ぞ却て這裏に在る。武大道ふ、二哥、你去了する許多時、如何ぞ封書を寄せ來りて我に與へざる、我又你を怨み、又你を想ふ。武松道ふ、哥哥如何ぞ是我を怨み我を想ふ。武大道ふ、我你を怨む時、當初你清河縣裏に在りて、便ち酒を喫し酔了し、人と相打つを要す、時常官司を喫し、我をして便ち衙に隨つて聽候するを要せしめ、曾て一箇月の淨辨有ら

- 【一】一箇無事に引かかり無く居させた事もない。
- 【二】家内をもちつた。
- 【三】こぼがらす。
- 【四】下らぬことをいふを放屁といふ也。

たり、清河縣の人、怯氣せず、都來つて相欺負するも、人の主と做る没、你的家に在りし時、誰か敢て來つて箇の尻を放つことあらんや、我如今那裏に在りて身を安き得ず、只得たり這裏に搬來して房を賃して居住す、此に因つて便ち是你を想ふ處なり、看官聽說せよ、原來武大と武松と是一母生む所の兩箇、武松は身長八尺、一貌堂堂、渾身上下に千百斤の氣力有り、恁地ならずんば如何ぞ那

箇の猛虎を打得ん。この武大郎は身五尺に満たず、面目醜陋にして、頭腦笑ふ可し、清河縣の人他の生れ得て短矮なるを見て、他に一箇の譚名を起し、三寸丁穀樹皮と叫做す。那の清河縣裏に一戸の大戸人家あり、箇の使女有り、小名潘金蓮と喚做す、年方に二十餘歳、頗る些の顔色有り、那箇の大戸他を纏せんと要、この女使只是去いて主人の婆に告ぐ、意下肯て依從せず。那箇の大戸此を以て恨を心に記し、却て倒つて些の房産を賂し、武大の一丈錢を要せず、白白地に他に嫁與す。武大那の婦人を娶り得るよりの後、清河縣裏に幾箇の奸詐的の浮浪の子弟們有り、却て他の家裏に來りて、嫖惱す。原來この婦人、武大の身材短矮にして、人物猥雅、風流を會せざるを見て、この婆娘倒つて、諸般好くす、頭爲る的は漢子を偷むを愛す、詩有り證と爲す、

金蓮の容貌更に題するに堪へたり、笑つて蹙む
閑に雲雨便ち 偷期。

- 【一〇】 嫁入道具を出して遣り。
- 【一一】 たただ。
- 【一二】 いたづらする也。
- 【一三】 人物立派ならず。
- 【一四】 何事も脈手にする也。
- 【一五】 春山は眉の形容。
- 【一六】 清字、恐らくは誤。
- 【一七】 要約するを期といふ、期我乎桑中などいへり。偷はぬすむなり。一句密通すること也。
- 【一八】 主人其使女を手に入れんとす。
- 【一九】 女使、使女同じ。主人の婆は主人の妻。
- 【二〇】 あたまつきをかかし。
- 【二一】 丁は釘なり。穀樹皮詳しく知らず、字面に據れば蓋しわら也。或は謂ふ藁人形なりと。
- 【二二】 大戸人家は富戸といはんが如し。
- 【二三】 主人其使女を手に入れんとす。
- 【二四】 女使、使女同じ。主人の婆は主人の妻。

却て説く、潘金蓮 門を過ぐるの後、武大は是箇の 懦弱にして本分に依る的人、この一班の人に 不時間に門前に在りて好一塊の羊の肉倒つて落ちて狗の口に在りと叫道さる。此に因つて武大清河縣に在りて住して牢からず、この陽穀縣紫石街に搬來して房を賃し居住し、毎日舊に仍りて炊餅を挑賣す、此日正に縣前に在りて買賣を做す。當下武松を見たり、武大道ふ、兄弟、我前日街上に在り、聽得たり人の 沸沸地に景陽岡上に一箇の虎を打つ的の壯士姓は武、縣裏に知縣他を參して箇の都頭と做すと説道するを、我も也八分は是你なりと猜道す、原來今日纔に撞見するを得、我且買賣を做さず、一同に你と和に家に去かん。武松道ふ、哥哥の家は那裏に在る。武大手を指し道ふ、只前面紫石街に在る便ち是なり。武松武大の替に 擔兒を挑了し、武大は武松を引着し、灣を轉じ角を抹し、一逕に紫石街を望み來り、兩箇の灣を轉來過し、一箇の茶坊の間壁に來到す。武大叫ぶ一聲、大嫂門を開けと。只見る蘆簾の起る處、一箇の婦人出て簾子の下に到り、應じ道ふ、大哥、怎地半早に便ち歸れる。武大道ふ、你的の 叔叔這裏に在り、且來りて 厮見せよ。武大郎擔兒を接了して入去り、便ち出來り道ふ、二哥屋に入り來り、你的 嫂嫂と相見え

- 【一八】 來てから、といふに同じ。
- 【一九】 おとなしい男。
- 【二〇】 始終。
- 【二一】 大評判して。
- 【二二】 かついであるものを荷ひ。
- 【二三】 二つまがりて、茶店の隣。
- 【二四】 大嫂、吾妻を呼ぶ也。
- 【二五】 大哥、あにきといふ語なれど吾が夫を呼ぶなり。
- 【二六】 叔叔、弟なり。武松をさす。
- 【二七】 相見えよ也。
- 【二八】 兄よめ、金蓮をさす。

よ。武松簾子を掲起して裏面に入進し、那の婦人と相見ゆ。武大說道す、大嫂原來景陽岡上に大蟲を打死し、新に充てられて都頭と做るは正に是我が這の兄弟なり。那の婦人三五又手して向前し道ふ、叔叔三〇萬福。武松道ふ、嫂嫂請ふ坐せよと。武松當下金山を推し玉柱を倒すごとく三一頭を納して便ち拜す。那の婦人向前して武松を扶住して道ふ、叔叔三二奴家を折殺す。武松道ふ、嫂嫂禮を受けよと。那の婦人道ふ、奴家也說道を聽得たり、箇の虎を打つ的好漢有り、迎へて縣前に到り來ると。奴家また待りに去いて看一看せんと要、想はざりき去得て遅了し、赶上かず、曾て看見せず、原來却て是叔叔なりしか、且請ふ叔叔樓上三三に到り去いて坐せよと。武松那の婦人を見る時、但見る、

眉は初春の柳葉の似く、常に雨の恨雲の愁を

含着し、臉は三月の桃花の如く、暗に風の情月の意を藏着す。纖腰袅娜として、燕の懶く鶯の情

きを拘束し得、檀口輕盈、蜂の狂蝶の亂を勾引し得。玉貌妖嬈として、花語を解し、芳容窈窕とし

て、玉香を生ず。

當下に那の婦人武大をして武松を請ひて樓に上り、主客席裏に坐地せしむ。三箇人同じく樓上に到りて坐了す。那の婦人武大を看着して道ふ、我叔叔に陪侍着して坐地せん、你去いて些の酒食を安排

- 【二九】 又手は禮也。
- 【三〇】 萬福はおめでたうといふが如し、婦人の常の言なり。
- 【三一】 納頭前に出づ、捺頭なり、頭をさげる也。
- 【三二】 それではわたくしをこまらせます。おそれいますといふ也。

し來り、叔叔を管待せよ。武大應じ道ふ、最も好し、二哥你且つ坐一坐せよ、我便ち來らん。武大樓を下り去了す。那の婦人樓上に在りて武松の這一表の人物を看了し、自ら心裏に尋思して道ふ、武松と他とは嫡親一母の兄弟、他また生れの這般に長大、我這の一箇に嫁し得ば也人たる一世を枉げず、你看よ我が那の三寸丁穀樹皮、三分は人に像たり七分は鬼に似たり、我直恁地三晦氣なり、武松が大蟲も也他に打倒さ喫に四據着すれば、他必然五好氣力なり、他未だ曾て婚娶せずと説へば、

何ぞ他をして搬來して我が家裏に住せしめ

ざる、想ざりき這段の因縁却て這裏に在りと。

那の婦人臉上に笑を堆下し來り、武松に問ひ道

ふ、叔叔這裏に來りて幾日了す。武松答道ふ、

此間に到り十數日了。婦人道ふ、叔叔、那裏に

在りて三六安歇する。武松道ふ、胡亂に權に縣衙裏に在りて安歇す。那の婦人道ふ、叔叔、恁地時却て不

便ならん。武松道ふ、獨自一身、容易に料理す、早晚自ら士兵有りて伏侍す。婦人道ふ、那等の叔叔

叔に伏侍す、恁地三七顧管し得て到らん、何ぞ搬來して一家裏に住せざる、早晚些の湯水の喫するを要

する時は、奴家親自に安排して叔叔に與へて喫せしめん、這夥の三八腌臢人似り強らずや、叔叔便ち三九口の清湯を喫するも也放心し得て下さん。武松道ふ、深く嫂嫂に謝す。那の婦人道ふ、別處に四〇權

- 【三三】 運悪く口惜く忌屋しい。
- 【三四】 よれば。
- 【三五】 精力有り。
- 【三六】 我が家へ引越させたがよい。
- 【三七】 やすみ睡る。
- 【三八】 世話が屑くまい。
- 【三九】 きたなき人。
- 【四〇】 嫌嫌は相嫁也。武松がよそに女をもちゐるにあらずやといふ也。

嬌有るにあらざる莫きや、取來りて厮曾するも也好かる可し。武松道ふ、武二竝に曾て婚娶せず。婦人又問道ふ、叔叔青春多少ぞ。武松道ふ、【四二】虚度二十五歳。婦人道ふ、奴より長する三歳なり、叔叔今番那裏より來る。武松道ふ、滄州に在りて住了る一年有餘なり、只哥哥の清河縣に在りて住するを想ふ、想はざりき却て搬して這裏に在り。那の婦人道ふ、一言盡し難し、你的哥哥に嫁し得てよ、他の武だ善了なる喫に人に欺負され、清河縣裏に住し得ず、這裏に搬來す、若し叔叔の這般に雄壯なるを得ば、誰か敢て箇の不字を道はん。

武松道ふ、家兄從來【四三】本分、武二の撒潑なるに似ず。那の婦人笑ひ道ふ、怎地這般に顛倒して説く、常言に道ふ、人剛骨無くば、身を安んじて牢からずと、奴家平生【四四】快性、這般の【四五】三答して頭を回さず、四答して身と和に轉ずる【四六】的人を看得ず。武松道ふ、家兄却て事を惹きて嫂嫂の憂心を要するに到り得ず。正に樓上に在りて説話し未だ了せず、武大些の酒肉菓品を買了して歸り來り、厨下に放在し、走りて樓に上り來り叫び道ふ、大嫂你下り來りて安排せよ。那の婦人應へ道ふ、你見よ那の【四七】事を曉らざる的、叔叔這裏に在りて坐地するに、却て我をも【四八】搬して下來せしむるや。武松道ふ、嫂嫂自ら便にせよ。那の婦

【四二】 むだに年とりて二十五歳。
【四三】 兄さんはおとなしく、私のあげれ者とはちがふ。
【四四】 かち氣、氣ばや。
【四五】 三返呼ばれてまだ頭を回さず、四返呼ばれてのる。
【四六】 りと振りむく。のろま、生ねるき人、然様な人をすかぬ。
【四七】 わからぬ人だ。
【四八】 叔叔を捨てて下來せしむるか。

人道ふ、何ぞ去いて【四九】間壁の王乾娘を叫びて安排せしめざる、便了ならんに、只是這般に便を見ず。武大自ら去いて間壁の王婆を央み了し、安排端正し了し、都て樓に搬上し來り、擺して卓子上に在り、是些の魚肉果菜之類にあらざる無し、隨即酒を盪し上り來る。武大婦人をして、主席に坐了せしめ、武松對席し、武大【五〇】打横す。三箇人坐下し、武大酒を篩ぎて各人面前に在く。那の婦人酒を拿起し來り道ふ、叔叔、甚の管待沒きを怪む休れ、請ふ酒一杯せよと。武松道ふ、嫂嫂に感謝す、這般に説くを休めよ。武大只顧上下酒を篩ぎ酒を盪し、那裏に來りて別事に管せん。那の婦人笑容掬す可く、満口兒に道ふ、叔叔、怎地魚と肉と也一塊兒を喫せざると、【五一】好的を揀んで遞將過來す。武松は是箇の直性的漢子、只親嫂嫂を把つて相待つ。誰か知らん那の婦人は是箇の使女の出身、小意兒を會するに慣る。武大又是箇の善弱の人、那裏に人を管待するを會せん、那の婦人幾杯の酒を喫了し、一雙眼只武松の身上を見る。武松他に看喫れ過へず、只頭を低了して【五二】恁麼に理會せず。當日十數杯の酒を喫了し、武松便ち身を起す。武大道ふ、二哥哥に幾杯を喫了して去れ。武松道ふ、只好し恁地にして、却て又來りて哥哥を望まん。都て樓を下り來る。那の婦人道ふ、叔叔、是必ず家裏に搬來して住せよ、若し叔叔の搬し來らざる時、我が兩口兒をして也別人の笑話を喫せしめん、

【四九】 お隣の王のおばさんを見たのめば宜からうに氣のきかな。
【五〇】 好ささうなのを我が筈にてはさみて人に與ふるは親密愛敬を表する支那式なり。
【五一】 知らぬふりする。

親兄弟は別人に比し難し、大哥你便ち一間の房を打點し、叔叔を請ひて家裏に來りて過活せしめ、隣舍街坊をして箇の不是を道はしむる休れ。武大道ふ、大嫂の説ふ的是なり、二哥你便ち搬來し、也我をして (五) 口氣を争はしめよ。武松道ふ、既に是哥哥嫂嫂恁地に説ふ時、今晚些の行李有り、便ち取了し來らん。那の婦人道ふ、叔叔、是必ず (五) 記心せよ、奴這裏に専ら望むと。那の婦人情意十分に懇懃なり。正に是、

叔嫂言を通ずるは禮禁する嚴なり、手援くるは須らく識るべし是權に従ふを。英雄は只念ふ (五)

連枝の樹、淫婦は偏に思ふ並蒂の蓮。

武松哥嫂に別了し、紫石街を離了し、逕に縣裏に投じ來る。正に知縣の廳上に在りて衙に坐するに値ふ。武松廳に上り來り稟して道ふ、

武松箇の親兄有り、搬つて紫石街に在りて居住す。武松家裏に就て宿歇し、早晚衙門中に使喚を聽候せんと欲す。敢て擅に去らず、恩相の鈞旨を請ふ。知縣道ふ、これは孝悌的の勾當、我如何ぞ你を阻まん、你毎日縣裏に來りて伺候すべし。武松謝了し、行李 鋪蓋を收拾し、那の新製的の衣服并に前者賞賜的の物件有り、箇の土兵をして挑了せしめ、武松哥家裏に引到す。那の婦人見了し、却て半夜裏に金寶を拾ふ的比一般歡喜し、笑を堆下し來る。武大箇の 木匠を叫び、樓下に就て一間

の房を整了し、一張の床を鋪下し、裏面に一條の卓子を置き、兩箇の杓子、一箇の火鑪を安く。武松先づ行李を把つて安頓了了し、土兵に分付して自ら回去らしめ、當晩哥嫂家裏に就て歇臥す。次日早起す、那の婦人慌忙起來して、洗面の湯を燒き、漱口の水を呑み、武松をして口面を漱了し、巾幘を裹了し、門を出でて縣裏に去いて 畫卵せしむ。那の婦人道ふ、叔叔、卵を畫了せば、早些箇に歸來して飯を喫せよ、別處に去いて喫する休れ。武松道ふ、便ち來らん。逕に縣裏に去いて卵を畫了し、一早晨を伺候了了し、回つて家裏に到る。

那の婦人手を洗ひ甲を剔り、齊齊整整に飯食を安排し下し、三口兒卓兒を共にして喫す。武松飯を喫了す、那の婦人雙手に一盞の茶を捧げて武松に遞與して喫せしむ。武松道ふ、嫂嫂をし

て 生受せしむ、武松寢食安からず、縣裏より一箇の土兵を撥し來りて使喚せん。那の婦人連聲に叫び道ふ、叔叔却て怎地這般に 外に見るや、自家的の骨肉なり、又別人に伏侍するならず、便ち一箇の土兵を撥し來りて使用するも、這厮 鍋に上り 竈に上るも也乾淨ならず、奴の眼裏也這等の人を看得ず。武松道ふ、恁地時、却て嫂嫂を生受せしむと。話は絮繁を休む。武松家裏に搬將し來りてより、些の銀子を取りて武大に與へ、餅餛茶菓を買ひ、鄰舍を請うて茶を喫せしむ。衆隣舍 分

【五】 他人に馬鹿にされぬやう 孟子。

【五】 兄弟は連枝也。

【五】 おぼえてゐて下さい。

【五】 嫂を叔の手みづから援くるは權道なり。古道是の如

【五】 やぐふとん。

【五】 大工。

【五】 朝づとめ、卵の刻一度面

【五】 上鍋上竈の上は、いぢるといふが如く、かかるといふが如し。

【五】 分子は割前なり、圖は合はす。人情は禮なり。

の房を整了し、一張の床を鋪下し、裏面に一條の卓子を置き、兩箇の杓子、一箇の火鑪を安く。武松先づ行李を把つて安頓了了し、土兵に分付して自ら回去らしめ、當晩哥嫂家裏に就て歇臥す。次日早起す、那の婦人慌忙起來して、洗面の湯を燒き、漱口の水を呑み、武松をして口面を漱了し、巾幘を裹了し、門を出でて縣裏に去いて 畫卵せしむ。那の婦人道ふ、叔叔、卵を畫了せば、早些箇に歸來して飯を喫せよ、別處に去いて喫する休れ。武松道ふ、便ち來らん。逕に縣裏に去いて卵を畫了し、一早晨を伺候了了し、回つて家裏に到る。

那の婦人手を洗ひ甲を剔り、齊齊整整に飯食を安排し下し、三口兒卓兒を共にして喫す。武松飯を喫了す、那の婦人雙手に一盞の茶を捧げて武松に遞與して喫せしむ。武松道ふ、嫂嫂をし

て 生受せしむ、武松寢食安からず、縣裏より一箇の土兵を撥し來りて使喚せん。那の婦人連聲に叫び道ふ、叔叔却て怎地這般に 外に見るや、自家的の骨肉なり、又別人に伏侍するならず、便ち一箇の土兵を撥し來りて使用するも、這厮 鍋に上り 竈に上るも也乾淨ならず、奴の眼裏也這等の人を看得ず。武松道ふ、恁地時、却て嫂嫂を生受せしむと。話は絮繁を休む。武松家裏に搬將し來りてより、些の銀子を取りて武大に與へ、餅餛茶菓を買ひ、鄰舍を請うて茶を喫せしむ。衆隣舍 分

子を闘せ來りて武松に與へて人情とす。武大又回席を安排す、都て話下に在らず。數日を過了し、武松一匹の彩色段子取出し、嫂嫂に與へて衣裳を做らしむ。那の婦人笑ひ嘻嘻として道ふ、叔叔、如何ぞ使ひ得ん、既に然く叔叔把つて奴家に與ふ、敢て推辭せず、只得たり接了するを。武松此より只哥哥の家裏に在りて宿歇す。武大は前に依りて街に上りて炊餅を挑賣す。武松毎日自ら縣裏に去いて晝卯し、差使を承應す、歸の遅き歸の早きを論せず、那の婦人、頓羹頓飯、歡天喜地して武松に伏侍す。武松倒つて意に過し去らず。那の婦人常に些の言語を把り來つて他を撩撥す。武松は是箇の硬心直漢、却て見怪せず。話有れば即ち長く話無ければ即ち短し。覺えず一月餘を過了。看看是十一月の天氣、連日朔風緊しく起り、四下裏彤雲密布し、又早く紛紛揚揚一天の大雪を飛下し來る。怎に好雪を見得たる。正に是

眼波飄瞥風の吹くに任せ、柳絮泥に沾ふ私有りが若し。粉態輕狂して世界迷ふ、巫山の雲雨も未だ奇と爲さず。

當日那の雪直ちに下りて一更の天氣に到る、却て銀の世界に鋪き玉の乾坤に碾びたるに似たり。次日

- 【六三】 どういたしまして。
- 【六四】 一頓の羹、一頓の飯。
- 【六五】 かたいをとこ。
- 【六六】 どうもせず。
- 【六七】 きた風。
- 【六八】 眼波は字の如く眼の光の

流盼して波の如きなふ也。飄瞥ちらりちらり也。此詩初句不通なり。金蓮の情と雪の景とを一にして道ばんとして巧ならざる也。眼波二字誤あるか。銀波か。

武松早く縣裏に出去りて晝卯す、直に日中に到りて未だ歸らず、武大は這の婦人に趕出し去られて買賣を做す。間壁の王婆を央及て些の酒肉之類を買下し、武松の房裏に去いて一盆の炭火を簇了し、心裏に自ら想ひて道ふ、我今日着實に他に撩撥せん、一たび撩撥すれば信せず他の情を動かさざるを。那の婦人獨自一箇、冷冷清清と簾兒下に立在して等着す。只見る武松那の亂瓊碎玉を踏踏して歸り來る。那の婦人簾子を掲起し、笑臉を陪着して迎接し道ふ、叔叔、寒冷。武松道ふ、感謝す嫂嫂の憂念を。門に入り得來り、便ち氈笠兒を把つて除將下來す。那の婦人雙手去つて接せんとす。武松道ふ、嫂嫂の生受を勞せずと。自ら雪を把り來つて拂ひ、掛けて壁上に在き、腰裏の纏袋を解了し、身上の鸚哥緑の紵絲の襖襖を脱了し、房裏に入りて搭了す。那の婦人便ち

- 【六九】 しつかり他に手を出し取りかかひてみん。
- 【七〇】 お寒かつたでせう。
- 【七一】 酒事。
- 【七二】 油靴はぬり靴、煖鞋は座敷沓。
- 【七三】 かける。
- 【七四】 しりあひ。
- 【七五】 油靴はぬり靴、煖鞋は座敷沓。

道ふ、奴等一早起す、叔叔怎地歸來して早飯を喫せざる。武松道ふ、便ち是縣裏一箇の相識早飯を喫せんを請ふ、却纔又一箇の作杯有り、我煩に奈へず、一直走りて家に到り來る。那の婦人道ふ、恁地は叔叔火に向れ。武松道ふ好し。便ち油靴を脱了し、一雙の靴子を換了し、煖鞋を穿了し、箇の杓子を撥り、自ら火邊に近づきて坐地す。那の婦人前門を把りて拴を上了し、後門も也關了し、却て些の案酒菓品菜蔬を搬し、武松の房裏に入り來りて擺して卓子上に在く。武松問道ふ、哥哥

那裏に去きて未だ歸らざる。婦人道ふ、（六） 你的哥哥、毎日自ら出で去いて買賣を做す、我叔叔と自ら三杯を飲まん。武松道ふ、（七） 一發に哥哥の家に來るを等ちて喫せん。婦人道ふ、那裏に他を等的來らん、他を等ち得ずと、説ふこと猶未だ了らず、早く一注子の酒を煖了し來る。武松道ふ、嫂嫂坐地せよ、等て武二去いて酒を盪す正當ならん。婦人道ふ、叔叔你自ら（七） 便せよ。那の婦人也箇の杓子を撥りて火邊に近づき坐了し、火頭邊卓兒上に杯盤を擺着す。那の婦人盪酒を拿り、擧げて手裏に在り、武松を看着して道ふ、叔叔此杯を滿飲せよ。武松手に接過し來り、一飲して盡す。那の婦人又一杯酒を篩ぎ來り説道す、天色寒冷なり、叔叔箇の（七） 雙杯兒を飲め。武松道ふ、嫂嫂自ら便にせよ。接來して又一飲して盡す。武松却て一杯の酒を篩ぎ、那の婦人に遞與して喫せしむ。婦人酒を接過し來りて喫了し、却て注子を拿りて再び酒を斟み來り、武松の面前に放在す。那の婦人（七） 酥胸を將て微しく露はし、雲鬢半暉れ、臉上に笑容を堆着して説道ふ、我一箇の問人の説道ふを聽得たり、叔叔縣前東街上に在て一箇の（八） 唱的を養着すと、敢て端的に這話有り麼。武松道ふ、嫂嫂外人の胡説を聽く休れ、武二從來是這等の人ならず。婦人道ふ、我信せず、只怕る叔叔の口頭は心頭に似ざらんことを。武松道ふ、嫂嫂信せざる時、只哥哥に問へ。那の婦人道ふ、他甚麼を曉り得ん、這等の事を曉り得る時、炊

【六】 一しよに。

【七】 御自由に。

【七】 雙杯兒は二人一時に飲むこと、男女の間の雙杯兒は色

氣あることなり。

【七】 酥の如き柔らかなる胸。

【八】 うたひ女を妾にしてゐる。

餅を賣らず、叔叔且請ふ一杯せよと。連りに三四杯の酒を篩ぎて飲了す。那の婦人也三杯の酒の肚に落つる有り、（八） 春心を開動し、那裏に按納し得て住めん。只管に問話を把つて來り説く。武松也八九分を知了し、自家只頭を把り來つて低了す。那の婦人身を起し去つて酒を盪む。武松自ら房裏に在て火筋を拿起して火を篋む。那の婦人一注子の酒を煖了し、房裏に來到し、一隻手注子を拿着し、一隻手便ち武松の肩脾上に去いて只（八） 一捏し、説道ふ、叔叔、只這の些の衣裳を穿ち、冷ならずや。武松已に自ら五分の不快の意有り、也他に應せず。那の婦人他の應せざるを見て、（九） 劈手に便ち來りて火筋を奪ひ、口裏に道ふ、叔叔、你火を篋するを會せず、我你が與に火を撥せん、（九） 只要す一（九） 火盆の似く常に熱ければ便ち好し。武松八分の（九） 焦躁有り、只聲を做さず。那の婦人慾心火の似くして、武松の焦躁を看す、便ち火筋を放了し、却て一盞酒を篩ぎ來りて、自ら一口を呷了し、大半盞を剩了し、武松を看着して道ふ、你若心有らば我が（七） 這の半盞兒の殘酒を喫せよ。武松劈手に奪ひ來り、潑して地下に在り、説道ふ、嫂嫂、恁地に羞恥を識らざるを要する休れと、手を把つて只一推し、（八） 争些兒に那の婦人を把つて推一交す。武松眼を睜起し來り道ふ、武二は

【八】 慾情起りて自ら制する能はず。

【九】 つれる。

【九】 いきなり。

【九】 只かならずの一句、言に表裏あり、裏の意は色戀にか

【八】 いらだちいかり。

【九】 これは付けざしを飲めといふにて、我邦俗にも婦人の付けざしを飲むは飛でもなき事なり。

【九】 ほとんどおしころばさん

【九】 火鉢。

是箇の頂天立地鬮齒髮の男子漢、是那等の風俗を敗壞する没人倫的の猪狗ならず、嫂嫂這般に廉恥を識らざるを要する休れ、此等の勾當を爲す、倘些の風吹き草動く有らば、武二眼裏には是嫂嫂なるを認め得るも、拳頭は却て是嫂嫂なるを認め得ざるなり、再來恁地なるを要する休れ。那の婦人臉を通紅し了し、便ち杯盤盞碟を收拾し了し、口裏說道ふ、我自ら樂要を作す、便ち眞に當て起し來るを得るに値らず、人の敬重を識らず、と家火を搬了して自ら厨下に向ひ去了す。詩有り證と爲す、

酒媒人と作りて色膽張る。姪を貪りて顧みず
綱常を壞るを。席間便ち雲雨を求めんと欲し
て、激し得たり雷霆の怒一場。

【八九】天をいただき地に立ち齒をふくみ髪をいただける男

【九〇】ひっかけんとして動かす反つてひどくやりつけられ。

却て説く、潘金蓮武松を勾搭して動かす、反て槍白せらるる一場。武松は自ら房裏に在りて氣忿忿地たり。天色却て早く未牌の時分、武大擔兒を挑了し歸來して門を推す。那の婦人慌忙門を開く。武大進來して擔兒を歇了し、隨つて厨下に入る。老婆の雙眼哭し得て紅紅的なるを見る。武大道ふ、你誰と聞ひ來る。那の婦人道ふ、都て是你氣を争はず、外人をして來りて我を欺負せしむ。武大道ふ、誰人が敢て來つて你を欺負せる。婦人道ふ、情知せよ是誰有らん、争奈武二那厮、我他が大雪裏に歸り來るを見、連忙に酒を安排し他を請じて喫せしむ。他前後に人没きを見、便ち言語を把り來つ

て我を調戲す。武大道ふ、我的の兄弟は、是這等のならず、從來老實なり、高く聲を做すを要する休れ、隣舍家に笑話せ喫れん。武大老婆を搬了し、武松の房裏に來到し、叫び道ふ、二哥、你曾て點心を喫せず、我你和些箇を喫せん。武松只則聲せず、尋思し了する半晌、再び絲鞋を脱了し、舊に依りて油勝靴を穿上し、上蓋を着了し、氈笠兒を帶上し、一頭に纏袋を繫め、一面門を出づ。武大叫道ふ、二哥、那裏に去る。也應せず、一直地に只願去了す。武大厨下に回り來り、老婆に問ひ道ふ、我彼を叫ぶ又應せず、只願縣前の這條の路を望みて走了し去る、正に是恁地してなるを知らず。那の婦人罵り道ふ、糊突桶、甚麼の見難き處有らん、那厮羞了り、臉兒の你看る没し、走了し出する、我猜するに他已定箇の人をして來りて行李を搬ばしめん、這裏に在りて宿歇するを要せじ。武大道ふ、他搬了し去る、須ち別人に笑話せられん。那の婦人道ふ、混沌魍魎、他來つて我を調戲して、到つて別人に笑はれず、你便ち他と道話するを要す、我却て這樣的のひと做り得ず、你我一紙の休書を還了し來れ、你自ら他を留めて便了ならん。武大那裏に敢て再び口を開かん、正に家中に在りて、兩口兒絮聒す。只見る武松一箇の土兵を引了し、(一)條の匾擔を拿着し、逕に房裏に來り行李を收拾し了り、便ち門を出去る。武大趕出來り叫道ふ、二哥甚麼と做して便ち搬了

【九一】聲を作さず。則は作の音を假る。

【九二】去り狀をわたして下され。

【九三】糊突桶は罵詈、理解の悪しきなふ也。わからずや。

【九四】二人で言ひ合ひ居る。

し去る。武松道ふ、哥哥問ふを要せず、説起來らば你的の幌子を装せん、你只我が自ら去るに由せて便了ならん。武大那裏に敢て再び備細を問はん、武松の搬了し去るに由す。那の婦人裏面に在りて喃喃呐呐的に罵り道ふ、却て也好し、人只道ふ一箇の親兄弟都頭と做る、怎地哥嫂を養活了せん、却て知らず反つて來つて人を嚼咬す、正に是花木瓜空しく好看なり、你搬了し去る、却て天地に謝す、且冤家の眼前を離るるを得たりと。

武大老婆の這等に罵るを見、正に怎地せんを知らず、心中只是咄咄樂まず、他を放ち下さず。武松が搬了して縣衙裏に去き宿歇せしより、武大自ら依然として毎日街に上り炊餅を挑賣す。本縣裏に去き兄弟を尋ねて説話せんと待要、却て這の婆娘に千叮萬囑され、分付して去

【六】此俗語、幌は帷幔なり。装は裝飾の装なり。此語や不明にして、又わざと不明に云ひたる歟。明白に道ひ難き事情なればなり。装はここには反語の氣味。俗ののれんが入用になる、即ち俗のかくしたきことをあらはにするやうになるといふ事也。私の去るに。

いて他を兜攬するを要せざらしむ、此に因りて武大敢て去つて武松を尋ねず。〔一〇〇〕撚指の間に歲月流るるが如く、覺えず雪晴れ、十數日を過了。却て説く、本縣の知縣、到任より已來、却て二年半多を得、好些金銀を賺得し、人をして東京に送上り去り、親眷の處に與へ收貯使用せしめ、箇の陸轉を謀らんことを欲待要。却て路上に人に劫了し去らるるを怕る、須ち一箇の本事有る的心腹の人を

得て去かしむる便ち好しと、猛可に武松を想起し來る、須ち是此人去るべし、這等の英雄の了得する有りと、當日便ち武松を喚びて衙内に到らしめ、商議して道ふ、我一箇の親戚の東京城裏に在りて住する有り、一擔の禮物を送り去るを欲要、就ち封書を捎して問安すれば則箇、只恐る途中行くに好からず、須らく是你的の這等の英雄好漢を得て方に去得可し、你辛苦を辭する休るべし、我が與に去いて走一遭して回り來れ、我自ら重重你を賞せん。武松應じて道ふ、小人恩相の擡擧を蒙るを得、安ぞ敢て推故せん、既に差遣を蒙る、只得便ち去らん、小人也自來會て東京に到らず、就ち那裏に光景を觀看して一遭せん、相公明日打點端正了せよ便ち行かん。知縣大に喜び、三杯を賞了す。話下に在らず。且説く、武松知縣の言語を領下し、縣門を出來り、下處に到得、些の銀兩を取了し、箇の土兵を叫了し、却て街上に來りて一瓶の酒并に魚肉果品之類を買了し、一逕に紫石街に投じ來り、直に武大の家裏に到る。武大恰も好し炊餅を賣り回り來る。武松の門前に在りて坐地し、土兵をして厨下に去きて安排せしむるを見る。那の婦人餘情斷せず、武松の酒食を把り將ち來るを見て、心中自ら想ひ道ふ、這厮我を思量するにあらざる莫からんや、却て又回來る、那厮以定我に強ち過す、且慢慢地に他に相問はんと。那の婦人便ち樓に上り去り、重ねて粉面を勻へ、再び雲鬢を整へ、些の艶色の衣服に換へて穿了し、門前に來到し、武松を迎接す。那の婦人拜し道ふ、叔叔、知らず怎地錯見了する、好幾日ぞ竝に門に上らざる、奴をして心裏理會する處沒からしむ、毎日你哥哥をして縣裏に來り叔

叔を尋ねて陪話せしむるも、歸來只道ふ尋ぬる處没しと、今日且喜び得たり叔叔家に來るを、事没きに懷錢して甚麼を做さん。武松答道ふ、武二(一)句話有り、特に來りて哥哥と嫂嫂とに説知するを要する則箇。那の婦人道ふ、既に是此の如くば、樓上に去いて座地せよ。三箇人樓上客位裏に到り、武松哥嫂に譲りて上首に坐了せしむ。武松箇の杌子を撥りて横頭に坐了す。土兵酒肉を搬將して樓に上り來り、擺して卓子上に在り。武松哥嫂嫂に勧めて酒を喫せしむ。那の婦人只顧に眼を把り來つて武松を睨る。武松只顧酒を喫し、酒五巡に至る、武松(二)勸杯を討ね付し、土兵をして一杯の酒を篩了せしめ、拿つて手裏に在り、武大を看着して道ふ、大哥上に在り、今日武二知縣相公の差を蒙り、東京に往いて事を幹す、明日便ち(三)起程を要す、多くは是兩箇月、少くは是四五日便ち回らん、(一)句話あり、特

【一〇〇】すすめる杯、つまり大杯也。
【一〇一】たびだち。

に來りて你と説知せん、你從來人と爲り懦弱なり、我家に在らず、恐怕らくは外人に來りて欺負せられん、假如你毎日十(一〇二)扇籠の炊餅を賣らば、你明日より始と爲して只五扇籠を做し出で去つて賣り、毎日遅く出て早く歸り、人と酒を喫するを要せず。歸りて家裏に到らば、便ち簾子を下し、早く門を閉上し、多少是非の口舌を省了せよ、如若人有りて你を欺負するも、他と争執するを要せず、我が回り來るを待つて、自ら他と理論せん、大哥我に依る時、此杯を滿飲せよ。武大酒を接了して道ふ、我が兄弟見得て是なり、我都て你的説に依らんと、一杯の酒を喫過し了す。武松再び第二杯の酒を

篩ぎ、那の婦人に對し説き道ふ、嫂嫂は是箇の精細的人、必ずしも武松の多説を用ひず、我哥哥人と爲り質朴、全く嫂嫂の主と做りて他を看覩するに靠る、常言に道ふ、表壯なるは裏壯なるに如かずと、嫂嫂家を把得て定めば、我哥哥煩惱して甚麼を做さん、豈古人の言を聞かずや、離牢ければ犬入らずと。那の婦人這話を聽了し、武松に這一篇を説了せられ、一點の紅耳朶の邊よ(一〇四)面皮を紫漲し了し、武大を指着して便ち罵りて道ふ、你這箇の(一〇五)腌臢混沌、甚麼の言語有りて、外人の處に在りて説來りて、老娘を欺負する、我は是一箇の頭巾を戴かざる男子漢、(一〇六)叮叮當當響く的の婆娘、拳頭上に人を立たしめ得、臍膊上に馬を走らしめ得、人面上に人を行かしめ得、是那等の(一〇七)擲かれて出でざる的の鼈老婆にあらず、武大に嫁してより、眞箇に螻蟻も也敢て屋裏に入り

【一〇三】せいろう。
【一〇四】顔なまつかにして。
【一〇五】きたないわからずや。
【一〇六】なにをよそで説うた。
【一〇七】なげたる煉瓦。
つかさんだ。
【一〇八】下落はおちつき當る、ろ。
【一〇九】なげたる煉瓦。

來らず、甚麼の籬笆牢からずして犬兒の鑽得し入り來るあらん、你胡言亂語、一句句都て(一〇八)下落を要す、(一〇九)丟下したる磚頭瓦兒一箇也地に着するを要す。武松笑ひ道ふ、若嫂嫂の這般に主と做るを得ば最も好し、只要す心口の相應せんことを、却て心頭の口頭に似ざるを要せず、既に然く此の如くば武二都て嫂嫂の説く的话を記し得たり、請ふ此杯を飲過せよ。那の婦人酒盞を推開し、一直樓を跑下し來る、走つて胡梯上に到る半にして、發話して道ふ、你既に是聰明伶俐、却て長嫂の母爲るを道

はず、我當初武大に嫁する時、曾て甚麼の阿叔有りと言ふを聽得ず、那裏より走り得て来る。是親か
是親ならざるか、便ち喬家公と做らんと要、自らは老娘晦氣了、許多の事に鳥撞着すと、哭して樓を
下り去り了す。詩有り證と爲す、

良言逆聽して即ち讐を爲す、笑眼登時涙流るる有り。祇是兩行の淫禍の水、悲苦に因らず羞に因
らず。

且説く、那の婦人許多の奸偽の張致を做出す。那の武大武松兄弟兩箇幾杯を喫了し、武松哥哥に拜
辭す。武大道ふ、兄弟去了せば、早早回り來れ、你と相見ん。口裏に説ひて覺えず眼中より涙を墮
す。武松武大の眼中に涙を垂るるを見、便ち説道ふ、哥哥便ち買賣を做し得ざるも也罷む、只家裏に
在りて坐地せよ、盤纏は兄弟自ら送將し來らん。武大武松を送りて樓を下り來る。門を出づるに臨み
て、武松又道ふ、大哥、我が的の言語、忘るるを要する休れ。武松土兵を帶了して自ら縣前に回
り收拾す。次日早起し來り、包裹を控束了了し、來りて知縣に見ゆ。那の知縣已に自ら先づ一輛の車
兒を差下し、箱籠を把つて都て車子上に裝載す。兩箇の精壯の土兵を點じ、縣衙裏より兩箇心腹の伴
當を撥し、都て分付了了し、那の四箇武松に跟了し、廳前に就て知縣を拜辭し、拽扎し起し、朴刀を
提了し、車子を監押し、一行五人、陽穀縣を離了し、路を取りて東京を望み去了す。話兩頭に分る。
只説く、武大郎武松が説了して去りしより、整整的に那の婆娘に罵了せらるる三四日、武大氣を忍び

聲を呑んで、他の自ら罵るに由す、心裏只兄弟的の言語に依着す、眞箇に毎日只一半の炊餅を做りて
出去つて賣る、未だ晩ならずして便ち歸り、一脚擔兒を歇了し、便ち去つて簾子を除き、大門を開
上し、却て家裏に來つて坐地す。那の婦人這般なるを看了して心内焦躁し、武大臉上を指着して罵り
て道ふ、混沌たる濁物。我倒て曾て見ず、日頭半天裏に在るに喪門を把着して關了するを、也別人に
道はるべし、我家怎地 (二〇〇) 鬼を禁するかと、你の那の兄弟の (二〇一) 鳥嘴を聽きて、也別人の笑恥を恐れ
す。武大道ふ、他們的笑つて我家の鬼を禁すると説ふに由せん、我的の兄弟の説ふは是好話にして、
多少 (二〇二) 是非を省了す。那の婦人道ふ、呸、濁
物、你是男子漢、自ら主と做らずして却て別人
の調遣を聽くや。武大手を搖つて道ふ、他に由
す、他の説的の語は是 (二〇三) 金子の言語。武松去了してより十數日、武大毎日只是晏く出て早く歸る。
歸つて家裏に到れば、便ち門を關了す。那の婦人也他と鬧する幾場、向後鬧し慣れ了し、以て事と
爲さず、此より這の婦人、約莫武大の歸る時に到りて、先づ自ら去いて簾子を收了し、大門を關
上す。武大見了りて自心裏也喜び、尋思し道ふ、恁地時却て好しと。又二三日を過了し、冬已に將
に残せんとし、天色回陽微暖なり。當日武大將次に歸來せんとす、那の婦人慣了して、自ら先づ門
前に向ひ來り、那の簾子を又す。也是 (二〇四) 合に當に事有るべし、却て好し一箇人簾子邊より走過す。

【二〇〇】妖怪。

【二〇一】ばかぐち。

【二〇二】よしあしをなくす。

【二〇三】黄金の言語、貴しと也。

【二〇四】合當、ちやうど。

古より道ふ、巧没ければ話を成さずと、この婦人正に手裏に 又竿を拿る牢からず、手を失して滑將し倒去し、不端不正に、却て好し打つて那人の頭巾上に在り。那人脚を立住し了し、正に待に 發作せんと要、臉を回し來つて看る時、是箇の生的妖嬈的の婦人、先づ自ら半邊を 酥了し、那の怒氣は直に 爪哇國に鑽過し去了し、變じて笑吟吟の臉兒と作る。這婦人不是を情知し、又手して深深地に箇の萬福を道ひ、奴家一時手を失す、官人怪む休れ。那の人一頭手を把つて頭巾を 整へ、一面腰を把つて地に曲着して禮を還し 道ふ、事を妨げず、娘子請ふ尊便にせよ。却て 這の間壁的の王婆に見らる。那の婆子正に茶局 子裏の水簾底下に在て看見し了し、笑ひ道ふ、 兀誰か大官人をして這の屋簷邊に過ぐるを打せ しむ、打得て正に好し。那の人笑道ふ、到て是小人不是にして、娘子に衝撞す、怪む休れ。婦人答 道ふ、官人責めらるるを要せず。那の人又笑着して、大大地に箇の肥なる喏を唱へ道ふ、小人 敢てせずと。那の一雙眼は都て只這の婦人の身上に在り。也七八遍の頭を回了し、自ら搖搖擺擺、八字 を踏着し去了す。這の婦人、自ら簾子又竿を收了して入り去り、大門を掩上し、武大の歸來を等つ。 詩に曰く、

- 【二五】丁度うまいことがなけれ
- 【二六】又竿はさんまたの先につ
- 【二七】不端不正に、うまく。
- 【二八】怒り出す。
- 【二九】やはらかくなり。
- 【三〇】遠くの飛んでもない外國
- 【三一】休怪はごめんさい。
- 【三二】不敵はおそれ入ります。

離牢からざる時大鑽するを會す、簾を收めて面を對して好し相看る。王婆負むなけれ能く勾引す と、須らく信すべし又竿の是釣竿なるを。

再び説來る那人姓は甚名は誰、那りに居住するや、原來只是陽穀縣の一箇の 破落戸財主、縣前に 就て、箇の生藥鋪を開着す、小より也一箇の奸詐的の人、些の好拳棒を使ひ得、近來暴に發跡し、 専ら縣裏に在て些の公事を管す、人と與に 放刁把濫し、事を説ひて錢を過り、官吏に排陷す、 此に因り滿縣の人、却て他に些箇を讓る。那人 覆姓西門、單諱一箇の慶字、排行第一、人都他を 喚んで西門大郎と做す、近來發跡して錢有り、人都て他を稱して西門大官人と做す。多時ならずして 只見る西門慶 一轉哲して王婆の茶坊裏に入り來り、便ち裏邊の水簾の下に去いて坐了す。王婆笑 ひ道ふ、大官人却纔好箇の大肥喏を唱へ得るに。西門慶也笑ひ道ふ、乾娘你且來れ、我你に問はん、 間壁の這箇の雌兒是誰的の老小。王婆道ふ、他は是閻羅大王的の妹子、五道將軍的の女兒、他を問ひ て怎地する。西門慶道ふ、我你と正話を説く、笑を取るを要する休れ。王婆道ふ、大官人怎麼他の 老公を認得ざる、便ち是毎日縣門前に在りて熟食を賣る。西門慶道ふ、是棗糕を賣る徐三的の老 婆に非ざる莫きや。王婆手を搖つて道ふ、不是、若是他的ならば、正に是一對兒なり、大官人再び猜せ よ。西門慶道ふ、是 銀擔子李二的の老婆な るべきや。王婆頭を搖つて道ふ、是ならず、若

- 【二三】よたものの金持。
- 【二四】刁は悪事、作偽など、濫
- はめちやなこと。四字にて、
- わるなしたり、いひがかりな

是他的の時、也倒つては一雙なり。西門慶道ふ、
倒て敢て是(三〇)花肱膊陸小乙の妻子か。王婆
大に笑つて道ふ、是ならず、若他的の時、又是
好一對兒なり、大官人再び猜一猜せよ。西門慶
道ふ、乾娘、其實猜し着せず。王婆哈哈笑ひ道

どしたり。
【二五】 訴訟上官吏にうまくすり
こみ他人を壓す。
【二六】 二字姓が覆姓也。
【二七】 チョコ走り。
【二八】 即ち夫。

【二九】 銀かざりの箱に何か食品
を納れて賣れる男と見ゆ。其
譯名。
【三〇】 うでに膝ある陸小乙と
ふ商人ある也。
【三一】 をつと。

ふ、好し大官人をして知るを得しめん、と笑ふ一聲、他的の(三一)蓋老は便ち是街上に炊餅を賣るの
武大郎なり。西門慶跌脚して笑ひ道ふ。是人の他を三寸丁穀樹皮と叫ぶ的の武大郎にあらざる莫き
や。王婆道ふ、正に是他なり。西門慶聽了し、苦を叫起し來り、說道ふ、好(一)塊羊肉怎地狗の口裏
に落在せる。王婆道ふ、便ち這般の苦事、古より道ふ、駿馬痴漢を馱して走り、美妻常に拙夫に伴
なうて眠る、月下老偏生に是這般に配合するを要す。西門慶道ふ、王乾娘、我々に多少の茶錢を少く
や。王婆道ふ、多からず、他の些時を歇むに由せて却て算せん。西門慶又道ふ、你的兒子誰に跟いて
出される。王婆道ふ、説得ず、一箇の客人に跟いて淮上に去き、今に至り歸らず、又死活を知らず。
西門慶道ふ、却て他をして我に跟かしめざる。王婆笑ひ道ふ、若大官人の他を擡擧するを得ば、十分
の好なり。西門慶道ふ、他の歸來するを等つて却て再び計較せん。再び幾句の問話を説了し、相謝
して身を起し去了す。約莫未だ兩箇の時辰に及ばず、又王婆の店の門口に堦將し來り、簾邊に坐地し、

武大門前に朝着して半歇す。王婆出來り道ふ、大官人、箇の(三二)梅湯を喫せよ。西門慶道ふ、最も好し、
多く些の(三三)酸を加へよ。王婆一箇の梅湯を做了し、雙手西門慶に遞與す。西門慶慢慢地に喫了し、
盞托卓子上に放在す。西門慶道ふ、王乾娘、你這の梅湯は做得好し、多少の屋裏に在る有る。王婆
笑道ふ、老身一世の媒を做了す。那ぞ一箇を討ねて屋裏に在かん。西門慶道ふ、我々に梅湯を問ふ、
你却て説いて媒と做す、多少差了り。王婆道ふ、老身只聽得たり大官人の這媒做し得て好しと問ふ
と、老身只道ふ媒を做せと説ふと。西門慶道ふ、
乾娘、你既に是(三四)撮合山ならば、也我が與に
(一)頭の媒を做せ、(二)頭の好親事を説かば我
自ら重重に你に謝せん。王婆道ふ、大官人、
你的宅上の大娘子知るを得る時、婆子の這臉怎
で(三五)耳刮子を喫し得ん。西門慶道ふ、我家の大娘子最も好し、極めて是人を容れ得、見今也幾箇の
身邊の人を討ねて家裏に在り、只是一箇の我意に中り得るの沒し、你這般の好的あらば、我が與に一
箇を主張し、便ち來りて説くも妨げず、就ち是(三六)回頭の人も也好し、只我意に中り得るを要す。王
婆道ふ、前日一箇の倒つて好き有り、只怕る大官人の要せざるを。西門慶道ふ、若好き時、你我が與
に説成し了せよ、我自ら你に謝せん。王婆道ふ、生れ得て十二分の人物、只是年紀大些。西門慶道ふ、

【三二】 梅は媒に通ず。
【三三】 酸は擦に通ず、そそのか
し引出す意なり。
【三四】 取持。
【三五】 耳刮子前に出づ。耳を

強く引げる也。それをやられ
てはたまらぬ。
【三六】 一度縁づきて回りたる
女。

便ち(一三)一兩歳を差するも也打緊ならず、眞箇に幾歳なる。王婆道ふ、那の娘子戊寅の生虎に屬する、新年恰も好し九十三歳。西門慶笑ひ道ふ、你看よこの(一三)風婆子、只(一四)風臉を扯着して笑を取らんとす。西門慶笑了し、起身し去り、看看天色黑了す。王婆却纔に燈を点上し來り、正に門を關せん、只見る西門慶又暫將し來り、逕に簾底下の那の座頭上に去き坐了し、武大の門前に朝着し、只願望む。王婆道ふ、大官人、箇の(一四)和合湯を喫せば如何。西門慶道ふ、最も好し、乾娘、甜を放ち了せよ。王婆一盞の和合湯を點し、西門慶に遞與し喫せしむ。箇の(一五)一歌を坐了し、起身し道ふ、乾娘、帳目に記了せよ、明日一發に錢を還さん。王婆道ふ、妨げず、伏して惟みるに安置せよ、來日早く請ふ過訪せよ。西門慶又笑了して去る。當晩事無し。次日清早王婆却纔に門を開く、眼を把つて門外を見る時、只見る西門慶又門前に在りて、(一六)兩頭に來往暫す。王婆見了して道ふ、(一七)這箇の子哲し得て緊し、你看よ我些の甜糖を着けて抹して這厮の鼻子上に在き、只他をして舐め着せざらしめん、(一八)那厮は縣裏に人を討ねて便宜するを會す、且他をして老娘の手裏に來りて些の敗缺を納れしめん。原來這箇茶坊を開く、的王婆も、也是(一九)本分に依らざる、端的に這の

婆子、

言を開けば(二〇)陸賈を欺き、口を出せば隨何に勝る。隻鸞孤鳳、霎時間に交仗して雙と成り。寡婦鰥男、(二一)一席話に搬唆して對を捉る。(二二)略妙計を施せば、阿羅漢をして比丘尼を抱住せしめ、稍機關を用ふれば、(二三)李天王をして鬼子母を攫定せしむ。甜言説誘すれば、(二四)男封涉の如きも也心を生じ、軟語調和すれば、女麻姑に似たるも能く念を動かす。教唆し得て(二五)織女も相思を害し、調弄し得て嫦娥も配偶を尋ぬ。且説く這の王婆、却纔に門を開き得て、正に茶局子裏に在りて炭を生し、茶鍋を整理し張見す。西門慶が早晨より門前に在りて暫する幾遭し、一逕茶房裏に進入し來り、水簾底下に武大門前を望着し、簾子裏に坐了して看る。王婆只(二六)看見せざるを做して、只願茶局裏に在りて風爐子を煽し、出來りて茶を問はず。西門慶叫道ふ、乾娘、兩盞の茶を點じ來れ。王婆應じ道ふ、大官人來了、連日見る少し、且請ふ坐せよ。便ち濃濃的に兩盞の薑茶を點し、將來して卓子上に放在す。西門慶道ふ、

- 【一三】 二歳年上でも大事な。
- 【一四】 風婆子、只(一四)風臉を扯着して笑を取らんとす。
- 【一五】 一歌を坐了し、起身し道ふ、乾娘、甜を放ち了せよ。
- 【一六】 兩頭に來往暫す。
- 【一七】 這箇の子哲し得て緊し、你看よ我些の甜糖を着けて抹して這厮の鼻子上に在き、只他をして舐め着せざらしめん、(一八)那厮は縣裏に人を討ねて便宜するを會す、且他をして老娘の手裏に來りて些の敗缺を納れしめん。
- 【一八】 那厮は縣裏に人を討ねて便宜するを會す、且他をして老娘の手裏に來りて些の敗缺を納れしめん。
- 【一九】 本分に依らざる、端的に這の
- 【二〇】 陸賈を欺き、口を出せば隨何に勝る。
- 【二一】 寡婦鰥男、一席話に搬唆して對を捉る。
- 【二二】 略妙計を施せば、阿羅漢をして比丘尼を抱住せしめ、稍機關を用ふれば、(二三)李天王をして鬼子母を攫定せしむ。
- 【二三】 李天王をして鬼子母を攫定せしむ。
- 【二四】 男封涉の如きも也心を生じ、軟語調和すれば、女麻姑に似たるも能く念を動かす。
- 【二五】 織女も相思を害し、調弄し得て嫦娥も配偶を尋ぬ。
- 【二六】 看見せざるを做して、只願茶局裏に在りて風爐子を煽し、
- 【二七】 正路一遍のものならず。
- 【二八】 陸賈隨何古の説客。
- 【二九】 暫時に一緒に在り、一席話に埒が明きてしまふ。
- 【三〇】 計を施せば無理なことも變なことも出來上つてしまふ。
- 【三一】 李天王は荒き神、鬼子母は女の荒き神。
- 【三二】 封涉、麻姑は女仙人。
- 【三三】 星の織女も戀の病になり、月宮の嫦娥も男をほしがらん。
- 【三四】 知らぬ顔。
- 【三五】 店で風爐を煽いでゐるばかり。

乾娘我に相陪し、箇の茶を喫せよ。王婆哈哈笑ひ道ふ、我又是影射的ならず。西門慶也笑ふこと一回、問道ふ、乾娘、間壁は甚を賣る麼。王婆道ふ、他の家、蒸河漏子熱盪し、溫和大辣酥を賣拖す。西門慶笑ひ道ふ、你看よこの婆子、只是風す。王婆笑ひ道ふ、我風せず、他の家に自ら親老公有り。西門慶道ふ、乾娘、你と正經の話を説ふ、説ふ他の家、如法に好炊餅を做得ると、我他に問ひて三五十箇を做さんと要、知らず出たるか家に在るか。王婆道ふ、若炊餅を買はんと要せば、少間他が街上より回り來るを等て、何ぞ門に上り戸に上るを消ひ得ん。西門慶道ふ、乾娘、説的是なり。茶を喫了し、坐する一回、又說道ふ、乾娘、帳目に記了せよ。王婆道ふ、事を妨げず、老娘牢牢寫して帳上に在り。西門慶笑了し去る。王婆只茶局子裏に在りて張る時、冷眼に西門慶を睨見するに、又門前に在りて東に廻し去り、又看一看して、西に走轉し來り、又睨一睨す、走了する七八遍、逕に茶坊裏に挿入し來る。王婆道ふ、大官人行くこと稀なり、好幾時か面を見ざりき。西門慶笑將起來し、身邊に去いて一兩來の銀子を摸出し、王婆に遞與して說道ふ、乾娘、權に收め了して茶錢と做せ。婆子笑道ふ、何ぞ許多きを消得ん。西門慶道ふ、只顧放着せよ。婆子暗暗地に喜歡して道ふ、來了す、この刷子當に敗る

- 【一五】 影射的、目的の代りのも
- 【一六】 きちがひ。
- 【一七】 勝手有り。
- 【一八】 上手に。如法にといふ語はあつき也。温字、金本湯に作る。王婆の此語、むちやなこと也。西門をばぐらかす也。
- 【一九】 刷子云云、この西門慶錢を使ふべしとなり。

べしと。日銀子を把つて來りて藏了し、便ち道ふ、老身大官人を見るに此の渴有り、箇の煎葉兒茶を喫す、如何。西門慶道ふ、乾娘如何ぞ便ち猜得し着する。婆子道ふ、甚麼の猜し難き有らん、古より道ふ、門に入りて問ふ休れ榮枯の事、容顏を觀着すれば便ち知るを得、老身異樣蹊蹊作怪の事は都て猜得し着す。西門慶道ふ、我一件心上の事有り、乾娘若猜し着的着する時は、你に五兩の銀子を輸與せん。王婆笑ひ道ふ、老娘また三智五猜を消ひず、只一智便ち箇の十分を猜せん、大官人你、耳朶を把り來れ、你この兩日脚步緊に、趕趁し得て頻なるは、以定是隔壁の那箇の人を記掛し着す、我がこの猜如何。西門慶笑起し來り道ふ、乾娘、你端的に智は隨何に賽ひ、機は陸賈に強る、乾娘を瞞せずして説かん、我恁地なるを知らず、他に那日簾子を又せられたる時、この一面を見了してより、我が三魂七魄を收められたる的一般なり、只是道理を做して脚を入る處没し、知らず你手段を弄するを會するや。王婆哈哈的に笑起し來り道ふ、老身大官人を瞞せずして説かん、我が家茶を賣るは、鬼打更と叫做す、三年前の六月の初三、雪下の那の一日一箇の泡茶を賣了してより、直に如今に到るまで、發市せず、專一に此の

- 【二〇】 のどかわきの癖。
- 【二一】 無。
- 【二二】 お化が時の鐘を撞くを鬼打更といふ、無い事の喻なり。
- 【二三】 茶が賣れず。
- 【二四】 あれこれで飯をくうてゐる。
- 【二五】 道をつけ脚を入る處が
- 【二六】 發市せず、專一に此の
- 【二七】 雜趣に靠りて

口を養ふ。西門慶問道ふ、怎地を難越と叫做す。王婆笑ひ道ふ、老身、頭爲るは是(二七)媒を做す、又牙婆を做すを會す、也(二七)抱腰を會し、也(二七)收小的を會し、也風情を説くを會し、馬泊六を做すを會す。西門慶道ふ、乾娘端に我が與に這件の事を説得して、成らば便ち十兩の銀子を送りて你に與へて棺材本と做さん。王婆道ふ、大官人、你我が説を聽け、但凡そ(二七)握光的の兩箇の字最も難し、

五件の事の俱に全きを要し、方纔に行ひ得、第一件は(二七)潘安的の貌なり、第二件は驢兒大的の(二七)行貨なり、第三件は(二七)鄧通の似く錢有るを要し、第四件は(二七)小就し、(二七)綿裏針の忍耐を要し、第五件は(二七)間工夫を要す。此の五件を潘驢鄧小間と喚做す、五件俱に全くして此事便ち獲着す。西門慶道ふ、實に你を瞞せずして説はん、この五件の事、我都て些有り、第一、我的の面兒は潘安に比し得ずと雖も、(二八)也充得し過ぎん。第二に、我小時より也好大龜を養ひ得たり。第三に我が家裏また頗る(二八)貫伯の錢財有り、鄧通に及ばずと雖も、也頗る得過す。第四は我最も耐へ得、他便ち我を打つこと四百頓するも、我が他に一下を回すを想ふ休れ。第五は、我最も間

- 【二七】第一は媒をなす。又すあひ、口錢取り。
- 【二七】産婦の世話、嬰兒の取上げ。
- 【二七】色事の世話、とりもち、男女密會の宿。
- 【二七】延緩を俗に推といふ。又挨と同じ。光は字の如し、出來るといふ意になる也。光を取らうとする也。推光にて自然密通といふ意味になる。
- 【二七】潘安は古の美男子。
- 【二七】行貨は品物。
- 【二七】鄧通は古の富者。
- 【二七】小は大の反、あはることの反、ちひさくなり居る也。
- 【二七】綿裏針は衣中の針也。
- 【二七】ひまある事。
- 【二七】どうやら及第するだらう。
- 【二八】貫百なり、幾百十貫の。

工夫有り、然らずば如何を來り的恁頻ならん、乾娘你只我を作成して完備し了する時、我自ら重(二八)重你に謝せん。王婆道ふ、大官人、然く你五件の事都て全しと説くと雖も、我知道す、還一件事ありて(二八)打攪するを、也多きは是割地に得ず。西門慶道ふ、你且道へ甚麼の一件事打攪するや。王婆道ふ、大官人、老身の直言を怪む休れ、但凡そ握光最も難し、十分に光る時、錢を使ひて九分九厘に到るも、也成就し難き處有り、我知る你從來慳吝にして、胡亂に便ち錢を使ふを肯んせず、只這の一件打攪なり。西門慶道ふ、這箇は極めて容易に醫治すべし、我只你的の言情を聽かば(二八)便了せん。王婆道ふ、若是大官人肯て錢を使ふ時、老身一條の計有り、便ち大官人をして這の雌兒と一面を會せしめん、只知らず官人の肯て我に依るや麼を。西門慶道ふ、怎地を揀まず、我都て你に依らん、乾娘甚の妙計有る。王婆笑ひ道ふ、今日晚了す、且回り去つて半年三箇月を過して却て來れ商量せん。西門慶便ち跪下して道ふ、乾娘、(二八)撒料を要する休れ、你我を作成する則箇、王婆笑ひ道ふ、大官人却て又慌了す、老身の那の(二八)條の計は是箇の(二八)上着、然く(二八)武成王の廟に入り得ずと雖も、端的に孫武子の女兵を教ふるより強り、(二八)十捉に九着す、大官人我今日你に對し説はん、這箇の人は原是清河縣の大戸人家の討め來れる的の養女、却て一手の(二八)好針線を做し得、大官

- 【二八】打攪は邪魔なり、割地不明。
- 【二八】宜しからん。
- 【二八】もたせぶり、芝居めかし
- 【二八】縫物上手なり。
- 【二八】上等の策。
- 【二八】孔明廟。
- 【二八】十に九つは成功せん。
- 【二八】をうまく仕上げてくれ。
- 【二八】孔明廟。
- 【二八】十に九つは成功せん。
- 【二八】縫物上手なり。

口を養ふ。西門慶問道ふ、怎地を難越と叫做す。王婆笑ひ道ふ、老身、頭爲るは是(二七)媒を做す、又牙婆を做すを會す、也(二七)抱腰を會し、也(二七)收小的を會し、也風情を説くを會し、馬泊六を做すを會す。西門慶道ふ、乾娘端に我が與に這件の事を説得して、成らば便ち十兩の銀子を送りて你に與へて棺材本と做さん。王婆道ふ、大官人、你我が説を聽け、但凡そ(二七)握光的の兩箇の字最も難し、

人、你便ち一疋の白綾、一疋の藍紬、一疋の白絹を買ひ、再び十兩の好綿を用つて、都て把來つて老
身に與へよ、我却て走將過去して、【二八九】 他に問ひて茶喫を討め、却て這の雌兒と說道ふ、箇の施主官人
有り、我に一套の送終の衣料を與ふ、特に來りて唇頭を借る、娘子を、【二九〇】 央及し、老身の與に箇の好
日を揀め、去つて箇の裁縫を請うて來り做さしめんと。他若我が這般に説くを見て我を保せざる時、
此事便ち休了す。他若我の替に做さんと説ひて、我が裁縫を叫ぶを要せざる時、這便ち一分の光有
り了す。我便ち他を請うて家に來り做さしめん。他若將來りて我が家裏に做さんと説ひて、過來する
を肯んせずば、此事便ち休了す。他若歡天喜地して、我來り做さん就ち你
の替に裁せんと説ふ時、這の光二分有り了す。若是肯て我が這裏に來りて
做る時、却て些の酒食點心を安排して他を請ふを要す。【二九一】 第一日は你也來る
を要せず。第二日他若便ならずと説ひて、當時定めて家に將去きて做るを要せば、此事便ち休了す。
他若前に依りて、肯て我家に過りて做す時は、這の光便ち三分有り了す。這の一日你也來到するを要
せず。【二九二】 第三日晌午前後、你整整齊齊打扮了來り、咳嗽を、號と爲し、你便ち門前に在りて說道ふ、
怎地連日王乾娘を見ざる。我便ち出來りて你を請うて房裏に入り來る。若是他你の入來るを見て便ち
起身して跑了し歸去らば、我他を拖住し難道、此事便ち休了す。他若你的入來るを見て身を動かさざ
る時、這の光便ち四分有り了す。坐下する時便ち雌兒に對し說道ふ、這箇は便ち是我に衣料を與ふ

的の施主官人、他に、【二九三】 虧殺すと、我大官人の許多の好處を誇る。你便ち他的の針線を賣弄し、若
是他來つて、兜攪應答せざれば此事便ち休了す。他若口裏に應答説話する時、這光便ち五分有り
了す。我却て說道す、得難し這箇の娘子、我が與に作成して手を出して做す、你兩箇の施主に、【二九四】 虧
殺す、一箇は出錢的、一箇は出力的、是老身の、【二九五】 路岐相央むにあらず、得難し這箇の娘子這里
に在り、官人好し箇の主人と做つて老身の替に娘子の與に、【二九六】 澆手せよ、你便ち銀子を取出し來り、
我を央み買へ。若是他身を抽き便ち走る時は、他を扯住するを成さず、此事便ち休了す。他若是身を動
かさざる時、事務成り易し、這光便ち六分有り。我却て銀子を取し、門を出づるに臨み、他に對し道
ふ、娘子を勞する有り、大官人を相待ちて坐一坐せしめよ。他若也起身し走り了して家に去る時、我
也他を阻當し難し、此事便ち休了す。若是他身を起して走動せざる時、此事又好了。這光便ち七
分有り了す。我が東西を買得て來り、擺べて卓子上に在き、我便ち道ふ、娘子、且、【二九七】 生活を收拾し、
一杯兒の酒を喫せよ、得難し這位の官人の、【二九八】 壞釵せるをと。他若你と同卓に喫するを肯せざる時、
走了し回去る、此事便ち休了す。若是他只口裏に去らんと要と説ひて、却て身を動かさざる時、此事又
好了、這光便ち八分有り。他の喫し得て酒濃やかなる時、正に説得て、【二九九】 港に入るを待ち、我便ち
【三〇〇】 推し道ふ、酒沒しと、再你をして買はし
む、你便ち又我を央み去つて買はしむ、我只去

【二八九】 ひとくせわになりま

【二九〇】 かまひ、へんじせれば。
【二九四】 いかい御世話になる、有

いて酒を買ふを做して、門を把つて拽上し、
他と兩箇を關して裏面に在く、他若焦躁し
了りて歸去らば此事便ち休了す。他我が門を拽
上するに由せて焦躁せざる時、這光便ち九分有
り了す。只一分の光を欠き了して便ち完就す。
這の一分倒つて難し。大官人你房裏に在りて
幾句の甜淨的の話を着して説將入去し、你却
て躁暴す可からず、便ち去つて動手動脚すれば、
事を打攪し了す、那時我你に管せず、先づ假に袖子
を把つて卓上に在りて一雙の筋を拂落し去る。
你只地下に去いて筋を拾ふを做し、手を將て他の脚
上に去いて 捏一捏せよ。他若閣將起し來らば、
我自ら來りて 搭救せんも、此事也便ち休了し、
再び也成るを得難し。若是他聲を做さざる時、
此是十分光了、他必然意有り、這の十分の事做し得て
成らん、這條の計策如何。西門慶聽罷りて大に喜び道ふ、
然く 凌烟閣に上り得ずと雖も、端的
好計なり。王婆道ふ、我に許すの十兩の銀子を忘るるを要せざれ。
西門慶道ふ、但得たり一片
橋皮喫するを、便ち 洞庭湖を忘了する莫れ、
這條の計は幾時か行ふべき。王婆道ふ、
只今晚に在りて便ち回報有り、我如今武大の 未だ歸らざるを趣ひて、
走過し去りて細細地に他を説誘せん、
你

【九五】路岐は路のべ、一寸といふところ也。
【九六】難得は幸になり。
【九七】滄手は慰勞の馳走。
【九八】生活は仕事、即裁縫也。
【九九】壞鈔、錢を費すこと。
【一〇〇】入港は字の如し、使ひざま時によりて種種なり、ここはうまい壺にはまりたる時。
【一〇一】かこつけ。
【一〇二】ひれる、つれる。
【一〇三】いひとき、たすける。
【一〇四】凌烟閣 國家に功を立てし人人を畫圖せるところ。
【一〇五】洞庭附近橋の出る地也。
【一〇六】歸らぬ間に。
よき調子になりたる時と云はんが如し。

却て便ち人をして 綾綃絹疋并に綿子を將ち來らしめよ。西門慶道ふ、
乾娘の這件の事を完成し得るを得ば、如何ぞ敢て信を失せん。別を王婆に作し、便ち市上の綃綃絹裏に去いて綾綃絹段并に十兩の 清水好綿を買了し、家裏より箇の伴當をして包袱を取りて包了し、
五兩の碎銀を帶了して、逕ちに茶坊裏に送入す。王婆這物を接了し、伴當に分付して回去らしむ。
詩に曰く、
豈是風流争ふ可きに勝へんや、迷魂陣裏奇兵を出す。安排す十面捭光の計、
祇取る身を亡して陥坑に入る。

【一〇七】清水は、眞白な、さらしたる。
【一〇八】借與、貸與と同じ也。
【一〇九】身體よわく病勝なれば、つまりの事あらんことを怕る。
【一一〇】最後の衣服。日本の經帷子といふほど簡ならず、支那の送終衣服は最も立派にする習也。

這の王婆後門を開了し、武大家裏に走過し來る。那の婦人接着し、請うて樓上に去いて坐地す。那の王婆道ふ、娘子、怎地貧家に過ぎりて茶を喫せざる。那の婦人道ふ、便ち是這の幾日、身體不快にして、走去するに懶し。王婆道ふ、娘子家裏に唇日有りや麼、老身に 借與して看一
看せしめよ、箇の衣を裁つ日を選むを要す。那婦人道ふ、乾娘甚麼の衣裳を裁する。王婆道ふ、便ち是老身 十病九痛、些の山高水低有るを怕る、預め先づ些の 送終の衣服を製辦するを要す、得難し近處の一箇の財主、老身の這般に説くを見、布施して我に一套の衣料綾綃絹段を與へ、又若干の好綿を與ふ、家裏に放在す、一年有餘、勾做す能はず、今年身體の好生濟らざるを覺道し、又如今の

閏月に撞着す、この兩日を越ひて做すを要す、又那の裁縫に勸請して只生活忙と推せられて肯て來り做さず、老身説ひ得ず這等の苦を。那の婦人聽了り笑道ふ、只怕る奴家の做得て乾娘の意に中らざることを、若し嫌はざる時、奴手を出して乾娘の與に做る如何。那の婆子這話を聽了し、笑を堆下し來り、說道ふ、若娘子の貴手の做すを得る時、老身便ち死し來るも也好處を得去らん、久しく聞得たり娘子の好手針線を、只是敢て來りて相央ます。那の婦人道ふ、這箇何ぞ妨げ得ん、既に是乾娘に許了す、務めて乾娘の與に做了するを要す、曆頭を將ち去つて人をして箇の黃道好日を揀ましめ、奴便ち你的與に手を動かさん。王婆道ふ、若娘子の肯て老身の與に做す時、娘子は是一點の福星なり、何ぞ日を選むを用ひん、老身また前日人を央み看來る、說道ふ、明日是箇の黃道好日、老身只道ふ、衣を裁つ黃道日を用ひすと、他を記せず。那の婦人道ふ、歸壽衣は正に黃道日を要す好し、何ぞ別に日を選ぶを用ひん。王婆道ふ、既に是娘子肯て老身を作成する時、大膽只是明日より起動して、娘子寒家に到り則箇。那の婦人道ふ、乾娘必すしも 將過し來らば做し得ざるにあらじ。王婆道ふ、便ち老身也娘子の生活を做すを看るを要す則箇、又怕る家裏人の門前を看る没し、那の婦人道ふ、既に是乾娘恁地説ふ時、我明

【三二】仕立屋に取しめられて忙しいと云はれ、来てくれず。
【三三】曆の上の最もよろしき日也。
【三三】もつてまゐらでは出來ぬといふことはあるまい、行か

なくてもですに。
【三四】仕事を下さるところを見たくもあり、又店も打棄置くわけにもならぬ故、來て縫つてもらひたしと也。

日飯後便ち來らんと。那の婆子千恩萬謝し、樓を下り去了す。當晚西門慶的話を回復し、後日准來を約定す。當夜話無く、次日清早王婆房裏を收拾し、乾淨にし、些の線索を買了し、些の茶水を安排し了し、家裏に在りて等候す。且説く武大早飯を喫了し、擔兒を打當了し、自ら出去つて道路を做す。那の婦人簾兒を把つて掛了し、後門より王婆の家裏に走過し來る。那の婆子歡喜限り無く、房裏に接入して坐下せしめ、便ち濃濃地に、(一)道の茶を點じ、些の 出白松子胡桃肉を撒上し、這婦人に遞與して喫了せしめ、卓子を乾淨に拭し得て、便ち那の綾絹細段を將出し來る、婦人尺を將て長短を量了し、裁得て完備し、便ち縫起し來る。婆子看了り、口裏に 住聲せざる價に喝采し道ふ、好手段、老身また六七十歳を活了せるも、眼裏眞箇に曾て這般の好針線を見ず。那の婦人縫ひて日中に到り、王婆便ち些の酒食を安排して他を請ひ、一筋の麵を下了し、那の婦人に與へて喫了せしめ、再び 一歌を縫了して、將次晚來す、便ち生活を收拾起して自ら歸去る。恰も好し武大歸り來り、空擔兒を挑着して門に進む。那の婦人門を拽開し、簾子を下了す。武大屋裏に入り來り、老婆の面色微紅なるを見し、便ち問道ふ、你那裏に酒を喫し來る。那の婦人應じ道ふ、便ち是間壁の王乾娘、我を央みて送終的の衣裳を做

【三五】荷をこしらへて。
【三六】道路を做す、ここには商買をする也。
【三七】食べられる松のみ、くるのみ。
【三八】のべつにほめる。價はほ

ど也。
【三九】よいうでた。
【四〇】ひとはし、一碗のと同じ、麵は即支那そば也。
【四一】又一トしきりぬふ。

る、日中些の點心を安排して我を請ふ。武大道ふ、阿呀、他的を喫するを要せず、我門また他を央及するところ有り、他便ち你を央みて(一)件(二)把の衣裳を做得るも、你便ち自ら歸り來りて些の點心を喫せよ、他を攪惱するを得るに値らず、你明日倘或は再び去り做す時、些の錢を帯びて身邊に在り、也些の酒食を買ひて他に與へて禮を回せ、常言に道ふ、遠親は近鄰に如かずと、人情を失了するを要する休れ、他若是肯て你的還禮を要せざる時は、你便ち只是家に拿了來り、做去つて他に還せ。婦人聽了りて、當晩話無し。詩有り證と爲す。

奈す可き度婆計を設くる深し、大郎 混沌因を知らず。錢を帯び酒を買つて奸詐に耐い、却て婆娘を把つて人に 白送す。

【三三】混沌はわからぬ也、因はわけ、根本。
【三三】白はむざむざ、ただ。

且説く、王婆子設計已に定まる、潘金蓮を賺して家に來らしむ。次日飯後武大自ら出たり了す。王婆便ち暫過し來り相請うて去つて他の房裏に到り、生活を取出し、一面縫將起來す。王婆自ら一邊茶を點じ來り喫せしむ。話下に在らず。看看日中す、那の婦人一貫を取出し、王婆に付與し、說道ふ、乾娘、奴物と杯酒を買ひ喫せん。王婆道ふ、阿呀、那里に這箇の道理有らん、老身娘子を央及て這裏に在り生活を做す、如何ぞ顛倒して娘子をして錢を壊せしめん。那の婦人道ふ、却て是拙夫奴に分付し來る、若還乾娘外にせらるる時は、只是家に將了去つて做して乾娘に還さん。那の婆子聽了りて、連聲に道ふ、大郎直恁地に事を曉る、既に然く娘子這般に説く時、

老身權に且收下せん。這の婆子 這事を打脱了するを生怕し、自ら又錢を添へ去つて些の好酒好食希奇の菓子を買ひ來り、慇懃に相待つ。看官聽說せよ、但凡を 世上の婦人、你的十八分精細なるに由すも、人に小意見に過繼せらるれば、十箇に九個は道兒に着す。再説く王婆は點心を安排し、那の婦人を請うて酒食を喫せしむ、再び一歌を縫了す、看看晚來す、千恩萬謝歸去し了す。話絮繁を休む。第三日早飯後、王婆只武大の出去り了するを張り、便ち後頭に走過し來り叫道ふ、老身大膽。那の婦人樓上より下り來り道ふ、奴却て來らんと待るなり。兩箇厮見し了し、王婆房裏に來到して坐下し、生活を取過し來りて縫ふ。那の婆子隨即盞茶を點じ來り、兩箇喫了す。那の婦人看看縫ひて晌午前後に到る。却て説く西門慶這の一日に 巴し到らず、(一)頂の新頭巾もて裏み、一套の整整齊齊の衣服を穿ち、三五兩の碎銀子を帶了し、逕に這の紫石街に投じ來る。茶坊の門首に到得て、便ち咳嗽して道ふ、王乾娘、連日如何を見えざる。那の婆子 瞧科し、便ち應へ道ふ、兀誰か老娘を叫ぶや。西門慶道ふ、是我なり。那の婆子趕ぎ出來り、看了して笑道ふ、我只道ふ是誰ぞと、却て原來是施主の大官人、你來り得て正に好し、且請ふ你入去つて看一看

【三三】這事をとりはづさんことを恐れ。
【三五】女といふものは人なみすぐれて精細に賢きも、人に機嫌をとられて、萬般へいへい云はれ、おだてられれば、十に九つは其手に乗るものなり。
【三六】こゝに大膽といふは邦語、ごめんなさいと云はんが如し。
【三七】巴不到這一日、這一日をまちかたて。
【三六】睡は見る也、睡科にて看やりて也。

よと、西門慶の袖子を把つて一拖し、房裏に（三九）拖進す。那の婦人を看着して道ふ、這箇は便ち是那の施主、老身に這の衣料を與ふるの官人。西門慶那の婦人を見たり、便ち箇の喏を唱ふ。那の婦人慌忙に生活を放下し、萬福を還了す。王婆却て這の婦人を指着して西門慶に對して道ふ、得難し官人老身に段疋を與ふ、放了一年、曾て做し得ず、如今又這位の娘子に（三〇）虧殺し、手を出して老身の與に成全を做し了す、眞箇に是（三一）布機も也似たる好針線、又密、又好、其實得難し、大官人你且看一看せよ。西門慶把起し來りて看了し、喝采し、口裏に說道す、這位の娘子怎地にして這手の好生活を傳へ得たる、神仙一般の手段なり。那の婦人笑道ふ、官人笑話する休れ。西門慶王婆に問ひ道ふ、乾娘、敢て問はず這位は是誰が家宅上の娘子。王婆道ふ、大官人你猜せよ。西門慶道ふ、小人如何ぞ猜し得て着せん。王婆吟吟の笑ひ道ふ、便ち是間壁の武大郎的の娘子、前日又竿打得て疼ますや、大官人便ち忘れ了る。那の婦人險を赤着して便ち道ふ、那日奴家偶然手を失す、官人（三二）記懐せんとする休れ。西門慶道ふ、那裏の話を説く。王婆便ち（三三）接口して道ふ、這位の大官人、一生和氣、從來曾て恨を記せず、極めて是好人なり。西門慶道ふ、前日小人認め得ず、原來却て是武大郎的の娘子、小人只認め得たり大郎一箇の家を養ひ經紀するの人、且是街上に在りて些の

【三九】 ひき入る。
【三〇】 虧殺、おかげでと譯す。
最も近し。
【三一】 機で織りたやうな針目もこまかき上手の裁縫。

【三二】 何様か御忘れなすつて下さい。
【三三】 なんの、なんでもないといふ也。
【三四】 ひつとりて道ふ。

買賣を做し、大大小小曾て一箇の人に惡まれたせず、又會く錢を賺す、又且好性格、眞箇に這等の人を得難し。王婆道ふ、知る可し、娘子這箇の大郎に嫁し得てより但是事有れば百依百隨するを。那の婦人應じ道ふ、拙夫は無用の人、官人笑話を要する休れ。西門慶道ふ、娘子差へり、古人道ふ、柔軟は是立身の本、剛強は是禍を惹くの胎、娘子的の大郎の似く所爲良善なる時、萬丈の水涓滴の漏るる無きもの。王婆（三五）獵鼓兒を打着して道ふ、説的是なりと。西門慶獎了一回、便ち坐して婦人對面に在り。王婆又道ふ、娘子、你這箇の官人を認むるや。那の婦人道ふ、奴は認めざる也。婆子道ふ、這箇の大官人、是這の本縣一箇の財主、知縣相公も也他と來往す、西門大官人と叫做す、萬萬貫の錢財、箇の生薬舗を開着して縣前に在り、家裏、錢は北斗に過ぎ、米は陳倉に爛る、赤的は是金、白的は是銀、圓的は是珠、光的は是寶、也犀牛頭上の角有り、亦大象口中の牙有り。那の婆子只顧西門慶を誇獎し、口裏（三六）假嘈す。那の婦人就ち頭を低了し針線を縫ふ。西門慶潘金蓮を見るを得て十分情思、恨むらくは就ち一處と做らざるを。王婆便ち去いて兩盞の茶を點じ來り、一盞を遞して西門慶に與へ、一盞は這の婦人に遞與す。說道ふ、娘子大官人を相待ち則箇。茶を喫し罷む、便ち些の眉目情を送る有るを覺ゆ。王婆西門慶を看着し、一隻手を把つて臉上に在りて摸す。西門慶心裏に瞧科し、已に五分有るを知る。王婆便ち道ふ、大官人來らざる時、老身也敢て宅上來りて相請はず、一には

【三五】 所謂たいこたたく也。
【三六】 めちやくちやにほめる

【三七】縁法、二には乃ち來り得て恰好なり、常言に道ふ、一客二主を煩はさずと、大官人は便ち是錢を出
【三六】御馳走をせよと也、澆手
【三九】御馳走になるに及ばず。
【四〇】それは御免、かにして。
【四一】できてゐる。

【三二】御縁で。
【三五】御馳走をせよと也、澆手
【三六】御馳走になるに及ばず。
【三七】それは御免、かにして。
【三八】できてゐる。

【三九】御馳走をせよと也、澆手
【四〇】御馳走になるに及ばず。
【四一】それは御免、かにして。
【四二】できてゐる。

却て説く、那の婦人酒を接して手に在り、那の西門慶筋を拿起し來り道ふ、乾娘、我が替に娘子を勸め
て此箇を請へ。那の婆子、好的を揀みて那の婦人に遞將し過來して與へて喫せしむ。一連に三巡酒を
斟了て、那の婆子便ち去つて酒を盪し來る。西門慶道ふ、敢て動問せず、娘子青春多少ぞ。那の婦人
應へ道ふ、奴家、虚しく度りて二十三歳なり。西門慶道ふ、小人、癡長五歳なり。那の婦人道ふ、
官人、天を將て地に比す。王婆便ち口を挿み道ふ、好箇の

【四三】くつろぎで。
【四四】武都頭の籬かたければ、
犬入らずの語なり。
【四五】五歳年上也。
【四六】もつたない、御くらへ

婆盤饌を將て都て擺して卓子上に在り、三人坐定まり、酒を把つて來り斟む。この西門慶酒盞を拿起
し來り説道ふ、娘子此杯を滿飲せよ。那の婦人謝し道ふ、多く官人の厚意を感ず。王婆道ふ、老身娘
子の洪飲を知得たり、且請ふ、開懷して兩盞兒を喫せよ。詩有り證と爲す、
從來男女筵を同じうせず、俏を賣り姦を迎ふ最も憐む可し。記せずや都頭 昔日の語、犬兒今已
に籬邊に到る。
又詩に曰く、

【四三】くつろぎで。
【四四】武都頭の籬かたければ、
犬入らずの語なり。
【四五】五歳年上也。
【四六】もつたない、御くらへ

るのみならず、諸子百家皆通ず。西門慶道ふ、却て是【四四】那裏に去いて討ねん、武大郎好生福有り。王婆便ち道ふ、是【四三】老身是非を説くならず、大官人宅裏に枉げて許多有り、那裏に一箇の這の娘子に趕ひ得て上るのを討ねん。西門慶道ふ、便ち【四二】是這等一言盡し難し、只是小人命薄くして曾て一箇の好的を招き得ず。王婆道ふ、大官人の先頭の娘子須ち好かりき。西門慶道ふ、説ふを休めよ、若是我が先妻在りし時、却て怎地ならず、家に主無ければ屋倒さまに墜つ、如今枉げて自ら三五七口の人有りて【四五】飯を喫するも、都て事を管せず。

那の婦人問道ふ、官人恁地時、大娘子歿して幾年を得たる。西門慶道ふ、【四六】説得ず、小人先妻は是微末の出身、却て倒つて百伶百俐、是件は都て小人に替り得たり、如今不幸にして他歿了して、已に三年を得たり、家裏の事は、都て七顛八倒、何も小人只是走了出來るが爲に、家裏に在る時は、便ち【四七】歐氣要んとす。那の婆子道ふ、大官人老身の直言を怪む休れ、你的【四八】先頭娘子、また武大の娘子の這の手の針線有る没し。西門慶道ふ、便ち【四九】是是此の娘子の這の【五〇】表の人物没し。那の婆子笑ひ道ふ、官人、你的養ふ的の外宅、東街上に在り、如何ぞ老身を請じて去いて茶を喫せしめざる。西門慶道ふ、便ち

【四四】 そんな方は中無い。
【四五】 餘計な是非を説くではなけれど御宅に幾人も女ありても這の娘子におひつくものも無い。
【四六】 運あしく。
【四七】 飯は喫へども用は足らぬ

【四八】 不説的、アアどうもと云はんが如し。りつばならぬ出身。
【四九】 氣にくはぬ。
【五〇】 さいしよの奥さん。

慢曲兒を唱ふ的の張惜惜、我は他是【五一】路岐の人なるを見て喜歡せず。婆子又道ふ、官人、你と李嬌嬌と却て長久なり。西門慶道ふ、這箇の人、見今取つて家裏に在り、若他の家に當るを會するを得る時、自ら【五二】他を冊正し了する多時ならん。王婆道ふ、若這般の官人の意に中る有らば、宅上に來りて説くも事を妨ぐる没きや。西門慶道ふ、我的の爹娘俱に已に没し、我自ら主張する、誰か敢て箇の不の字を道はん。王婆道ふ、我自ら要を説ふのみ、急切に那裏に官人の意に中り得るのあらんや。西門慶道ふ、甚麼と做了便ち没き、只恨む我夫妻の縁分上薄く、自ら撞着せず。西門慶と這の婆子一遞一句、説了する一回なり。王婆便ち道ふ、正に好し酒を喫するに、却て又没し、官人老身の【五三】差撥を怪む休れ、再び一瓶兒の酒を買ひ來り喫す如何。西門慶道ふ、我が手帕裏に五兩來の碎銀子有り、一發撒して你的處に在り、喫せんと要る時は只顧取來れ、多的は乾娘便ち就ち收了せよ。那の婆子官人に謝了し、身を起して這の粉頭を暖る時、一鍾の酒肚に落ちて、春心を開動し、又自ら兩箇の言來り語去る都て意有り、只頭を低くして却て身を起さず。那の婆子滿臉笑を堆下し來り説道ふ、老身去いて【五四】一瓶兒の酒を取り來り、娘子の與に再び一杯兒を喫せしめん、娘子の大官人を相待つて坐一坐せしむるを勞する有り、注子裏に酒有りや没しや、再び兩盞兒を篩ぎ、大官人と喫せよ、老身直に縣前の那家に去かん、好酒有り一瓶を買ひ來らん、【五五】好歌兒の擔閣有らん。那の婦人口裏に

【五一】 其出身を喜ばぬ也。
【五二】 本妻に直す。
【五三】 しばらくの間があらう。

【五四】 さいしよの奥さん。

說道ふ、用ひざれと、坐着して却て身を動かさず。婆子出て房門前に到り、便ち索兒を把つて房門を縛了し、却て當路に來りて坐了す。且説く、西門慶は自ら房裏に在り、便ち酒を斟み來りて那の婦人に勧め、却て袖子を把つて卓上に在りて一拂し、那の雙筋を把りて地下に拂落す。也是縁法湊巧し、那の雙筋正に落ちて婦人の脚邊に在り、西門慶連忙に身を蹲し下り去つて拾ふ。只見那の婦人の尖尖的の一雙の小脚兒、正に趨げて筋の邊に在り。西門慶且筋を拾はず、便ち那の婦人の繡花鞋兒上に去て、捏一把す。那の婦人便ち笑將起來し。說道ふ、官人、囉喞を要するを休めよ、你真箇に我を勾搭するを要するか。

西門慶便ち跪下して道ふ、只是娘子小生を作成せよ。那の婦人便ち西門慶を把つて樓將起來す。當時兩箇王婆の房裏に就て脱衣解帶し、共枕同歡す。正に似たり、

- 【三五】 なば。
- 【三六】 通り路。
- 【三七】 縁はうまく。
- 【三八】 趨は足の擧がる也。
- 【三九】 ちよとつれる。
- 【四〇】 いたづら、からかひ。
- 【四一】 我を思ひてか。

頭を交ふるの鴛鴦水に戯れ、頭を竝ぶるの鸞鳳花を穿つ。喜孜孜として連理枝生じ、美甘甘として同心帶結ぶ。朱唇を將て緊貼し、粉面を把つて斜に偎す。羅襪高く肩膊の上に挑げ、一灣の新月を露はし。金釵倒まに枕頭の邊に溜り、一朶の烏雲を堆す。誓海盟山、搏弄し得て千般旖旎、羞雲怯雨、揉搓的萬種妖嬈。恰恰の鶯聲、耳畔に離れず。津津の甜唾、笑つて舌尖を吐く。楊柳の腰、脈

脈として春濃やかに。櫻桃の口、呀呀として氣喘ぐ。星眼朦朧として、細細汗は流る香玉顆。酥胸蕩漾として、涓涓露は滴る牡丹の心。直饒匹配眷姻偕にするも、眞實偷期滋味美なり。當に二人雲雨纔に罷み、正に各衣襟を整へんと欲す、只見る王婆房門を推開して入來り、說道ふ、你兩箇好事を做し得たりと。西門慶と那の婦人と一驚を喫了す。那の婆子便ち道ふ、好呀、好呀、我你を請うて來りて衣裳を做らしむ、曾て你をして來りて漢子を偷ましめず、武大知るを得ば我を連累すべし、若かず我先づ去つて出首せんと、身を回し便ち走らんとす。那の婦人、裙兒を扯住して道ふ、乾娘、饒恕し則箇、西門慶道ふ、乾娘低聲せよ。王婆笑ひ道ふ、若我が你等を饒恕するを要せば、都て我が一件の事に依るを要す。那の婦人便ち道ふ、説ふ休れ一件と、便ち是十件なるも、奴也乾娘に依らん。王婆道ふ、

你今日より始と爲し、武大を瞞着し、毎日約を失して大官人に負くを要せざれ、我便ち罷め休せん、若若一日來らずば我便ち我が武大に對して説かん。那の婦人道ふ、只乾娘に依着して便了せん。王婆又道ふ、西門大官人、你自ら老身の説得を用ひず、這の十分の好事、已に都て完了す、許す所の物信を失すべからず、你若負心すれば、我也武大に對して説ふを要す。西門慶道ふ、乾娘放心せよ、竝に信を失せず。三人又幾杯の酒を喫す、已に是下午の時分。那の婦人便ち身を起し道ふ、武大那厮將に歸り來らんとす、奴自ら回りに去らんと、便ち後門より越過して歸家し、先づ去つて簾子を下

- 【二六】 偷期、密通。
- 【二七】 ゆるし下され。
- 【二八】 ひるすぎ。

了す。武大恰も好し門に進む。且説く王婆西門慶を看着して道ふ、好手段なるや癡や。西門慶道ふ、端的に乾娘に虧了す、我家裏に到り、便ち一錠の銀を取り、送來して你に與へん、許す所の物、豈敢て味心せんや。王婆道ふ、眼に望む旌節の至るを、専ら等つ好消息、老身をして棺材出たりて挽歌郎の錢を討ねしむるを要せざれと。西門慶笑了りて去る。話下に在らず。那の婦人、當日より始と爲し、毎日王婆の家裏に暫過し來り、西門慶と一處と做り、恩情漆に似、心意膠の如し。古より道ふ、好事門を出でず、惡事千里に傳はると、半月の間に到らずして、街坊隣舍、都て知得了し、只武大一箇を瞞いて知らざらしむ。詩有り證と爲す、

半响の風流何の益かあらん、一般の滋味誇るを須ひす。他時禍は起らん蕭牆の内、悔殺せん今朝野花を戀ひしを。

【二六九】こども。

【二七〇】ちぢ。

章句を斷じ、話は兩頭に分る。且説く本縣に箇の小的あり、年方に十五六歳、本身姓は喬、軍と做りて鄆州に在りて生養せられたる爲に因りて、就ち名を取りて鄆哥と叫做す、家中止一箇の老爹有り、那の小厮生れ得て、乖覺なり、自來ただ縣前の這の許多の酒店裏に寄りて些の時新の菓品を賣る。時常西門慶の他に些の盤纏を齎發するを得。其日正に一籃兒の雪梨を尋ね得て、提着し來り、街を遶りて西門慶を尋問す。又一等の多口の人有り說道ふ、鄆哥你若し他を尋ぬるを要せ

ば、我你に一處を教へて去き尋ねしめん。鄆哥道ふ、阿叔を聒噪す、我をして去いて他を尋ね得て見、三五十錢を賺得て、老爹を養活せしむる也好し。那多口の道ふ、西門慶他如今炊餅を賣る武大の老婆を刮上し了し、毎日只紫石街上王婆の茶坊裏に在りて坐地す、這の早晚、多定正に那裏に在らん、你小孩子家、只願撞入し去るも妨げざらん。那の鄆哥這話を得了し、阿叔の指教を謝了し、這の小猴子籃兒を提了し、一直に紫石街を望んで走り來り、逕に茶坊裏に進入し去る。却て好し正に王婆の小凳兒上に坐して緒を續むを見る。鄆哥籃兒を把つて放下し、王婆を看着して道ふ、乾娘拜揖す。那の婆子問道ふ、鄆哥你這裏に來りて甚麼を做す。鄆哥道ふ、大官人を尋ねて三五十錢を賺け老爹を養活せんと要。婆子道ふ、甚麼の大官人ぞ。鄆哥道ふ、乾娘、是那箇なるを情知せん、便ち只是他の那箇なり。婆子道ふ、便ち是大官人なるも、也箇の姓名有らん。鄆哥道ふ、便ち兩箇字的なり。婆子道ふ、甚麼の兩箇字的ぞ。鄆哥道ふ、乾娘、只是要を作すを要す、我西門大官人と句話を説くを要すと、裏面を望んで便ち走らんとす。那の婆子一把揪住し道ふ、小猴子那裏に去る、人家屋裏各内外有り。鄆哥道ふ、我房裏に去いて便ち尋出し來らん。王婆道ふ、含鳥糊麻、我が屋裏に那ぞ甚麼の西門大官人有るを得ん。鄆哥道ふ、乾娘、我喫自阿を要せず、也些の汁

【二七一】おぢさん(眞の叔父にあらず)やかましいいでせうが。

【二七二】たいてい。